

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編

安政二年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数六十六枚）」の記載あり〕

目録

- 開港可否列藩へ諮詢宣命〔安政五年戊午三月二十日なり〕 安政二乙卯年
- 中山正親町其他建言〔安政五年戊午三月七日なり〕 安政二乙卯年
- 水戸前黄門公ニ登營ヲ命ス 安政二乙卯年 月十四日〔八〕
- 米国人内地沿海測量請願ニ就テ齊彬公申稟〔安政二乙卯年六月十一日〕
- 齊彬公福井侯ニ与フル書 安政二乙卯年十月廿六日
- 蒸気船運用伝習意見案 安政二乙卯年十一月
- 福井侯齊彬公へ内書 安政二乙卯年十一月十二日
- 齊彬公福井侯ニ与フル内書 安政二乙卯年十一月廿八日

阿部侯齊彬公へ贈ラレシ内書 安政二乙卯年十一月廿四日

福井侯齊彬公へ内書 安政二乙卯年十二月五日

福井侯水戸老公ニ贈ラレシ内書〔安政二乙卯年十二月十一日〕

福井侯齊彬公ノ心事ヲ論ス 安政二乙卯年

齊彬公慶永公へ御書翰 安政二乙卯年十二月二十四日

米使上申書ニ対シタル達書 安政二乙卯年

和蘭王汽船献呈ニ就テ船中規則艦將上申〔安政二乙卯年八月十七日〕

魯国船修復事件上申書 安政元甲寅年十二月二日

魯国船下田ニ於テ遭難上申書 安政元甲寅年十二月四日

魯艦颶風ニ遭難シタル事実 安政元甲寅年十一月

魯艦遭難事実上奏 安政元甲寅年十二月廿三日

魯国使節約条上申書 安政元甲寅年十二月廿二日

水野友五郎外国処分意見 安政元甲寅年十二月

以上二十条

三二六 開港可否列藩へ諮詢宣命〔安政五年三月二十日〕

墨夷之事
神州之大事〔愚カ〕 國家之安危ニ係リ、誠ニ不容易、奉始
神宮、御代々へ被對〔為脱カ〕、恐多被

思召候、

東照宮以下之良法ヲ御变革之儀ハ、闔国人心帰向ニモ

相拘リ、永世安全難測、

深被惱

叙慮候、尤往年下田開港之節条約不容易ノ上、今度仮

条約之趣ニテハ、

御国威難立被

思召候、諸臣群儀ニモ、今度条々、殊ニ

御国体ニ拘リ、後患難測候由言上候、猶三家以下諸大

名へ被下

台命、再応衆議ノ上、可有言被

仰出候事、

勅誼ノ趣、早々關東へ罷帰リ、

大樹公へ可被申入被 仰付候事、

〔天日本古史書〔幕末外國關係文書〕にて抄訂〕

三二七 中山正親町其他建言〔安政五年三月七日〕

夷族申置候一件、誠以

神国重大ノ変異ニ付、愚昧ノ者共恐入候得共、先日兩

度以書付申上候、右追々 御評定之御事ト存候へ共、

実ニ昼夜憂苦忘寝食候間、亦々令言上候、

一天照皇大神以来、赫々タル

神国、当

御代〔御代ニテ天〕蛮夷ノ国ト伍ヲナシ候テハ、

神国ノ御諱被奉対

皇祖、何共恐懼歎息之至ニ候、近年連々天災滌

神慮ヲ可被尊信ト存候、

一堂々タル

皇国トシテ、蛮夷ノ猛夷ニ驚赫シ、彼驕傲無礼ヲ捨

辱ヲ遺シ、万世一系之

神国ヲ、一溪落貶叢

何様ナル狂妄之徒ノ器量ニ哉、今直ニ

叙慮伺ノ為、面々上京ニテ

御沙汰之趣ニモ不応、一切意味難解、若 京都御同意

之趣ヲ以、御列国大名以下万民ヲ押付候積カト被存候

へ共、真実

御同意不被為之儀ハ、何レモ不貫徹、却テ關東之為、

衆心ヲ破ル基ト不審存候、

一墨異一使者応接スル驕情不容易由ニ付、尚更心苦仕候、

子細ハ此上諸蛮追々來集、表ニハ互市利潤ヲ説キ、実

〔美ニ所欲ヲ極メテ〕
二不欲ヲ取極、拒メハ大砲・軍艦ヲ以恐赫セシムルノ

衷情、本ヨリ日本ヲ併呑シ、國人ヲ管俗シ、結構心シ

テ、追々姦謀遠慮ニ陥リ夷族所々散居シ、好言利欲ニ

テ若国民ヲ誘ヒ懐ケ、彼方ノ教法ニ従ハシメ、能々人

氣ヲ察シ、地理・要害ヲ知り、方々ニ巢居ヲ構ヘ置、

終ニハ許シカタキ難題ヲ設ケ、兵端ヲ開キ、

皇居ヲ押領スルノ時ニ至リ、何ヲ以敵対スヘクヤ、仮

令兵端ヲ不開トモ、右之通ニ侵不奪不壓ノ衷情、广大

之猛威ヲ張り、隨意ニ

皇國ヲ脅制スルノ時、不戦シテ降参ノ場ニ至ルヘシ、

神國ニ生レテ、匹夫ニ立トモ、御惜キ次第ニハ無之哉、

況從來太政ヲ領スル諸藩ノ人々、至誠之赤心承度事ニ

候、且右之場合ニ及候節ハ、

乗興ヲ何レノ地ニ奉安、大樹公御下致条約候輩モ、又

何レノ地ニ遁レ、御安居御心得ニ候哉、關東始諸大名

之見込、詳ニ被

聞食候上、御返答御沙汰肝要ニ存候、

右ハ毎々恐入候ヘ共、奉為 国家伺候間、不顧忌諱言

上仕候事、

〔三月七日〕

中山忠能

正親町實愛

正親町實徳

八條隆祐

中院通富

橋本實麗

野々宮定功

三二八 水戸前黄門公ニ登營ヲ命ス

○この文書は、本文第一四四号文書中の二二(安政二年八月十四日附老中達)と同文により略す。

三一九 米国人内地沿海測量請願ニ就テ齊彬公申

稟

久世大和守達

魯英米条約既ニ成リシ後、北米合衆国測量船ノ主頭「シヨ
ンロツテイル」氏ヨリ、日本近海測量ヲ許サレタシトテ請
求書ヲ送リタリ、右ニ付閣老久世大和守ハ、左ノ達書ヲ大
広間ヨリ庶流ニ至ル迄廻達ス、

○以下の文書は、本文第五〇号文書の一(安政二年八月十三日付
老中達)と同文により略す。

三二〇 齊彬公福井侯ニ与ル書(参考昨夢紀事抄)

一十月廿六日、当今ノ時勢ニ付、薩州侯へ節儉質素ノ御
処置御相談、且佐倉侯出身ノ次第ノ事ヲ被仰進タルニ、
(堀田正徳)
今日御返書ノ内如左、

堀備(堀田備中守)ノ儀云々、是又不思議ニ御座候、
此儀ハ老公(水戸老公)御承知ノ上ト存候処、按外至
極ニ御座候、閣中ノ様子内々承リ候へハ、堀田出候
テ万事心配薄相成候ト申向、有之候哉ニ承リ申候、
右ニ付テハ色々申上度事モ御座候、拜眉万々可申上
候、堀田撰拳ノ儀一向不相分候へトモ、矢張阿(阿
弘、老中)(備前守忠雅、老中)
(部)ト牧(牧野)トノ所存ニテ無之哉ト存候、溜詰ヨ
リ井(井伊直弼)等之内、閣中ノ儀色々申候故、其為
撰拳ニテハ無之哉ト存候、猶又御賢慮何度奉存候、
追々命令モ下リ、漸々善ク可相成光景ニハ有之、難
有事ニハ候へトモ、小事枝葉ノ事多キ様ニ奉存候、
非常ノ災害到来故、非常ノ御処置有之候テ、天下一
新有之度事ニ奉存候、御賢慮何度奉存候、
一着服ノ事承知仕候、屋敷(藩邸ヲ云)ニテハ、此度追
々改正可仕ト奉存候、女中向ハ御住居等如何ノ御様
子候哉、伺度奉存候、
一道中供ノ儀致拝承候、

一御住居其外弥節儉御用ヒニテ、御手輕ニ御修覆ノ貴
慮ノ由、御尤千万ニ奉存候、小子方モ当时芝屋敷可
也ニ修覆(大地震後修繕)出来候場処モ御座候へ共、
此度ハ不残建替可申考ニ御座候、委細拜眉可申上候、
此節ノ機會不失建直シ、女中等減シ可申内存(節儉令
及ヒ大御書院建築ノ条、参照スベシ)ニ御座候、猶拜眉
万々可申上候、

一参上ノ儀辱奉存候、来月ニ相成候ハ、罷出候様可
仕候、先ハ過日ノ尊答如此御座候、頓首、

十月廿六日

猶々、御自玉專一奉存候、昨日捉飼申付候間、鴨致
進呈候、已上、

(昨夢紀事(日本史籍協会叢書)にて校訂)

三二一 蒸氣船運用伝習意見案(海軍記事抄)

永井岩之丞申上候、

蒸氣船伝習之儀、評議仕候趣申上候書付、

松平河内守

水野筑後守

塚越藤助

村垣與三郎

勝 田 次 郎

中 村 爲 彌

設 樂 八 三 郎

蒸氣船伝習之儀ニ付、永井岩之丞相伺候趣、一同評議
仕候処、三ヶ条目

御靈屋拜礼ハ格別、其外伝習之儀ニ付、船中出島等へ
罷越候節、時宜ニ寄、歩行ニテモ罷越ト之儀ニ候得
共、御府内ニテモ馬勤之儀、別テ異国人共在留之地ニ
候得ハ、行粧等余リ省略ニ過候テハ、自然 御威光ニ
モ拘リ可申哉ニ付、右ハ行粧等、格別省略不致義ト相
心得可申旨被仰渡、九ヶ条目町便差立方ノ儀ハ、兼テ
長崎奉行へ申談置、岩之丞ヨリ直ニ会所へ相渡、差立
候事ニ仕候ハ、強テ差支之筋モ有之間敷、教導之蘭
人共へ褒賞其外諸雜費之義モ、前以其心得ニテ取計候
得ハ、時日後レ可申訳モ無之、手限ニテ仕払候義ハ自
然心弛ニモ相成候間、金高ハ五千兩ヲ目当ニ致シ、入
用之廉々奉行へ申談、仕払方ハ会所ニテ取計候方可然、
蘭人へ遺物之儀モ、全一時之賞詞ニテ、酒・菓子之類
遣候節ハ格別、品物遣候節ハ、長崎奉行へ申談、品物
取極、右奉行ヨリ「カヒタン」へ申渡候手続ニ無之候

テハ、同所規則モ相立兼候間、右之趣ヲ以取計候様被
仰渡、十ヶ条鹽飽島水夫旅中人用ハ相除、増御手当無
之候テハ、教示向差ハマリ薄ク、出精致間敷、因テハ
兼テ御沙汰御座候浦賀表之御手当ニテハ、相当致間敷
ト之儀無謂儀ニモ無之、浦賀表ニテ奉行乗様シ等致候
節ハ、定式之外別段、粮米・味噌・薪等相渡候ニ付、
此度昇平丸へ乗組候鹽飽島水夫共へ、一日老人銀老奴
五分宛被下候見合モ有之候間、其日限り働キ候者共へ、
別段為御手当老奴五分宛、相渡候様被仰渡候方可然、
十二ヶ条目、矢田堀景藏・勝麟太郎其外

御目見以下之者共、伝習御用出役扱ト相唱候様被
仰付度ト之趣ニ候得共、右ハ当八月、岩之丞へ御渡シ
被成候御書付之内、蒸氣運用伝習御用之者多人数ニテ、
右之内ニハ自然如何敷儀ハ勿論、指揮等相拒候様之儀
モ有之候ハ、同等ニ不及速ニ歸府可申渡旨被仰渡、
其段銘々へモ相達置候上ハ、別段出役等之名目ニ改不
申候共、差支筋ハ有之間敷儀之処、右被仰渡ト行違ニ
相伺候儀ト相聞候間、支配向同様之心得ニテ、取扱可
申旨被仰渡候方可有之、八ヶ条目、蘭人給料并別紙
和解之趣、長崎奉行申上候書面へ評議致シ、去月十三

日申上候間、別段評議不仕、其外之ヶ条ハ不都合之儀
モ相見不申候間、伺之通被仰渡、尤発砲并御金渡方等
之儀ハ、長崎奉行ヘモ被仰渡候方ト奉存候、依之御下
ケ書面ハ、御目付ニ相廻シ此段申上候、以上、

卯十一月

〔大日本古文書(書外関係文書)ならびに海軍歴史(勝海舟全集)にて校定〕

三三二 福井侯齊彬公(御内書〔昨夢紀事抄〕)

一十一月十二日、薩州様へ被進御内書、左之通、

連日好晴寒氣相倍候処、弥御清安珍重之至御座候、
陳ハ昨夕ハ態々御賁臨、寛々拜話、本壞ノ至御座候、
乍併此節柄余リ魚末ノ事共ニテ、御氣ノ毒御座候、
御帰邸モ遅刻相成可申、御障等モ無之哉承度候、其
節纏々御懇篤御内話ノ趣、万謝ノ至御座候、御帰後
モ尚又及熟考候事ニ御座候、且極密爲御見被下候辰
ノ紙面返上、慥ニ御落手可被下候、右紙中ニ付テモ、
高諭共モ委細相心得申候、将又其節荒々御咄申候、
今般佐倉(堀田)へ相達候愚存別冊(別冊送ス)写シ
一、窃ニ入貴覽申候、御内見可被下候、高慮トハ相
違モ致候半欵、何分拙家ノ貧困、如何ニモ強兵ノ手
段無之、実ニ当惑ノ次第故、右様存詰候趣、書取申

上候事ニ御座候、尤富国強兵ハ順路ニ可有之候得共、
手段モ無之、荏苒歲月相移候内、衷情ハ何トモ難計、
万一ノ儀有之候テモ、迷惑ノ外無之ト存候得ハ、実
以不安次第故、御大事ヲ存シ、且自家着実所置ノ趣、
陳述ノ事ニテ、右ノ所置ヨリ富国ニ相連ヒ候積リニ
候、定テ拙策ニ可有之、尤決テ理屈張リ候様ノ所存
ハ毛頭無之、何分体認実意、当世態々御大事ト存
詰候故ノ事ニ御座候、右ハ不外御懇意ノ事故、鄙衷
及吐露候、尊考ノ趣猶又相伺度、高慮良策御教示奉
伏希候、右ハ昨日ノ御挨拶、且一条極密御相談旁如
此御座候、頓首、

十一月十二日

尚々、弥增寒氣、御仮住居ト申、
別テ御服明等(誰
昨・服
ノ忌服乎、今知ルニ由ナシ)御加養專要相祈申候、只々
モ本文ノ趣、尚又御教示希申候、且別冊御覽後御返
却可被下候、以上、

〔別テ御加養專要相祈申候〕
〔昨夢紀事(日本史籍協会叢書)ならびに照國公文書にて校訂〕

三三三 齊彬公福井侯ニ与ル内書〔昨夢紀事抄〕

一十一月廿八日夕、薩州様ヨリ御内書、左之通、

一筆致拜啓候、先以弥御清榮奉賀寿候、然ハ過日ハ

罷出、寛々拜話千万辱奉存候、其節御話申上候御書付等御廻シニ相成、御細書ノ趣細致承知候、御書付篤ト拝見仕候上早速貴答可申上処、彼是延引(原註、訳合跡ニ申上候)恐入奉存候、扱御書付之御趣意至極御尤ニ奉拝見候、御書面之通ニ候へハ、万事全備相違無之、御同意奉存候、乍併愚存之趣モ候へハ、無遠慮申上候様被仰付候間、不申上モ如何ニ付、無腹藏左ニ申上候、

一 御建白ノ御一条、至極御尤ニ奉存候、非常ノ御時節故、非常ノ御所置当然ノ事ニテ、御同意至極ニ候得共、諸大名参暇(大小名参覲交代ヲ云)之義ハ、徳廟(吉宗公有徳院ト諡ス)之節、既ニ議論有之候処、御威光ニ相抱^(抱)リ候トノ事ニテ、御評議モ相止申候ヨシ承及候間、御明論ナカラ、トテモ御評議決シ申間敷哉ト奉存候、

一 御文段之内、只今ノ御所置ニテ海防被仰付候テモ、必死ニテ御勤ノ外無之云々、其外御文言ノ内同御趣意ノ処、是又至極御尤ニ候得共、对公辺少々被仰上過ニハ無之哉、辰(阿部正弘)ニテ心配ト被申候ハ此所ニテハ無之哉ト被存候事、

一 辰(全上)ノ心配ト被申候処、段々相考候ニ、若哉閣中ニテ余リ被仰上過ト申人御座候哉トモ存候間、過日御書付拝見後、辰へ内々文通イタシ、拝顔ノ事申遣シ、御書付モ致拝見候趣申遣シ、御趣意ハ御尤ノ義ニ候得共、当時難被行義モ可有之、且少々被仰上過候所モ御座候哉ニ存候間、一応御申下ケノ上、程能御取直シノ方可然哉、又ハ御差出ニ相成候様ノ事故、其尽ニテ可然哉ト申遣置候処、延引ニテ二十四日、別紙(次条ニ在ル書参照)ノ通りニ申参候間、極内々申上候間、篤ト御勘考ノ上、御取直シ被仰上候方可然哉ト奉存候、折角天下ノ為被仰上候テモ、御不都合相成候テハ、御誠忠モ却テ無ニ相成候訳ニ候間、御不本意ニハ可有之候へトモ、当世可被行程ノ良法被仰上候方、御忠節モ相貫キ可然哉ト愚考仕候、辰ニテ別紙ノ通申越候処ニテハ、何カ無余儀御按ジ申上候テノ事ト奉存候間、呉々モ御勘考第一ニ奉存候、先日ヨリ貴答モ可申上処、辰ヨリノ返事日々相待候テ、按外延引ニ相成恐入奉存候、廿五日ハ登城、一昨日客来、昨日ハ飛脚到着ニテ、又々延引、呉々御仁免奉希候、

一 御明論被行候様成御時節ニ候得ハ、是迄ノ如キ御所

置モ有間敷処、扱々可敷義ニ奉存候、三代井田ノ法、

良法ニ相違無之候得共、時勢不得止事、常平社倉ノ

法ニ押移リ候趣ニ相見得申候故、当時相応ノ御良策

被 仰上候義、專一ノ御忠節カト奉存候、色々愚意

申上恐入候得共、不申上候テハ御懇意ノ詮無之候間、

乍憚心底不殘申上候間、篤ト御勘考可被下候、

一 二十五日ニハ登 城仕候処、於

御座ノ間御大小拝領(軍艦昇平丸献上ニ就テノ拝領、第

十卷参照)被 仰付、重疊難有奉存候、御吹聴旁奉申

上候、

一 過日申上置候御縁組(篤姫君)ノ義、水府(初水戸老

公ハ御不平ナリシト云)ノ御都合如何候哉、御内々相

伺申候、其内猶マタ申上度儀モ有之候、

一 過日ノ御書付返上仕候、

一 色々前文申上度儀モ御座候得共、筆紙ニ尺兼申候、

来月初旬御登 城ノ節、鳥渡御知ラセ奉希候、其節

拝眉万々可申上候、先ハ過日貴答旁要用申上度、如

此ニ御座候、恐々頓首、

十一月二十八日

猶々、時氣折角御自愛專一奉存候、以上、

(市米の註なり)

次条ニ記ス阿部侯内書参看スベシ、

(昨夢紀事(日本史籍協会叢書)ならびに照園公文書にて校訂)

三三四 阿部侯齊彬公へ贈ラレシ内書〔昨夢紀事抄〕

一 勢州様ヨリ薩侯へ御密書、

左之通、内密申上候、過日以來早速貴答可致ト存候

処、何分更ニ寸暇無之、大延引御仁免可被成下候、

追々寒威相増候得共、被為揃愈御安清賀候、陳ハ越

前(慶永公)書面一条、段々御考ノ趣被仰下、一ト通

ナラス御熟慮被下、厚忝存上候、猶小生再三相考候

処、何分最早差出候事故、手続不都合ニ相成候テハ

不宜候間、貴君ノ御存慮被仰遣、今少シ勘考ノ上、

当世ノ時務相当ノ処ニ取直シ申出シ候方、却テ御忠

節ニ可相成、御同意ニ候ハ、備中殿(堀田)へ差出

候書面、一応下ケ相願、得ト取直シ差出シ候方可然

ト被仰遣、以後申出シ候事有之候節ハ、当節ノ時務

相当ノ処ヲ勘弁申上候方為可然ト、被仰遣候方至極

可然ト存候間、宜御勘考可被成下候、扱極内々申上

候、明日於

御座間

御懇ノ上意ノ上、御差ノ大小(前記軍艦献上ニ就テ)

貴君へ被成下候間、御心組モ可有之ト、不外事故内
密申上候、尤於扣所(未前通知)

思召ニテ、御菓子・御煮染等可被成下哉ト存候間、
此段モ極内々申進置候、是モ全ク一位様(廣大院殿)

厚御統モ有之事故、重キ御品被成下候事ニ有之候、
何モ内用事早々申上候、余ハ其内拝眉万々可申上候、
以上、

十一月廿四日

尚々、時氣御自愛專一奉存候、早々、已上、

御表書

伊勢守

薩摩守様

内用事

(市来の註なり)
道書、書取添へ慶永公へ贈ラレシ、文中ニ明カナリ、多弁
ヲ要セス、
(昨夢紀事(日本史籍協会叢書)ならびに照園公文書にて校訂)

三三五の二 福井侯齊彬公へ内書(昨夢紀事抄)

三三五の一 十二月五日、薩州侯へ被進御直書、如左、

一 翰奉拝啓候、嚴寒ノ候候処、愈御清安奉壽候、陳
ハ過日ハ貴官委曲被仰下候趣、段々御懇切御垂諭再
(答カ)

四拜読、御懇篤ノ趣、千万不堪感謝候、其後モ尚又

反覆熟思致候義ニテ、猶篤ト相考可申陳ト存候、扱
明六日、為伺御機嫌登 城仕候間、兼テ御約束ニ任

セ為御知申候、尤於 営中拝眉御咄可申候得共、心
緒万端暫時ニ難申尺候間、当時御仮住(大地震後)ニ

テ御迷惑有之候得共、近日ノ内推參、尚又御相談致
度候、其節愚意書取等モ持參可申候ト存候、右早々
過日ノ貴答且明日ノ儀、得御意度如此御座候、余期
面晤候、頓首、

十二月五日

尚々、時下嚴寒御自重專折申候、若明日御登 城無
之候ハ、本文推參ノ日限、何日比御指支無之哉、

御略答希申候、以上、

(市来の註なり)
前記阿部侯御往復書ニ対セラレタル御書翰ナリ、
(昨夢紀事(日本史籍協会叢書)にて校訂)

三三五の二 右之通り被仰進シニ御即報、如左、

拜見仕候、愈御安康奉賀候、陳ハ御紙上之趣致拝承
候、明日御登 城之由、是亦致拝承候、然ル処明日ハ
無余儀客来ニ付御断り申上候、御来駕ノ儀モ奉存
候得共、何分拝顔可仕座席、頓ト無御座候間、近日

中ニ登。城退出ヨリ罷出候様仕度、九日迄ハ内々無
抛指支モ御座候、十一日登。城之心得ニ御座候間、
其節罷出候テハ如何ニ候哉、十一日後ニ候得ハ、御
光駕ノ儀モ可也出来候得共、無抛九日迄ハ御断り申
上候、十一日罷出候得ハ別テ辱奉存候、先ハ早々申
上候、頓首、

十二月五日

(市来の註なり)

這ノ御書面ニ対シ、御面晤ハイツレニテアラセラレシヤ、

今知ルニ由ナシ、果シテ管中ニ於テ御對話アリシナラム乎

(昨夢紀事(日本史籍協会叢書)ならびに薩藩史料音彬公にて校訂)

三二六 福井侯水戸老公ニ贈ラレシ内書〔昨夢紀事

抄〕

一十二月十一日、水老公へ被進御内書、如左、

一 翰謹啓仕候、嚴寒ノ節御座候処、倍御勇健可被成
御起居奉欣賀候、其後ハ彼是御無音罷過、不本意奉
存候、寒氣御障モ不被為在候哉伺度候、尊館御修覆
等御出来相成候哉、此節別テ御困リ奉推察候、尚又
寒中御安否相伺度如斯御座候、謹言、

十二月十一日

再伸、嚴寒折角御厭御自重奉專祈候、連日晴色且烈

風無之、火説モ稀少ニテ欣然御座候、扱昨朝国産雪
魚到来、如例致献上候、右献余進呈ニ付、呈書可仕
筈之処、折柄殊ノ外多事罷在候ニ付、乍失敬不取敢
為指出候儀ニ御座候、遠来風味モ無覺束、御笑味ニ
相成候得ハ本意奉存候、次ニ野生健全ニ罷在候、乍
憚御降意可被成下候、頓首、

副啓、先日御内々申上候通り、櫻(堀田備中守)へ書
付指出置候ヘトモ、未何等ノ香風モ不来候、阿闍(阿
部)ヨリモ同然御座候、此節如何ノ御模様ニ候哉極
密相伺度、尚又心得ニモ可相成筋モ御座候ハハ、御
垂諭奉希上候、

一 薩州養女(篤姫君)

公边へ御縁組ノ儀ハ、御内定ニ相成有之由、不遠表
向被仰出ニ相成儀ニモ候哉、何分御治定ノ旨ニ承及
候、当年ハ余日モ無之候得ハ、来早春ノ御沙汰ニモ
相成候欤、右等ノ辺御承知ハ不被為在候哉、彼家ニ
テハ專支度有之、尚又心得方モ仕度ニ付、何卒御内
々相伺具候様、薩摩守ヨリ内々相頼申聞候ニ付、乍
序相伺候、貴報奉希候(第十一卷ニアル御依頼書参看)

一松前蝦夷地等ノ儀ニ付、過日縷々被仰下拜承仕候、其後種々探索モ仕候得共、事情相分リ候事モ無之、薩州等へモ承合候得共、是又相分リ候事モ無之候、何分先般被 仰出公辺御取締リニ相成候儀へ、御尤ト奉存候、且有志ノ者蝦夷地へ罷越、致開業候様被 仰出、是亦御尤ニ存候得共、追々好事ノ者寄集候テ、後害ヲ生シ候儀出来候半モ難計、且箱館港ノ儀モ風説ニテ承リ候得ハ、諸夷輻湊買賣交易ノ趣、至微品モ銀錢等ニテ高価ニ相求、専ラ愚民ヲ懐候手段ニモ有之候哉、何分利ヲ以テ相誘浸潤遠謀ニモ可有之哉、(段々丸)追々ト邪教伝染等モ難計儀、何分右松前蝦夷箱館等ノ処ニハ、耽ト御取締リ出来候程ノ総裁ノ仁、御差置ニ不相成候テハ、唯小吏ノミニテハ小利ニ被誘候ハ勿論ニテ、呉々モ後患無覺束、御大事ノ儀ト愚考仕候、且下田へモ商船来舶ノ旨風説承リ申候、將又都下モ平ニ追々復常ノ趣ニ御座候、其後モ反復潜思仕候得共、先達テ陳告及御相談候拙策ノ外良案モ無之候、右等ノ辺、尚亦尊考垂教奉伏希候、以上、

右被仰遣候処、御即報ハ不来候事、

(昨夢紀事(日本史籍協会叢書)にて校訂)

三二七 福井侯齊彬公ノ心事ヲ論ス(昨夢紀事抄)
三二七の一
 一 去月来薩侯ト御応答ノ御次第ニ付、情思召メサセ玉フニ、福山侯ハ素ヨリノ御近親(福井侯従弟)ニ被為渡、且年来御入魂ノ御事ナレハ、此御方ヨリハ何事モ御覆藏ナク仰セ談セラル、ニ、彼御方ニテハ此御方へハ一トワタリノ御返答ニテ、傍辺ナル薩侯ヲモテ御諷諭アリ、又薩侯モ御同志ナルヨシニハ座セト、内々ハ交易ノ説ヲ御信用アリテ、福山侯杯へ左袒シ玉ヘル也、彼ト云ヒ、是ト云ヒ不審敷ニ思召セハ(公ハ元来開港ヲ主張セラレ、福山侯モ同論ナリシハ、弘化三年夏琉球処分ヲ以テ明ナリ、福井侯ハ其時分マテハ、全ク鎖港論ナリシハ、此御文旨ヲ以テ知ルベシ)、前記ノ如ク彼邸へ御入アリテ、御面談アルベント被仰入タルニ、夫ハ御断ニテ、此御方へ十一日ニ御出アルヘシトノ御事ナリシカト、十一日ハ此方ニ御障リアリテ御断リニナリニケレト、兎角今一 心薩侯迄御表裏ヲ打明ケ仰セ入レ置レ、其上ニテ御対顔アリテ、彼侯ノ御意中モ御討論アルヘシトノ心構ニテ(欠略アルカ、乱ス)

(昨夢紀事(日本史籍協会叢書)にて校訂)

三二七の一
 一 十二月十三日、薩侯へ被進シ御内書、左ノ如シ、

過日ノ密牘忝奉謹読候、敵寒ノ節候処愈御勝常奉寿候、陳ハ先日御狂駕ニテ御内話被下候折、御約束ニ付、後日建議書取写シ指上候処、御熟覽御同意ニハ候得共、諸大名参暇(參勤交代)ノ条、其他委纏ノ高論、且折角御為申上候テモ、不都合相成候テハ、微忠モ無ニ可相成候間、当世可被行程ノ良法申上候ハ、忠節モ相貫キ可然哉、勘弁ノ上取直シ差出候方可宜ト、品々被加御賢慮被仰下、一々拜誦不容易御配意、不相替御懇情万々奉感荷候、如尊論申過ニ相成候儀ハ、畢竟右書面辰(阿部正弘)へ見セ候事故、例ノ親戚辺少モ不避嫌疑、存付有之俣相認差越、都合ニヨリ佐倉へモ差出可申哉、辰へ及相談候処、少々認メ替差越可然トノ事ニ付、則其趣ニテ、尤廉立建白ノ心得ニモ無之、兼テノ懇意辺ニテ、内々及陳告候儀ノ処、懇諭ニテ心付候へハ、書面如何ニモ過当ノ文体不少、不念ノ至、今更慚愧ノ至御座候、兎モ角モ天下ノ御為メ第一ノ儀故、当節御採用ニモ可相成筋、何分ニモ認替可差出ハ勿論ノ儀ニ付、種々愚慮ヲ尽シ候へ共、元来野人ノ猷芹精誠存詰候事故、此上可相改趣意、更ニ不能愚慮、左候トテ御為ニモ

不相成候儀ヲ、其俣ニテ差置候儀ハ不本意ノ至、甚致当惑罷在候、教諭モ相願度、且過日面話、其上書面等ニテ御承知ニハ候へ共、鄙衷尚亦左ニ吐露及御相談候、

一 当節専ラ必戦必死ヲ致主張候へ、従是和ヲ破リ、好テ兵端ヲ開候意味ニハ曾テ無之候得共、近年夷狄覬覦ノ念相萌候後、天災地妖引統、既ニ

愼廟(家慶公愼徳院ト諡ス)ノ御末年ニ至リ、墨夷浦賀港内迄モ乗入、紛紜ノ間

御当代ニ被為替、尔来諸夷〔愈力〕懸隙ヲ窺、天災モ亦

帝闕ノ炎上ヲ始、諸国ノ烈震洪波等頻々ニテ、終ニ今般ノ大變都下ニ相迫候、如斯折合候モ必偶然ニハ有之間敷、恐怖ノ至深考候得ハ、豐太閤ノ朝鮮ヲ征スル、彼レ荏苒トシテ終ニ懲懋録ノ戒ヲ万代ニ残シ〔例カ〕候儀モ有之、当時追々万国輻湊ノ勢ニ就テハ、素ヨリ彼ノ遠謀貪心不可計、仮令従是ハ平穩ニ御取扱有之候テモ、彼ヨリ如何成巨害ヲ生シ候様ノ儀モ可有之故ト、実ニ戦兢ノ至ニ御座候、尤品海ノ御台場ヲ始、夫々御子備ハ有之候へトモ、銘々ノ覚悟ニオイトハ如何可有之哉、万一今般ノ烈震ノ如ク、彼ヨリ

不虞ノ変ヲ生シ候ハハ、自家ニ体察必可及狼狽ト、
 寢食不安心地御座候、依之近ク相譬候ヘハ、両山(空前)
 前)火防等ノ如クニテ、火事ハ不相好ハ勿論ニ候得
 共、被仰付候即夜ヨリ必出火ノ用意ハ致置候、必竟
 蛮夷ノ常情難計事ニ候ヘ共、器械ノ備不備ハ不論、
 如何成不虞ノ変相発候テモ、今日ハ今日丈ケ銘々必
 戦必死ノ覚悟相定置候儀、当世ノ急務、事理ニ於テ
 至当ノ事ト存候、右急務ニ付テモ、如尊旨、此節ノ
 貧諸侯、富国ニアラサレハ強兵ニモ至リ難キ儀共、
 御密策ノ趣御同意ニハ候得共、当世態人情ヲ以テ深
 致觀察候ヘハ、一昨夏(癸丑)丑船突然渡来ノ節々、
 衆人恐怖、不大方戦争ノ用意ニ及候事ニ候処、昨春
 (甲寅)再渡後ハ、敢テ驚駭ニ不及勢ニ候得ハ、若
 廟堂ノ御趣意、富国ヲ先ニシ、必戦ヲ後ニスルノ御
 意味ニ相成候テハ、自然世俗ノ情愈戦争ハ無之事ニ
 相心得、依旧因循怠惰ニ陥リ可申、左候テハ、富ニ
 随ヒ偷安ノ念ハ増長致候、器械モ備リカタク、強兵
 ニ至リ候期ハ無覚束、尚戦期ヲ御延シ被成候御権道
 ニテ、此上

有志ノ向モ追々解体、彼レ愈不備ヲ窺ヒ、不道ノ争
 端ヲ開キ、又ハ海賊侵掠等ノ変モ難計、仮令平穩ニ
 候トモ、馴致ノ弊ヨリ、邪教臭風推移リ候様ノ儀モ
 可有之欵、彼是
 御威光モ致陵夷候様ノ御運ヒニ相成候テハ、
 本邦ノ命令モ、今日ノ如クニハ有之間敷哉ト深ク案
 シ候ヘ共、甚恐懼仕候事ニ候、元来強兵ハ富国ニ出
 候事トハ乍申、当今夷狄ノ屈辱ヲ恥、四民心力
 ヲ合セ、
 神州ヲ保護スルノ勢ニ趨キ候ハ、自然器械モ相備
 リ、必強兵ニモ至リ可申、何分不可測ノ夷情、銘々
 今日ハ今日丈ケ必戦必死ノ覚悟ヲ相極、若シ不虞ノ
 変有之節ハ、勝敗ハ天ニ任セ、身命ヲ擲、鴻恩ヲ可
 奉報ハ勿論、幸ニ戦期一年相延候得ハ、一年丈ケノ
 器械モ相備ヘ、無怠慢心力ヲ尽シ、不数年シテ進撃
 征討ノ勢ニ相成候ハ、
 御国体凜然、
 御当家ノ鴻基モ弥万々歳ト奉仰望候事ニ御座候、右
 ニ付テハ、今日必戦必死ノ覚悟第一ニ有之、則チ必
 戦ノ儀ハ、兼テ水老公・辰モ同意ノ事故、此節柄小

生杯ヨリ突然致主張候ハ、老公・辰等ノ一助ニモ可相成欵、左候得ハ、天下ノ幸甚ト、一途ニ存込候事ニ御座候処、追々懇諭ノ趣ニテハ、存外ノ次第ニテ御為メヲ存詰候儀、却テ御為ニ難相成候テハ、実以テ恐縮ノ至御座候、尤此上私論ヲ張候存意ハ聊無之、如何様ニ成トモ当世御為筋ニ可相成儀、精誠思慮工夫相尺候得共、素々前文ノ志願ニ有之、且過日ノ書面ハ都テ参暇(参勤交代)ノ一条ヨリ出候事ニ候得ハ、右ノ条相改候ニ付テハ、体驗ノ趣意相立兼、左候テハ一通リ書面ノミ相改取繕指出候共、更ニ御益ニモ相成間敷、殆ト当惑罷在候、就テハ方今適當御為メニ可相成筋御見込ノ処、今一応深く相伺候上、尚亦愚慮相加へ、如何様ニ御為ニ相成候様仕度、篤及御相談候間、前文ノ次第、御参考昭亮垂教奉伏希候、不備、

十二月十三日

再伸、雪後近日殊更嚴寒、御仮住中別テ御加養專折、本文ノ趣書中ニ難尽候間、乍御邪魔近々推參、尚又意中吐露御相談預高諭度候間、書面御熟覽御考置被下候様希申候、十一日後ハ罷出候テモ、格別御指支

モ無之哉ニ被仰下候得ハ、来ル十五六日頃、弥御指支モ無之候ハ、致參上度、否貴答被仰下候様致度候、以上、

右被仰進候処、御返報彼方様ヨリ可被仰進者也、

(市米の莊なり)

右ニ對セラレタル御返翰、左ノ如シ、
(昨夢紀事(日本史籍協会選書)ならびに順聖公年譜にて校訂)

三二七の三
一十二月十五日薩州様ヨリ御返書、左ノ通、

一昨日ハ尊書辱致拜見候、愈御安康奉賀候、然ハ細事被仰下、且明十六日御光駕可被下段致承知候、甚手狭ニテ恐入候得共、昼過御光駕奉願候、委細拜眉万々可申上候、其余事モ明日可申上候、取込ミ早々申上候、頓首、

十二月十五日

猶々、御自愛專一奉存候、明日ノ儀別段不申上候、呉々麓末ノ儀ニ可有之、其段兼テ申上置候、以上、右ニ付愈明日九時過、御出殿ニテ可被為入、御結約御断被成候段、御直書被進候事、

(昨夢紀事(日本史籍協会選書)ならびに順聖公年譜にて校訂)

三二七の四
一十二月十六日午刻御供揃ニテ、薩州候ノ御仮住居麻布澁谷ノ別邸(澁谷村別邸)へ御入有、御対顔ノ上、無程

御閑談ノ御席トナリテ、公先日来御周旋ノ御挨拶被
為在、其上ニテ仰ケルハ、此程申入候ヒシ紙上ノ趣意
モ御汲取被下候ニヤ、彼書中ニ尺兼候事共ハ今日追々
吐露ニ及ヒ、其見込ノ程モ何度候ヘハ、猶又御示論相
願度ト御申述、將タ當時 廟堂ノ形勢、阿闍ノ心腹ハ
如何御見抜候ヤト問ハセ玉フニ、侯(齋彬公)御答アリ
シハ、御書面ノ趣モ御尤ノ事共ニ拝承候ナリ、サレト
此比^{十二月}十一日為伺 御機嫌登 營ノ節、阿闍へ対談致シ候
ヒシニ、何分埋屈クサキ事ヲ聞クハイヤナル様子ニテ、
何方ヨリモ何トモ言ハサル方カ、宜敷按梅ニ被察候ヒ
キ、其節阿闍ノ咄ニ、天下ヲ人ノ一身ニ比候ヘハ、骨
肉ノ差別アル如ク、肉ハ深疵ニテモ再ヒ癒合候得共、
骨ヲ碎キ候テハ取返シナリカタシ、大名ノ参暇ナトハ
骨ノ最モ大ナル者故、中々動スヘキ事ナラス(幕府大小
諸侯ヲ統御スルノ第一トス、実ニ骨髓トシタル者ナリ、文久ノ
初此骨髓ヲ抜キタルカ故、候互解ニ至レリ)トイヘル故、外
夷ノ交通条約ハ、骨子ニハ無之哉ト難問セシニ、阿ノ
答ニ、是ハ骨ニアラズ、肉ニ当レリ、異国通信ノ義ハ、
東照宮御代ニハ類ニ有之義ニテ、則編年集成ニモ、南
蛮船八十餘艘長崎へ渡来、神君御喜悅不斜トコレアリ

御三代ニ至ツテ御禁絶アリシハ、葡萄牙人ノ妖教ヲ日
本へ相伝セシヨリ、御停止トナリシ事候ヘハ、通信商
儀ハ敢テ神慮ニモ相背ケ申間敷トノ事候ヘハ、此節先
キ行キ致兼候事ヲ強テ及主張候ヘハ、唯理屈家トナリ
テ、何ノ所詮モナク候ヘハ、拙者式モ第二等ノ所置ヲ
申立、器械ニテモ整度ト存候迄ノ事ニテ候、尤第一等
ノ事モ、国評ニ及ヒ候事モ候ヘト、是ハ口外不致事故、
御咄ニハ及ヒ兼候トノ御事ナレハ、公サラハ 廟謨ハ
如何ノ結局ナラン、阿闍初モ定見アル事ニヤト問ハセ
玉フニ、侯ドフモ分別ハナキナルヘシト笑ハセ玉ヒテ、
兎角理屈ヲ申モノハ片付置ク意味ニテ、此比モ鍋島(佐
賀侯)出府シテ、長崎御用ニテ、於 營中阿闍へ相對
申入タリシカ、勢州へ定テ肥前ハエライ事ヲイフナラ
ント、甚懸念ナリシニ、肥前ノ勢ヒ、案ニ相違シテ平
穩ノ応待ナル故、勢州(阿部正弘)咄ノ次手ニ、此節ノ
御処置ニ付被心付候義モコレナキヤト尋ネタリシニ、
肥前ノ答ニ、近来ノ御処置一々無間然奉感服儀共ニテ、
如何ニモ此外ニ被成方モコレアルマシクト、挨拶ニ及
ヒシカハ、阿闍大ニ歡ヒ、肥前ハサスカニ事馴レタリ、
能ク時勢ヲ会シタリト、同僚へモ吹聴アリシト承レリ、

如此様子故、当り障リノ事ハ、聞クヲ厭フ有様ナリ、此節拙者ヨリ肥前へ申聞候ハ、貴兄ニハ不似合挨拶振ナリ、如何ノ故ト詰問セシニ、肥前ノイヘルハ、盛世ナレハカカル御所置アルヘクモアラズ、今トナリテ彼是陳スルハ至愚トイフヘシ、

公辺ニ悪クマレヌヤウコソ肝要ナレ、夫ヨリハ自国ヲ持固メ候事、当時セメテノ御奉公ト存セシ故、カクハ申述ヘタルナリト申候ヒキ、公、必戦必死ヲ今日ニ覚悟スヘク、且参暇ノ条等ハ如何御考量候哉、侯、此等ノ条々ハ親藩ノ貴兄スラ彼是ニラミツケ候事、況ヤ国持外様ノ面々ニテハ、仮初ニモ申出サレヌ事ニテ、直ニ嫌疑ヲ受候ハ必然ノ事、尤必シモ甚御同意、参暇ノ義モ勿論無間然候得トモ、前条ノ次第ナレハ、申出候トテ行ハルヘキ勢ニアラス、且参暇ノ事ハ、別テ拙者杯兎角自国へ引籠ランカトノ祝諭コレアル故、曾テ口外ナシカタシ、拙者ニ取テモ一ト道中一万余金ノ入費（道中ノ費用凡壹万両ノ定額ナリシハ事実ナリ）ニ候ヘハ、参暇間遠トナレハ、格別ノ有益ニテ願ハ敷事ニテ、肥前ナトモ同然ナルヘシ、其他大小遠近共ニ、ソレノ有
ノ有
余出来スヘキ良策ニ候ヘトモ、右等ノ意味故、決

テ主張ニ及ヒ難シト申サセ玉フ、公又右等ノ両条ヲ措テ、当世ニ行ハルヘキ良法アルヘキ歟、又富強ノ術イツレヨリ手ヲ下シ候半哉ト問ハセ玉フニ、侯阿闍ノ語氣モ人身ニ喩ヘ、参暇ハ御大法ノ骨子ナレハ適フヘクモアラズ、富強トテモ必然ノ術計、何処ニカアルヘキ、サレハトテ当り障リアル事ハ、イヨク行ハレカタク勢ナレハ、セメテハ諸侯ヲ初メ當時窮迫ノ向ヘハ、御手当アラハ、微益ナルヘクト申試候ヘト、夫サヘモ先キ行キセネハ、如何トモスヘキ様ハ候ハズト申玉フ、公、如何ニモ詮方ナキ次第共ニ候カ、先キニモイヒ玉ヘル第一等ノ御国評トハ如何成筋候哉、別段ノ御入魂ナレハ、御密議ナリトモ承リ度ト仰ケレハ、侯御他泄ハ御無用タルヘシトノ御口留ニテ御申アリケルハ、今後ノ見込ハ定メカネ候ヘト、世体追々衰弱ニ及フヨリ外ハアルマシク、夫ニ付テモ第一当時清国ノ乱ニテ、官兵大ニ破レ、無程明裔ニ被取潰可申趣、近来琉球ヨリ申通候トテ、則唐刻ノ支那沿革ヲ御小屏風ニ被成置候ヲ、御指示シアルヲ御覽アリシニ、詳細精密ノ地
〔北カ〕
図ニテ、北京領ハ残り少シ、南京ノ通路ヲ断チ切り、敵方ヨリハ砦ヲ夥敷築キテ、北京ヲ囲ミタル形勢ナリ、

侯、御申アリシハ、如此次第ニ候ヘハ、不遠シテ英・佛モ打混シ、三分トカ何トカイエル事ニ相成ヘシ、左候時ハ、日本ハ愈孤島独立トナリテ、頗ル危難ノ勢ナレハ、其機ニ乗シ、譬ハ中國大名ハ新和蘭陀、九州大名ハ咬囉吧・印度辺、陸奥諸侯ハ山丹・滿州杯掠奪ストイヘル如キ、大奮発大英断ヲ以テ、手ヲ弘メ兵威ヲ引立度トノ事ニ候ヒシカト、中々当今口ヲ開クヘキ時ニアラストノ御咄ナレハ(齊彬公ノ遠大ナル御思慮、此事ヲ以テ知ルニ足レリ、安政四五年ニ至リテ、琉球人ヲシテ臺灣・福州等凶南ノ事夷ヲ以テ証左トス)、公、夫ハ参暇ヨリモ目ノ覚メタル儀候ヘハ、御主張アリテハ如何ト仰セケレハ、侯、此節カ、ル大儀ヲ唱候儀ハ、親藩ノ貴家杯ナラハ、一ツニツ敵キテ済可申儀ヲ、外藩ノ我々式ニテハ五ツモ敵カレ可申、先年水老公サヘモアノ通ニテ候ヒキ、近年無拠時勢ニツレテ、少シツ、心持ハコレアリ候ヘト、ケ様成儀ハ、更ニ先キ行キ難致無益ノ儀ナレハ、当時相応ノ良法ト存候儀ヲ、申立ル外ハ候ハスト被申候ユヘ、右様進撃ノ大儀ハ行ハレカタク候ヘハ、其進撃スヘキ道行ヲ、只今ヨリ心懸相定置度トノ拙策ニテ候カ、道行キナクテハ、其他ニハ及ヒ

兼候半欵ト仰スルニ、其通ニハ候ヘト、其道行キサヘモ行ハレカタクニハ、殆ト当惑故、不得止事、器械ノ備ヘ、自国ノ警衛位ノ事、心掛ルヨリ外ハ候ハスト答ヘ玉フ、公、又問ハセ玉フハ、来春亞墨利加船渡来シテ、測量ノ事申立ナハ、御答ノ可否如何アルヘキ、侯、先日モ球地(琉球)ノ儀ニ付、水筑(水野筑後守)ニ逢ヒ内々探リ見候ヒシカ、筑後ハ是非「コンシユル」ノ事ト測量ハ断リ切ト申セシ故、戦争ニナリテモ英断爰ニ極リ居候哉ト承リシニ、其節ニ応シタル御評議モ工夫モアルヘント申候ヒキ、左スレハ、愈「コンシユル」モ測量モ亦御免ニ可相成ト推シ量ラレ候、公、然ラハ先比ノ発令ハ、全ク無益虚妄ニ帰シ可申、其処ハ如何アルヘキ、侯、又一時ノ御權道トカ申事ニナリ申スヘシ、已ニ昨夏布廷恬下田ヘ渡来ノ節モ、強テ登城ノ義ヲ申立ナハ、忽御許容ニモ可相成勢ナリキ、其訳ハ勢州・牧備等、皆々其節ノ応接ノ用ニ、華麗ナル官服ヲ、京都ヘ詔ヘ候テ織ラセタルカ、夏比出来シテ、此表ヘ廻リタル由ヲ承リテ候キ、公、又条約ヲ始夷慮ニ被庄候情状、譬ハ醜女ノ恋慕シテ、迫リテ男子ヲ推シ倒スニ至レトモ、其假ニナリテ手出シモセス、十

分畏服ノ姿ニテ候、畢竟右様屈辱ヲ受候テモ、腰刀ヲ抜ントモセサルハ、刃サヒテ切レサルカ、此時ニ当リテ抜カスンハ帯セスシテ可然、腰刀ヲ帯シタル大丈夫カ、婦女子ノ手コメニ逢フ如キ形勢ニ候ハスヤ、候、如何ニモ貴論ノ如シ、誠ニフカイナキ男子ニテ大息ノ外ナシ、公、水老公ハ兼テ御咄ニ及フ如ク、参謀ハ名ノミニテ案山子同様ノ御事ニテ、如何ニ御氣ノ毒ノ事ニハ候ハスヤ、イツソ御引入モ然ルヘカランカ、候、如何ニモ案山子看板ニハ候ヘトモ、マタモ御立物ニ水老有之故、老公ヘ対セラレ當時程ノ事モアルナルヘシ、万一老公御引等ニナリ候半ニハ、埒モナキ事ニモナルベケレバ、案山子ナカラモ御登城アル方増リ可申欲公、過日ノ書面阿闍ヘ御示シ御相談被下候半ニハ、今少シ和ラケテ、認直シタル方モヨロシカランカト問ハセ玉フニ、候、夫ニモ及候マシ、アノマ、ニテ阿ヘ相廻シ、相談ニ及ヒ候ヘシ、前ニモ申セシ如ク、淵底(淵底云々匡ス)ヘハ返答ハ如何ナラン、難計候ヘト、何ニモセヨ、今一応掛合候半トノ御事ナリシトソ、其余種々ノ御閑話、畢テ北ノ方(御廉中)ヘ初テ御対面アリ、是ハ一橋公ノ御女ニテ、公ノ御実方ノ從父姉妹

ニ座シタリ、夫ヨリ御養女ノ御方ヘモ御対顔アリ、是ハ薩侯御姉君(姉君誤ル、後卷履歴見ルヘシ)ノ御腹、御一門島津某ノ女(島津安藝忠剛第一女)ニテ、実ハ御姪ナリ、此御方ハ、

廣大院ノ尼公、御在世中御見近ノ御方御縁ニ被為成候様トノ御遺言ニヨツテ、此度(御遺言云々)、如何ニヤ尚ホ考ベシ

將軍家ノ御台所ニモ被為成シカトノ御沙汰アル御方ナリ、丈高クヨク肥ヘ玉ヘル(肥満ニ非ラス、婦人相当ノ体格ナリ)御方ニ座シタリトソ、是ヨリ種々ノ御饗応アツテ、初更ノ比、常盤橋ノ邸ヘ御帰殿ナリキ、

師質私云、薩侯英邁ノ質ヲ以テ、御領国ヲ統御シ玉ヘトモ、執政島津豊後ハ、薩ノ老公(齊興公)殊寵ノ権臣ナル故、老公ニ拠テ逆威ヲ振ヒ、朋党ヲ立、薩侯ノ富強経綸ノ政治ニ馴致セスシテ、關藩合一ナラス、侯権臣ヲ庄倒シ玉ヘハ、事老公(全上)ヘ波及シテ、御父子ヘ間隔ヲ生スル勢アリ、侯深ク是ヲ憂ヘ玉ヘ、不得止候ハ威ヲ幕府ニ借リテ(稍其実ヲ得タルカ如シ)、士庶ヲ鎮定シ玉ヘリ、然ル折柄ナル故、廣大院尼公ノ御遺言旁此養女(全上)ヲ御台所ニ居

へ參ラセ、窃ニ外威ノ權ヲ占テ、随意ニ政教ヲ施行

シ玉ハントノ御遠謀ニテ、深ク福山侯(阿部)ニ結ン

テ、親戚ニ等シキ約ヲナシ玉ヒ、今年モ御滞府アツ

テ、種々ニ御心ヲ碎カレ、此比トナリテハ、其事漸

ク成ルニ垂タリ、此事ニ付テハ、公モ 松榮院尼

公・水府老公并福山侯ノ御手許ヲ御周旋アラセラレ

シ御事ナリキ、

慶永公御壯年ナルカ故、御論旨熾ニシテ、時勢ニ適セサ

ルコトモ亦ナキニアラス、

三二八 齊彬公慶永公へ御書翰〔昨夢紀事抄〕

三二八の一
一十二月二十四日、薩州侯ヨリ被進タル御内書、如左、

寒氣ノ節御座候処、弥御清榮奉賀寿候、然ハ別紙ノ

通返答申越候間差上申候、尊書ノ趣ニテ承伏ト存候、

以後ノ処当世ノ良策御勘考專一ト奉存候、

前文ノ通故、先拜肩ニ不及ト奉存候、来春拜顔万々

可申上候、佛炮(佛式砲)返シ參候ハ、早々差上可

申上候、来書(阿部侯ノ書)御覽濟御返却可被下候、

頓首、

十二月廿四日

猶々御自愛專一奉存候、以上、

三二八の二
一勢州様ヨリ薩州様へノ御密翰、左ノ通、

御上書

薩摩守様

内用事

伊勢守

内密被仰下候華翰拝読仕候、如仰寒氣強候得共、倍

御清榮賀上候、陳ハ此程ハ南部遠江守結構被 仰付、

誠以目出度儀御同然安心仕候、右ニ付遠江守ハ勿論、

家来共迄モ仰天イタシ候程ノ由、嘸々ト察入申候、

右ニ付毎々御挨拶被仰下、何寄ノ品被下、厚難有存

候、且又越前守(福井侯)ヨリ申上候書面、内密為御

見得ト致一覽候処、同人申聞候処、随分尤ノ儀ニハ

候得共迎モ參リ不申、申サハ一兩年以前迄ハ、マタ

モ此理屈ノ処モ有之候得共、富国ヲ先ニイタシ、必

戦ヲ後ニスルト申儀ハ、可恥儀ト申セハ申ス様ノモ

ノニ候得共、時勢ノ变革、武備ノ強弱、国ノ貧富モ

少シハ考慮モ無之候テハ、只カラリキミニ相成、事

実ハ參リ申間敷カ御同然ノ国ト、江戸モノ、家来(

江戸モノ、ト各藩人トノ別、本記ノ如シ)ニテモ、海防ノ

議論ニハ強弱有之、固ニテ理屈ヲ申候ハ、先ツ越前守申聞候如クノ説多ク、江戸ニテ得ト異国ノ情態ヲ勘弁イタシ候モノノ説ハ、又左様計リニモ無之、有志ノモノニテモ、一昨年・昨年ト当年段々勘考ニテ、種々説ノ變シ候儀モ有之、マシテ海防筋ノ儀、外国ノ事情種々様々ノ事、朝夕取扱居候身分ニテハ、中々当今容易ノ事ハ出来不申（当局者ハ外国ノ事情粗知リタルモ、其他ハ甚タ疎ナリ）、去レハトテ、武備迄捨ルト申儀ニハ無之、武備ハ益盛ニ強クイタシ度候ヘトモ、取扱方ハ時勢ヲ勘弁無之テハ、真ノ御為トハ不被申様被考申候、乍併最早先日ノ書面ハ備中殿ヘモ出シ有之儀故、只今此処、アノ処ト引替候ニハ不及ト存候間、左様思召被仰遣置可被下候、書面ニモ老公（水戸侯其覚悟、阿部侯ニ於テ底意如何ニヤ、恐ラクハ然ラサラン乎）、小生ハ一戦ト覚悟イタシ居候間、越前守ケ様建白イタシ候ハ、助ケトモ可相成哉ト申儀、是ハ同人ノ存込ハ左ニモ可有之候得トモ、中々右ヲ以テ、評議ノ筋ト申訊ニモ参リ兼、水老公杯ハ程能越前守ヘモ被仰置候事故、同人モ実ニ左様存込居候事ニ可有之候欵、貴所様ヨリモ余リ色々被仰遣

候テモ、却テ御面倒ニ可相成候間、此度ハ最早差出候事故、御引直シニハ及不申、以後ハ能々御勘考被仰上候方可然位ニ、被仰遣置候方可然哉ニ存候間、厚御熟慮、宜様被仰遣可被成下候、同人別紙返上無伏藏申上候、御覽後御火中可被成下候、頓首、
十二月十九日

二白、時氣折角御厭專一存候、

一 先日ノ炮、越前守等ヘモ為御見被成度趣、委細承知イタシ候、近日御戻シ可申上候、以上、
〔昨夢紀事（日本史籍協会叢書）ならびに順聖公年譜にて校訂〕

三二八の三

一十二月廿五日薩州様へ御内書、左ノ通、

昨日ハ貴簡拝読仕候、如仰寒氣ノ節ニ御座候処、愈御安寧珍重奉存候、然ハ阿闍御返答書御廻シ被下、鎚ニ落手、再三披見仕候、阿闍心体モ詳悉仕候、段々不容易御手数相成、御周旋被下候段、誠ニ難有奉叩謝候、如命先拝眉不及、来春拜顔ニテ万繰可申上候、扱又阿闍ノ返書（前記書翰）返上仕候、御落手可被下候、

一 佛炮（佛国製炮）、阿（阿部侯）ヨリ返却次第御廻可被下旨、忝奉存候、

一 騎兵書、今夕家来ヨリ庄太郎(井上庄太郎)方迄返上

仕候筈ニ御座候、左様御承知可被下候、

右昨日ノ貴答御礼旁如此御座候、頓首

十二月廿五日

二 白、御端書忝、尚又御自愛奉專念候、已上。

(昨夢記事(日本史籍協会蔵)ならびに順境公外語にて校訂)

三二九 米使上申書ニ対シタル達書

○この文書は、本文第二四一号文書と同文により略す。

三三〇 和蘭王汽船猷呈ニ就テ船中規則艦將上申

〔海軍歴史抄〕

於國王蒸氣船ゲ一デ船号、出島千八百五十五年

第九月廿七日安政二乙卯年八月十七日

一 和蘭國王猷貢之蒸氣船スームピング(觀光丸是ナリ)、

日本政官被請取候得ハ、近日中ニ日本軍船ト相成可申、

然レハ我指揮者無之、日本指揮役之支配ト相成可申候、

一 右船昨年当港滞在中之伝習、并当節ゲ一デニ於テ許多

之門人之向ヘ伝授イタシ候儀、且又長崎港ニ毎々異國

軍船渡来之儀ニテ、軍船ハ如何ナル物トノ大体ハ相分

リ、斯高価之船ヲ以、所望之諸用相弁候タメ、右船毎

モ相成ニ取賄候ニハ、規則コソ必要ニ有之候儀顯然ニ候、

一 教示之外ニモ軍船ニ携候儀ハ、悉ク秘密ヲモ毎度申立

候儀ニ有之候、教示異見ハ、実ニ日本之為ニハイタシ

候義ニテ、其政府ニ於テモ、我ト相談イタシ候人々ニ

モ、漸ク其志ニ相成候儀ト相見申候、

一 猶又執事イタシ候者、船中之用事相弁、并軍船ヲ以テ

諸用相達候為ニトノ儀ニ有之候、且又スームピング船号

ハ、是迄称誉ヲ以テ、阿蘭陀國旗ヲ世界ノ諸方ヘ翻候

義ニ有之候得共、今又日本最初之指揮ニテ、新旗則日

本國帝之記旗ヲ翻シ、其称誉ヲ以テ、何マテモ一軍船

ト相成可申相祈候儀ニ有之候、

一 其為第一肝要トイタシ候義ハ、相当之軍令有之、下ハ

上ヲ尊敬シ、且ハ下知有之候ハ、早速夫ニ從ヒ可申

事ニ候、軍船ノ指揮役ハ部下ノ船人ニ兼テ規則ヲ教示

シ、其意志ヲ励、己ヲ敬從イタシ候様取計候儀、決テ

怠間敷事、此為ニハ、階級威威義理廉直最肝要ニ有之

候、

一 刑戒ヲ司リ候ハ、指揮役ニ限り可申候、依テ彼者ヘ前

広掛合不申候テハ、決シテ其義取行申間敷事、

一乗組之者熟練イタシ候得ハ、軍艦ノ指揮至テ易ク相成可申事、

一船人清淨ニ有之候様心掛可申候、清淨ナルハ人躰之壯健研究觀樂ノ為、至テヨキモノニ有之候、

一船中モ亦奇麗ニイタシ可申候、日々天氣都合宜候ハ、内外トモ掃除致シ、相濟候上可成丈ケ内手ヲ乾シ、風入候様可致候、

一橋・船具・帆・鉄錨・鎖・蒸汽機器・同釜都テ些少之物ニモ心ヲ附可申候、右ハ国帝之物ニテ、彼者へ一体相任有之候故ニ候、依之可相成ハ悉皆不損様心付可有之候、

一乗組中之着物之儀ニモ心付可申候、右衣類ハ奇麗ニシテ同様ニ可有之候、右ハ船中之役儀ニ応シ、極通夫々相当ニ可有之トノ儀ニ候、

一指揮役ハ、部下ノ者共へ与へ候飲食トモ、可相成ハ風味清潔ニ調理シ遣候様、是又不絶心掛可申候、依之煮物等ハ指揮役・第一等士官・当番之士官并按針役、又ハ水夫頭一々最初相試不申候テハ、決テ配分イタス間敷候、

一船中之作業・調練・休足・観娛・食事都テ定限ニ可致

候、

一平常相応之当番相立可申事、船海上ニ有之節ハ、士官者人、乗組之者半分以上段ニ居合候ハ、必用ノ作業、船ノ進退、帆ノ上下、大砲ノ諸用、其外之為ニ有之候、

因茲惣乗組ヲ等分ニ區別イタシ、是ヲ「クワルテイル」陣ト名ケ、則「ステュールポールツ、クワルテイル」右舷陣「バックポールツ、クワルテイル」左舷陣ト相唱申候、

一船一港ニ碇泊イタシ候節ハ、当番ヲ相立置、夜中迎モ乗組ノ四分一、則右「クワルテイル」半分ト士官一人ハ上段ニ罷出可申候、右ハ不計風波起リ候節、今一錨ヲ下シ、又ハ船ノ安危ニ必用ニ有之候儀心掛可申候為ニ候、

一船碇泊之砌ハ、各番夜中四時^{皇國}ニテ交替可致事、当番引継相濟候上ハ、唧筒ヲ測リ、水船中ニ入来候哉否様シ見可申、尚亦船中出火無之様、制禁之場所ニ火又ハ燈火・火烟ハ無之哉心掛可申事、出火ハ最危キモノニ有之故ニ候、

一夜ニ入候以前見調置可申候ハ、出火用水銃工合宜候哉、尚亦大砲ハ直ニ用達イタシ候哉トノ儀ニ有之候、

一 軍船ニ於テ、夏中ハ朝五時皇國七ツ半時ニ引当有之候得共、
彼邦ニテハ晝夜等分致適當不仕候

ニ、冬中ハ半時早目朝六時皇國ノニ、
六時太鼓方太鼓ヲ打鳴

申候、是ヲ「レフイルレ」起シト相唱申候、
太鼓ト尚大砲ヲ一

放発可致事、是ヲ「ワクト、スコツト」番
発ト名ツケ申

候、

一 鐘、夏中ハ朝五ツ時、冬中ハ朝六時ヲ打申候ハ、乗

組之者呼起サレ申候、按針役又ハ水夫頭ハ、諸所ニテ

笛ヲ吹呼廻申候、然ハ惣乗組之者寢床ヲ立出、直ニ夫

ヲ疊棚、定場所ニ入付可申候、其後「ワスセン」手・
洗

「カムメン」梳ノ指揮有之候得ハ、各手洗シ髮梳申候、

右ハ人体ニ蚤虱等ノ患ナカラシメンカ為ニ有之候、右

相濟候上、下等士官ハ、支配ノ者ヲ見調候上、符カ各奇麗

ニ有之候哉相改候為ニ候、其末料理人鐘打鳴シ候ハ、

朝飯ノ相凶ニ有之候、

一 右等ノ儀、規則立候テ、乱次無之様致候為ニハ、左ノ

通次第相分ケ可申事、

指揮役ハ、船長部屋ニテ老人食事イタシ候事、

士官ハ、何レモ「ロンクルーム」士官部
屋不詳ニテ食事イタ

シ候事、機械方并ニ按針役又ハ水夫頭ハ、各別所ニ
テ食事之事、

一 此他乗組之者ヲ数部ニ相分申候、是ヲ「バック」器ト、
訳ス、

又ハ「ターフル」食
卓ト名ケ申候各卓ニ、下等士官老人

頭分トシテ、拾人宛門居イタシ候、右拾人之内老人料

理方ヨリ食物請取、余人ニ次送、其後ハ都テ取片付可

申事、右ハ各番日相立置取賄候事、

一 各器各卓ノ頭分下等士官ハ、常々部下拾人之行儀并着

物之儀ヲモ心付可申、尚食事中作法ニ相叶候様可致事、

一 朝飯相濟候ハ、船中ハ勿論船内外ヲ掃除シ、鉄具・

銅器磨キ、風取ヲ引揚可申事、

一 船掃除相濟、諸事夫々相整候上、惣乗組之者衣類着用

可致候事、夏ハ諸事朝八時皇國五
ツ時、冬ハ九時皇國五
ツ半時迄取

調可申候、其上調練式有之、船卒ハ上段之後手ニ相進、

国旗引揚候得ハ、小筒調練イタシ、大鼓方ハ「ロツク

ル」曲
名ヲ打申候、又同時ニ帆ヲ解キ、風ヲ入レ、最上

次櫓ノ帆桁ヲ引揚申候、

一 調練式有之候節ハ、指揮役ニ知ラセ申ヘク、然レハ官

服着用イタシ、上段ニ立出候上、第一等士官ヨリ同人

ハ、夜中無異ニ有之、万事都合宜候段相届候事、刑戒

可然儀有之候ハ、其儀取行可申事、無事ニ候ハ、
当番之船卒大鼓ヲ為打、上段ヲ廻リ、其上退散イタシ

候事、

一右訓練式之後半時^{皇國四}、相立見分有之候、此時ハ乗組総中上段ニ立出、各其場々々、即右舷之組ハ右舷ニ、左舷之組ハ左舷ニ、何レモ十人宛立置申候、是又食事之節、各器ニ頭分下等士官トモ拾人宛之振合ニ有之候、皆々順序相整候上、士官トモ乗組之者ヲ逸々相改申候、尤第一等士官之外ニ、士官之向船中ニ居合候ハ、其人別ニ応シ、數組ニ乗組ヲ分別イタシ有之候、此組ハ「フリエンエーテイフイーシー」^{衣類組}ト相唱候テ、則士官ハ其配下之者、行儀並ニ衣類ハ不及申、都テ必用之事トモ心配イタシ遣候事、

一士官之向ハ、配下之皆行儀宜、相当ニ同様衣類着用イタシ候哉見改候上、第一等士官ヘ見分相濟候段知ラセ申候、然ハ第一等士官再乗組之者之前ヲ通り、逸々見改、其後万事奇麗ニ次第相整、夫々ノ場所ニ有之候哉見廻申候、

一其後第一等士官ハ、指揮役之側ニ行、見分相濟候段申聞候得ハ、指揮役ハ訓練並昼中之諸用申付候、是則大砲・小砲・劍術・帆前・端舟運用・最上櫓之上下・深淺測量・綱之解結等之訓練ニ有之候、

一第十一時^{皇國四}ニ昼前之訓練相濟申候、然ハ帆ハ結付、

上段ヲ取片付掃除イタシ申候、第十二時^{皇國九}ニ昼食有之候、右ハ一時^{皇國}之間ニテ、食事中ハ右場所ニ居、物靜ニテ行儀正シクスヘキナリ、食後早々何レモ掃除シ、備付相濟候上、第二時^{皇國八}迄休息イタシ、其後又々訓練始リ、第四時半^{皇國ニテ七}迄之間ニ有之候、第五時^{皇國七}夕食有之候、日輪没候節ハ、船卒再ヒ上段之後方^{半時}ヘ来リ、小筒訓練^{爰ニ云訓練ハ、ブレ}セ^ンテイルゲ^ル也イタシ、大鼓方「ロツフル」^曲ヲ打鳴シ、国旗ヲ引下ケ、端舟引揚ケ、最上次櫓ノ桁ヲ引下シ候得ハ、大鼓方台場ニ於テ「アツプル」^曲ヲ打鳴シ申候、此時何モ夫々之場所ヘ来リ候得ハ、士官之向ハ各其配下之者ヲ見改、尚大砲並夫々受持之者都テ見分イタシ、右相濟候段、第一等士官ヘ相達シ、若大砲並夫々受持之者、病氣ニテ出勤イタシ難キ者有之節ハ、台場外ノ者ヲ以テ助勤為致可申候、右ハ夜中臨時ニ台場ニ相集リ候儀有之砌、万事相整、壱人タリトモ不足無之様之手当ニ有之候、右等之儀ハ、軍船第一之儀ニテ、昼夜トモ不時合戦ノ用意可有之候事、

一月曜・木曜兩日昼第三時^{皇國八}ヨリ第四時半^{皇國七}迄

ニ、乗組之者着物洗濯イタシ置、日輪没シ候ニ至リ引揚申候、

一夕第七時半皇國ニテ六時七合五勺ニ、乗組之釣床ヲ其囲場ヨリ取出シ掛置、第八時皇國五時ニ至リ、当番之外寢床ニ到申候、

見守番ハ夫々ノ場所ニ立出、夜中之為手分イタシ、大鼓方ハ「タムプトウ」曲ヲ打、大砲ニテ番発候ニ、

燈火火烟無之哉、煮焚之火元宜候哉、出火用水銃用意

宣候哉、夜中大風有之候節、鉄錨ヲ入候ニ用意有之候哉、若又燈火数多入用之節、直ニ火燈シ候為、燈籠ニ

油相当ニ入レ有之候哉、唧筒ニ水何程有之哉、見守番

夫々之場所ヘ居候哉、若暗夜ニテ地方見出シカタク、

且ハ大風吹起リ候節、船押流サレ候哉、測見候タメ測

深船用意有之、老人其場所ニ居合候哉、終ニ柁之進退

ニ故障無之哉見届申候、此段第一等士官ヘ申達候得ハ、

此者ヨリ指揮役ヘ相届申候所、指揮役ヨリ第一等士官

ヘ、書面ニテ夜中一体之指揮ハ相達申候、

一下章ニ記シ有之外ハ、都テ七曜之日ニ港湊碇泊中、右

之振合ニ取計候事、

一月曜日昼前、船中見分相濟候上、「フリエニーパーラ

テ」衣類有之候、則乗組惣中衣裳入ヲ上段ニ持出、通常

之見分有之節之通居並、自分々々之物ヲ解出、悉皆清浄ニテ、其内破裂之者無之段、一々組頭士官ニ為見申候、

一 毎月第一・第三ノ月曜日ハ、寢床掃除イタシ候、

一金曜日ニハ、船中奇麗ニ有之候ハ、仕事不致候、然

ハ乗組中着物取調、又ハ何事ニヨラス自分用相達、且

ハ寢所風通シ等イタシ候事、

一 土曜日ニハ、船中心ヲ付掃除イタシ、上段ハ砂ニテ磨

キ、絵具等損シ候所ハ、新ニ彩色イタシ候、

一 日曜日ハ、休日ニ有之候事、

一 此日ハ、指揮役船中並乗組ニ心ヲ配リ見改、其後ハ乗

組之中両三輩親類見舞、又ハ逍遙ノ為メ、上陸為致候

事、尚又格別出精イタシ候者並非番之者迄ハ、上陸、

夜中居残候儀ヲモ差免候事、

一 軍船ニ於テハ、日記ヲ付可申候事、各士官当番交代イ

タシ候テ、右日記番中ニ有之候諸事、并天氣風並如何

有之候哉之儀、書載致候上名判致候事、

一 指揮役儀、就中能心掛可申儀ハ、船中ニ於テ諸事順序

相立候哉之儀、下段ニ有之候諸物折々相改候儀、下ニ

収有之候帆類取出風入候儀、石炭囲場之石炭湿氣無之

哉之儀等ニ有之候、右石炭経験イタシ候ニハ、下段其外之囲場ニ折々長キ鉄棒ヲ挿シ、暫時之間其俣召置候上ニテ引揚ケ、暖氣有之候哉相改可申事、若暖氣有之候得ハ、石炭暖リ、終ニハ出火ト相成候徴ニ有之候、尤石炭冷ニ有之候得ハ、安氣ノ徴ニ有之候、

一第一等士官ニ万事取計之儀申付有之候得ハ、士官之向ハ其手附ニ有之候、

一第一等士官ハ、蒸氣部屋並石炭ニモ心ヲ用ヒ可申、船港内ニ碇泊イタシ居候節ハ、釜ヲ掃除乾燥イタシ候様、車輪水中ニテ錆サル様折々転廻致シ候様、雨天ニハ煙筒ヲ覆候様、天氣宣候ハ、石炭囲場屢々風入候様、尚又諸事殊更蒸氣部屋ニ於テハ小事タリトモ心掛可申事、右ハ同人之役目ニ有之候故ニ候、

一第二等士官ハ、大砲・火薬、其外武器等之諸事取扱候儀申付有之候、

一第三等士官、諸船具・端舟・帆類・鉄錨鎖・諸綱具・繪具等取扱方申付有之候、

一第四等士官ハ、下段支配方之儀申付有之候、此者儀ハ、常々吞水充分有之哉之儀、且食物心配致候事、売込人欵又ハ蔵所ヨリ食物差送候節ハ、右請取候以前入念相

改可申事、尚亦時計・海図・書籍并大工入用之品取扱候事、

一品立帳ニ有之候諸具損シ候欵、又ハ紛失イタシ候ハ、其掛リ之士官儀ハ其品何処ニ有之、何之用ニテ相損、幾個程今ニ相残候儀、人々承知致候様帳面ニ書記致候事、士官ハ各其為手伝トシテ、下等士官老人宛ニ附罷在候、則

第一等士官之手附

機械方

第二等同

大砲方

第三等同

船頭又ハ水夫頭

第四等同

按針役并大工

一火薬并銃丸囲場之鍵ハ、常々第一等士官之預リニ有之候、此者之免許無之候テハ、決テ戸口開候儀相成不申候事、尚其辺ニテ火不起様、煙草吞サル様、前広能心ヲ付可申事、右等之節ハ、番卒一人囲場入口ニ差置可申、鉄器則小刀・脇差ヲ帶候者ハ、囲場内ニ入申間敷事、右ハ危事有之故ニ候、

一此許多之配慮御覽可被下候、右ハ新指揮役熟読習熟イタシ候タメ日本語ニ翻譯、分明ナル儀無余儀事ニ有之候、船ノ為メ肝要并用達ヲ被得度候ハ、右之諸件相

守可被申候、指揮役儀ハ其為ノ役前ニ有之候、尚士官

之向ニ役目割付有之候得共、指揮役儀ハ一体之役前ニ有之候間、各士官之勤方之儀モ心得可申事、且又指揮

役儀ハ下役之為名譽良善之手本ト相成候テ、彼者共ノ悪事不法ヲ防候様、行状正敷有之ヘキ事、

一何モ飲酒ニテ大醉不致様、指揮役心附可申事、此儀軍船ニ於テハ至テ危キ曲事ニ付、急度相制可申事ニ有之候、

一指揮役ハ服体作法并精勤之義ニ付テハ、手本ト相成可申、亦蔽ニ仕置ヲ取行フトモ、適當廉直ヲ旨トシ、都

テ賤シミ輕スルノ所業ハ相制可申事、下ハ常々上ニ對シ尊敬隨從可有之、尤上ハ下ヲ作法ノ通り取賄可申事、

右ハ何モ国帝ノ官服・武器ヲ持、国帝御用之為、譽ヲ得候故ニ有之候、

一軍令ハ行状勤整之宜ヲ勸賞シ、不法ヲ相当ニ罰シ候儀ニテ相立申候、

一刑戒之無余儀ヲ輕シ候ニハ、過失ヲ為ントスル折ヲ奪ヒ、又ハ妨可申事、此為ニハ上ハ下ニ不絶氣ヲ付候義、

又ハ夜中隔リ候場所之通路ヲ閉シ、又ハ船ノ下段ニ程能火ヲ点候義、要用ニ有之候、是ハ士官并番兵等万事

見通宜候様イタシ候為ニ候、

一船中刑戒沙汰少キハ、其船取締宜、指揮役其国帝ニ忠勤之徴ニ有之候、

一初筈日本軍船支配被成候指揮役ノ為、秘密異見如斯ニ候、御覽可被成下候、

一十九年来、拙者儀種々之船之致指揮、常ニケ様取計来候テ、格別都合宜敷有之候、依之拙者義、左様御取扱之儀可然ト、安心致シ御進メ申候、

一海軍之為法度取建ニ相成候儀、肝要ニ可有之、国帝ヨリ其為ニ御下知御座候ハ、拙者未タ日本ニ居候事故、

拙者力之及ヒ候丈ハ、異見ノ程申立候様仕度候、一其許前件之儀、日本ノ為要用ニ可有之被存候ハ、日本政府へ御申立被下度御願申候、

日本差越之指揮役

船将次官

於日本和蘭領事官へ
グ、フアビニス(ユカ)

汽船ヲ日本ニ備ヘタル、是ヲ嚙矢トス、本紀ノ如ク艦名「スービユン」ト唱ヘ、艦長ヲ「ハーピス」ト呼ヒ「コンマシダント」ノ職ナリシト云、前年(安政元年甲寅七月、和

蘭王使ヲ護シ長崎ニ來レルモ此艦ナリ）使節ヲ護シテ來崎其所望セラレ一時帰國シテ、再ヒ來崎獻呈トナレリ、○安政元年七月、小汽船一隻ヲ購求セラレタリ、之ヲ最初トス、然レトモ一小鉄葉製ノ遊舟ニ等シキカ故、其形状ヲ示スニ過キス、
〔大日本古文書（幕末外國關係文書）ならびに海軍歴史（勝海舟全集）にて校訂〕

三三一 魯國船修復事件上申書〔海軍歴史抄〕

〔安政元年〕
實十一月二日下田差立御用狀

〔忠僕、老中〕
伊賀守（松平）へ進達

魯西亜船之義ニ付申上候書付

〔破義、下田奉行〕
伊澤美作守

〔家重、下田奉行〕
都筑駿河守

魯西亜船破損為修復、当所退帆之義ハ、去月廿二日申上置候処、同廿七日五時頃、日本船ニテ異人式拾人駿州一本松へ上陸仕候ニ付、手当申付置、水野出羽守へ人数差出可申旨申遣、異船之義ハ同州小濱へ船掛止候旨、江川太郎左衛門手代共ヨリ、戸田村出役之支配向へ申越候ニ付、不取敢御普請役老人・御小人目付老人・手附出役老人・通詞老人、異人上陸場所へ罷越候段、戸田村出張之者ヨリ申越候処、右魯船之義、去月廿七

日秋山主税・杉浦主殿知行所駿州富士郡宮島村之内、字三軒家浜ヨリ五六拾間程沖之方ニ掛ケ留、追々入浴相増、漂出方不行届之様子、海岸高浪ニテバツテラ着岸難相成候ニ付、老人ツ、胴繩ヲ掛ケ、水中ニ飛入、大勢大繩ニテ引揚候義ニ御座候由、翌廿八日早朝ヨリ夕方迄、布恬廷初（フチヤイチン）メ四百人程右浜方へ上陸仕候ニ付、廿七日夜戸田浦ヨリ一本松新田へ罷越候御普請役・御小人目付・私共手附出役之者へ太郎左衛門ヨリ打合、同人手代共差出、不取敢食料手当小屋掛等取計、同人義モ最寄内藤綱之丞知行所鯨島村迄、廿八日出張仕候旨、最寄寺院又ハ人家へ差遣、寒氣為相凌度候処、地震ニテ潰家多ク取計兼、且通詞義モ同村へ着仕候ニ付、戸田浦へ差廻方其外之義、昨朝布恬廷へ応接之上、委細可申越旨、不取敢太郎左衛門ヨリ昨夜川路左衛門尉へ急注進申越候由、依之御勘定組頭中村爲彌へ取計方委細申含、即刻出立為仕候段、今曉左衛門尉ヨリ申越候、且大久保右近將監地震ニ付駿府表在勤罷在候処、当表渡來之魯西亜船豆州戸田浦へ参り候積之処、風波之為ニ破船致候様子ニテ駿州宮島村沖へ碇泊、式拾人程之異人上陸仕居候趣、心得迄ニ同人ヨリ申越候書狀、

今朝到来仕候、猶委細之義ハ、応接掛リ太郎左衛門ヨリ
可申上候得共、先此段御届申上候、以上、

十二月二日

伊澤美作守
都筑駿河守

三三二 魯国船下田ニ於テ遭難上申〔海軍歴史抄〕

〔安政元年〕
寅十二月四日御用状ニテ差立ル

魯西亜船之義ニ付申上候書付

伊澤美作守
都筑駿河守

去月廿六日ヨリ、追々申上候魯西亜船之義、駿州宮島
村沖へ漂着、異人上陸致、仮小屋出来、何レモ差置、
本船戸田浦へ廻方手段仕、一昨二日頃使節并上官之者
式拾人程漁船へ為乗組、御普請役老人・御小人目付老
人・通詞附添、本船ハ漁船数拾艘ニテ、同日八半時頃、
宮島ヨリ二三里程引出候処、引船何レモ相離、豆州内
浦へ漕去候ニ付、遠眼鏡ニテ見及候処、西風烈敷高浪
ニテ、本船八分通り相沈ミ、内浦之方へ追々流寄候旨、
臆トハ相分兼候得共遠見仕候始末、不取敢私共支配向
戸田村へ出役之者ヨリ、昨夜申越候処、右魯船之義入

淹弥増覆没仕体ニ付、異人共義ハ不残上陸、本船之義
ハ数拾艘之引船差出、戸田浦へ引入候積、一昨二日四
半時頃三四里程引出、於沖合高浪相立、引船相離候旨、
追々注進ニ付、江川太郎左衛門義、浜辺へ罷出及見分
候内、忽チ覆リ、漁船ニ乗組候使節并外三拾人程之夷
人共ハ、水野出羽守領分駿州江ノ浦へ向漕寄り候様子
ニ付、太郎左衛門義不取敢同所へ罷越候上猶可申越旨、
昨夜同人ヨリ川路左衛門尉へ急注進申越候由、尤委細
之儀ハ、応接掛リ并太郎左衛門ヨリ可申上候得共、先
此段御届申上候、以上、

十二月四日

伊澤美作守
都筑駿河守

三三三 魯艦颶風ニ遭難シタル事実〔海軍歴史抄〕

安政元年甲寅年十一月四日、豆相駿地大ニ震ス、此時魯国
之軍艦フレガット、デイヤナ号下田港ニ滞泊ス、突然ト
シテ海嘯起リ、港内ノ人家碎壊シ、市中十八ヶ町大抵平
原トナリ、加之火ヲ失ス、人口全員三千九百余名、此中
八十五名死亡スルニ到ル、魯艦モ亦此災害ヲ遁ル、ヲ得
ス、終ニ艦底暗礁ニ触レ、横タハリテ殆ント覆没セント

ス、乗艦ノ全員働作甚タ勉メ、幸ヒニ其沈没ヲ免カルト雖モ、艦底大ニ損シ如何トモナス可カラズ、海嘯止ミテ皆上陸シ、艦ヲ港内ニ繋ク事ヲ得タリ、

陸上モ此災厄ニ逢フテ、幾ント無人之境タラントス、故ニ魯人困難極マリ尽セリ、此時ヤ其本国ニハ歐州各国ト戦鬪アリ、便宜ノ通スヘク無ク、シカノミナラス英艦ノ各国諸港ヲ巡視シ、魯艦ヲ攻撃セント為スアリ、悠々トシテ其便ヲ待ツヘキ時ニアラサル故ニ、我政府ニ乞ヒ、一ノ良港ヲ借り、修覆ヲ加エントシ、敵談シテ置カス、同国戸田ノ良港ナルヲ検知シ、爰ニ入ラントス、我政府モ時災ノ困難、情実ノ黙止カタキヲ以テ、終ニ其請ヒニ応ス、魯人戸田ニ到リ、屯営シテ敵国ニ備ヘ、下田港ニテノ破艦ヲ以テ回航ス、伊豆御崎ヲ廻リシ際、艦内ニ海水注入シ防止ス可ラス、終ニ全ク沈没シ片板ヲモ残サス、此海ヤ殊ニ水深ク大抵七八十尋、故ニマタ奈何ントモ為スヘキ策ナシ、乗艦人員ハ端船ニ乗シ纜カニ死ヲ脱ス、魯人之不幸此不測ノ天災ニ罹リ、且ツ其艦ヲ失フ、災厄重リ到ルトイフ可シ、然レトモ猶勇ヲ鼓シテ敢テ屈セス、再ヒ我ニ需ムルニ、木材・鍛工・船工ヲ募集センコトヲ要ス、乗組ム所ノ船工・鍛工ヲ首メトシ、新ニ造船ノ業

ニ従事ス艦士等、勉勵実ニ驚クヘシ、終ニスクーネル船二隻ヲ造リ、是ニ乗シテ北海ニ向ヒ去ル、此魯国ノ一大不幸ヤ我カ幸トナリ、我カ諸工艱苦ヲ経タリト雖モ、西洋造船ノ諸法暗ニコレヲ実地ニ得タルモノ多シトス、假令ヘハ造船ノ初龍骨ヲ以テ造船台ヲ拵ヘ、首材後材ヲ建テ、助材ヲ植ヘ、船梁ヲ固着シ外板ニ及フ等、或ハ緊帶諸部ヲ以テ全体ヲ固メ、外、銅板ヲ張ルニテールニ浸セシ厚紙ヲ張り、銅板ニ及フ等諸法ノ如キ、我邦ニ伝フルモノ、此時ヲ以テ最始トス、且ツ松根ヲ蒸焼シテテールヲ製シ、生麻ニ浸入セシメ、後諸索ヲ綯フ、此他我邦絶ヘテ無キ処、是ヲ一時ニ備フ、豈ニ邦家ノ幸ト言ハサルヘケンヤ、

此後是等ノ法ニ因テ造ル船ヲ君澤形ト称シ、君澤形第一・第二・第三、漸次ニ増製セシム、魯人ノ造リテ去リシ船モ、後我ニ送り還附シ、当時ノ高意ヲ鳴謝ス、此時魯人ニ從ツテ就業セン諸工、多ク幕府海軍所附属トナリ、其中良工ノ今尚存在シテ横須賀ニ到リ、諸工ノ長タル者数名ヲ存ス、

又此際同所ヘ出張セル官吏、予ニ告ケテ曰ク、魯人之勇猛驚ク可シ、此大災厄ニ逢フテ洄喪ノ氣勢ナク、偶々外国

船ノ下田洋ヲ航スルモノアレハ、遠望シテ必ス英艦ノ到
レルナラント、士官水卒一令ノ下ニ其国旗下ニ屯集シ、
入ラハ決戦セントス、其状勢凜乎トシテ撓マス、造船中
時々此ノ如シ、其勇鷲ノ性質、事ニ臨ンテ活発ナル事、
実ニ歎称ス可シト、云々、

又魯艦破損シ、下田港ニ繫リシ際、其武器ヲ揚陸ス、後
チ大砲數門ヲ以テ、我カ政府ニ送り厚意ニ答フ、其員數
左ノ如シ、

- 一 鉄製六拾斤長加農
- 一 同 三拾斤短加農
- 一 同 貳拾斤長加農
- 一 同 五拾貳挺
- 四 挺
- 十八挺
- 三十挺

三三四 魯艦遭難事実上奏〔海軍歴史抄〕

〔安政元年〕
甲寅十二月所司代へ達

当月、豆州下田港へ魯西亜船碇泊致候ニ付、早速為応
接役々差遣、願意之次第論談為及候処、彼国ヨリ差越
候書翰ニモ有之候日本魯西亜両国之境界相定候儀、奥
蝦夷地エトロフ迄、日本所領之段承知仕、従北蝦夷地
カラフト全島日本領之旨、申談度儀ニハ候得共、カラ

フト島之儀ハ当夏見分之者差遣、委細ニ取調候処、全
島蝦夷住居之儀ニハ無之、北之方ニハ山丹種類ヌメレ
ンクル夷等部類尤有之候旨、境界難相分次第モ有之、
此上如何決断モ可相成哉、未相分候儀ニハ候得共、
御国境相定候義、不容易事ニ候間、応接之趣一ト通り
申進候、御程合次第、伝奏來へモ内分相通置候様被存
候、

十二月廿三日

- 〔信親、老中、村上藩主〕
内藤紀伊守
- 〔広岡、老中、國宿藩主〕
久世大和守
- 〔忠徳、老中、上田藩主〕
松平伊賀守
- 〔兼全、老中、西尾藩主〕
松平和泉守
- 〔忠雅、老中、長岡藩主〕
牧野備前守
- 〔正弘、老中、福山藩主〕
阿部伊勢守

〔安宅、京都所司代〕
脇坂淡路守殿

〔大日本古文書(舊来外國關係文書)ならびに海軍歴史(勝海舟全集)にて校訂〕

三三五 魯国使節約条上申〔海軍歴史抄〕

〔安政元年〕
十二月廿二日下田奉行届

魯西亜使節約条為取替相済候義ニ付、申上候書
付

伊澤美作守

都筑駿河守

昨廿一日、当所長樂寺応接所へ魯西亜応接掛筒井肥前守・川路左衛門尉・松本十郎兵衛・村垣與三郎・古賀謹一郎其外役々出張仕、私共モ出席、魯西亜使節布恬廷柿崎村玉泉寺ヨリ罷越、条約為取替無滞相済申候ニ付、同寺ニ在留魯人共、私共方ニテ取扱候様、応接掛ヨリ申聞候故引受申候、尤闕乏品相求度趣申立候間、亜米利加人同様為求候積リ御座候、依之此段御届申上候、以上、

十二月廿二日

伊澤美作守

都筑駿河守

三三六 小野友五郎外国処分意見〔海軍歴史抄〕

皇国ハ東洋ニ独立シ、周圀海面ニ接シテ、各所ニ天然ノ良港ヲ具フ、是即舟楫ヲ以テ不通ヲ済ヒ、国家之利用ヲ起スニ適セリ、往古 崇神天皇ノ御宇、舟楫ヲ造ラシメ、不通ヲ済ヒ、利用ヲ起シ給ヒシヨリ、近古ニ及ンテ漸次此道開ケ、異邦ニ往来シ、互ニ貿易ヲ為スニ至ル、然ルニ我茲曲ノ商人等妄ニ遠洋ニ渡海シ、私利ヲ貪リ、時トシテ、異邦人ハ国教ヲ以テ、我愚民ヲ惑乱イタサセ、自

然国家ニ妨害アルヲ以テ敵令ヲ下シ、堅牢ナル大船製造

及ヒ遠洋渡海ヲ制禁セラル、以来絶テ遠洋渡海スル者ナク、此時ヲ期トシテ、廻船ハ地方ニ添テ、山岳ヲ目的トシテ、廻船スル風習トナレリ、

地廻リ回船ハ、時トシテ難風ニ遭ヒ、大洋ニ漂流セハ、素ヨリ渡海之術ヲ弁セサル船子共、方向ヲ求ムルニ由ナク、憊悴ニシテ異邦人ノ手ニ助命ノ恩恵ヲ受ルノ外ナシ、是等ヲ察シテ、嚮ニ回船安乗録・海路安心録・渡海標的回船寶袋等ノ書籍アレ共、元来一小冊子ヲ以、渡海ノ詳悉ヲ尽ス能ハス、乍恐

大猷院様 有徳院様御代ニ、天文地理ノ学、講究ノ義

台命被為在、日ニ増シ諸芸相開ケ、天文ハ終ニ交食ノ時問ヲ過タス、今時ニ至テ渡海之方法ヲ撰述シテ、其用ニ供セントス、是即 台命ノ厚キニ因ル者ニシテ、感載之至ト奉存候、昔時ハ見聞モ稀ナル異国船、時々近海ヲ通航イタシ、殊ニ亞墨利加軍艦浦賀着港以來、御武備専ラ御世話被為在候内、船艦之利用ニ起ル者少ク、今般諸家へ大船造営御許容之旨被仰出、公儀ニ於テ、海軍御拡張ノ御趣意ヲ以テ、嚮ニ御軍艦御造営相成、艦隊之基礎御創立被為在候ニ付テハ、渡海之方法撰述仕度段、昨丑

年、天文方足立左内ヲ以テ奉窺候処、当寅二月中、献本之義ハ追テ可被及御沙汰、撰述之義不苦段被仰渡、其以來丹精ヲ尽シ、方向数理并弧度汎法等、都テ解義ヲ詳明ニシテ、用表ノ元組撰述仕候、

此用表ハ舟行之諸數ヲ併列シテ、専ラ簡易ニ用算ノ煩勞ヲ省クヲ主トス、其舟行ノ概略ハ、出帆スル地ノ經度ト緯度ノ二數ヲ原トシテ、遠ク海岸ヲ離レ、望ム所へ渡海スル者ニシテ、其方法ノ概略ハ、弧度汎法ニ述ルカ如シ、而シテ鍼路ヲ確定スルハ、諸曜ノ正行ヲ測定シテ先ツ本船所在之緯度ヲ算定シ、而シテ時刻ノ經歷ニ因テ、其經度ヲ詳明ニス、此方法ニ因テ渡海スル時ハ、更ニ鍼路ヲ失フ事ナク遠洋ヲ往来シ、不通ヲ濟ヒ、実ニ国家ノ利用ヲ起ス、殊ニ海軍ニ在リテ其用挙テ知ルベカラス、此書大成ノ上ハ、諸家ノ大船造管ノ向ハ勿論、一般ニ渡海ノ方法教授被仰出候得ハ、御趣意完全可仕奉存候、

右ハ渡海新編ノ大意如斯御座候、以上、

牧野備後守内

安政元寅年十二月

小野友五郎

(大日本古文书(幕末外国関係文书)ならびに海軍歴史(勝海舟全集)にて校訂)

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編

安政二年

〔扉に表紙の文字の外に、「元国事鞅掌史料（紙数二十枚）」の記載あり〕

目録

六孫王九百年祭

齊彬公水戸公ニ贈ル書

周防国妙満寺月姓意見書（巻）

阿部伊勢守卒去布告

三三七 六孫王九百年祭

大目付へ

来々巳年安政四丁巳六孫王九百年忌ニ付、

公儀ヨリモ御寄附之品有之候間、清和源氏之面々、万石以上以下共志次第助力可有之候、右之通可被相触候、

九月

三三八 齊彬公水戸公ニ贈ル書

御筆御屏風菊之御写生、殊之外 思召ニ被為入候テ、掛リ之外、手ヲ触候事モ御ユルシ無之由ニ相伺候、御手焼御茶碗ハ、御供之御小姓并御小納戸之内ニテ、格別常々 思召ニ入候者共江頂戴被仰付、大奥ニテモ萬里小路初御供者江、是モ同様格別之者江被下ニ相成申候、御右筆頭小倉江ハ頂戴被仰付、殊之外難有居申候、右筆頭位之所江ハ中々不被下候得共、全ク 思召ニテ御供モ仕 御立寄之儀ニ付、調物等仕候故ト奉存候、御守殿御附道隆江ハ、還御前ニ 御守殿ニテ被仰候処、翌朝持参仕罷出候処ニ、頭取ヨリ達有之、即刻持参仕候処、是迄 御手焼頂戴仕候事可有之候間、返上可仕様ニ被仰付候処、御判御座候御茶碗ハ、頂戴無之段入御聞候処、其尽被下置候、御簾中様御手ニテ御出来ニ相成候御銅欄、殊之外ニ思

召ニ入候テ、御献上有之候節、御下ニ相成候ノモ御取捨、直ニ御召相成、日々是モ御側ニ被差置候段ニ有之候、

五郎丸様格別ニ思召ニ被為人候テ、日々御噂有之候趣、又御茶屋御庭ニテ、御子様方御鬼追御遊有之候ヲ、思召ニ入、時々御噂出候趣ニ有之候、

右之通明日承リ申候、以上、

九月廿八日

這御書水戸徳川家ニ存ス、天璋院殿御入興ニ関シタル御書、

三三九 周防国妙満寺月^(性)意見書

周防国妙満寺一向宗ノ僧月性死ス、月性慷慨外夷ノ為メニ国体ヲ汚サン事ヲ慨キ、海防意見封事ヲ京都本山ニ出ス、言々血辞々涙、大ニ時人ヲ感動セシメタリト云フ、其書ニ曰、

臣僧月性惶恐和南謹テ大法主輪下ニ白ス、窃ニ惟ミレハ、古今天下ノ憂、墨・魯・英・佛諸夷覬覦ノ心ヲ抱キ、コモ／＼来テ強請スルトコロニアリ、此レ^(タマカ)レダ、世ノ士大夫タル者、ソノ憂ニ任スルノミナラス、我仏徒タルモノモ亦其憂ニ任セスンハアルヘカラザルナリ、

ソレ彼諸夷東西ノ異アリト雖トモ、ソノ邪教ヲ信ジ、救世ノ紀元ヲ奉スルニイタツテハ、各国同シカラサルハナシ、英ト佛トハ固ヨリ論ナシ、サキニ墨夷船彼理幕府ニ上ル書翰中ニモ亦イフ、於ニ西国本国ノ官民都知ニ人倫邪蘇之道ト、魯西亜船ノ長崎・攝津ニ来ルモ亦皆十字ノ章旗ヲ建テ、以テ邪蘇僕刑ノ状ヲ表シ、満船死ヲ決シテ其教ヲ到処ニ弘通スルヲ期ス、モシ我内民日々是ト相親ミ、ソノ蠱惑ヲ受ケ、ソノ利誘ヲ啗ヒ、ソノ教法民間ニ浸淫スルニ至ラハ、我仏法衰廢滅亡セン事必定ナリ、又東国某侯ノ英明果決ナルアリ、ソノ先見ノ明、サキニ既ニ未然ヲ洞鑑シ、諸夷覬覦ノ勢今日必スカクノ如キニ至ヲ知り、十数年来、シハ／＼防禦ノ策ヲ講シ、我仏法ヲ以テ神州ノ国体ヲ滯リ、夷狄ノ教ヲ誘モノトナシ、内マツ己ヲ滅セスンハ外必ス彼ヲ防クヘカラスト云フ、ソノ論凱切ニ我ノ弊ニ当ル、唯コレヲ書ニ筆スルノミナラス、嘗テ拳テ以テコレヲ其国ニ施シ行ヒ、コレニヨツテ罪ヲ獲、一旦退隱セラルト雖トモ、癸丑^(幕末六年)以来夷狄ノ勢、侯ノ所論ト符節ヲ合セテ違ハサルヲ以テ、再ヒ出テ天下ノ大政ニ參シ、国家柱石トナレリ、コ、ニオイテ海内英明之侯伯有志ノ豪

傑、苟モ国ヲ憂ヒ虜ヲ慮ルコトヲ知モノミナ侯ニ依頼シ、侯ヲ模範トシテ、ソノ策ヲ天下ニ施シ行ハント欲セサルモノナシ、且ソノ君臣著ス所諸書遍ク世間ニ流布シ、士大夫ハ固ヨリ農民・商賈・婦人・女子トイヘトモ、スコシク文字ヲシルモノ、ミナ喜テコレヲ読ム、嗚呼侯ノ策、果シテ天下ニ施シ行ハルレハ、亦我仏法衰廢滅亡セン事必定ナリ、コレ仏徒タルモノ、内外敵ヲ受ケ進退維谷レリ、外敵ヲ防ントスレハ、内敵ノ懼レアリ、内敵ヲ破ラントスレハ、外寇ヲ誘フノ嫌アリ、コレヲ如何シテ可哉、世ノ僧徒冥頑固陋、憂ヲシラサルモノハ固ヨリ論スルナキモノ也、憂ヲ知リテ策ナキモノ、亦徒ニ戰栗惴怖シテ曰ク、法滅時イタリ人力之ヲ如何トモスルナシ、座シテ諸宗ト、モニ滅亡ヲ待ソノミト、嗚呼悲カラシヤ、臣僧則所謂今時国家モツテ中興スヘシ、今勢宗門モツテ再ヒ隆ナルヘシ、何ソシカク神州陸沈シテ仏法滅亡スルヲ憂ル事コカレアラント、昔我世尊仁王經ヲ説テ曰ク、我以是法テ付ヲ属国シテ王ニ不地地村村ニ属天比丘一比丘優婆塞優婆夷所スルアタハス、国存スルニ因テ法モ亦建立スルナリ、彼ノ存セサルモマタイツシカ伝ソ、未タ其国亡テ法ヒトリヨク存スル者ハアラ

サルナリ、茲ニ其証ヲ論セン、今ヲサル三百四十三年永正十八年 蒲萄芽印度沿海地ヲ奪テコ、ニ抛リ、人ニ教ルニ邪蘇教ヲ以テシ、漸ク其地方ヲ蚕食シ、靈鷲山ニオク所ノ仏像ヲ毀テ七十余万金トナス、是ニ於テ固有之仏法竟ニ煙滅ニ帰セリ、其後百四十三年承徳三年 英吉利蒲萄芽ト戰テコレニ勝チ、其人ヲ逐テ印度ノ地ヲ有チ、亦大ニ邪教ヲ煽シ土人ヲ教化シ、スナハチ其国ト仏法トヲ併セコトク、變シテ夷狄トナル、ソレ印度ハ世尊降誕ノ地ニシテ仏法根元ノ国タリ、而シテ猶且カクノ如シ、況ヤソノ他ノ諸国ニ於テヲヤ、臣僧故ニ曰ク、未タ其国亡テ法ヒトリ、能存スルモノハアラサルナリト、唯我神州大海ノ表ニ独立シ、天祖天ニ繼テ極ヲ建テ、地神コレヲ承ケ、神武天皇其統ヲツキ今ニ至リ二千二百余年、一百二十四世聖子神孫連續相承ケ、未曾テ一日モ夷狄ノ陵侮ヲ受ケサルナリ、コ、ヲ以テ欽明天皇ノ御宇我仏法始テ西天ヨリ至リ、王公是ヲ尊奉シ、士庶コレニ帰祿シ、遂ニ天下ニ蔓延、八宗国ト共ニ繁榮スルモノ今ニ千三百余年、是豈国存スルニ因テ法マタ建立スルニ非スヤ、方今諸夷皇国ノ富有ヲ羨ミ稍覬覦ノ心ヲ生シ、コモク来リテ強請スルトコロ

アルモノ、其意決シテ通信ヲ求メ、互市ヲ乞ヒ、生地ヲ
 飯ルニ止ラス、必我ノ虚実ヲ窺ヒ苟モ擊却アラハ則乘
 テ是ヲ取り其属国トナス事、猶印度諸ノ如クセント欲
 スル也、豈危カラスヤ、我彼諸夷人ノ国ヲ取ニ二術ア
 リ、何ソヤ、曰ク、教也、戦也、戦ヲ以テスルハ止ム事ヲ
 得サルニ、豈ニ彼モマタ甚好ム所ニアラス、教ヲ以テス
 ルハ先ソノ国ノ人心ヲ取也、人心ヲ取ニ術アリ、厚利
 ヲモツテ是ニ陷ハシム、妖教モツテ是ヲ監シ、其術キ
 ハメテ機巧ナリ、故ニ他邦人コレカ為誑誘セラレ、遂
 ニソノ属国トナルモノ勝テ教フヘカラス、今其一証ヲ
 言シ、昔葡萄芽、爪哇、印度・支那中間ノ海中ニ有ルヲ
 以テ、商船一艘爪哇ノ海湾ニ至リ土人ヲ見、泣且請フ
 テ曰ク、ワカ甲必丹病ニカ、ツテ没セリ、然レトモ時
 マサニ酷暑帰葬スヘカラス、今はレヲ海ニ投スルニ忍
 ヒス、モシ貴邦ノ地ニ瘞ルヲ得ハ幸甚シト、土人はヲ
 惻ミモツテ有司ニ白ス、有司マタコレヲ憫ミ其請ヲユ
 ルス、既ニ葬ル、謝スルニ珍貨ヲ以テス、土人大ニ喜
 ヒ、越テ明年又至テ墓ヲ祭り、アツク土人ニ賂フ、土
 人マスノ喜ヒ唯ソノ来ラサルヲオソル、数年ヲコヘ
 又一老僧ヲ載至テ曰ク、是死者ノ弟ナリ、モシ墓側ニ處

シテ香火ヲ薦ムル事ヲ許サハ、幸之ヨリ大ナルハナシ
 ト、土人マタコレヲ有司ニ請ヒ、慮ヲ營ミコレヲ置ク、
 葡萄芽人因テ謝スルニ千金之貨ヲ以テス、土人喜フ事
 甚シ、僧朝夕梵誦操行清嚴、土人コレヲ敬シ、土宜(宜カ)ヲ
 齎テコレニ餽レハ、スナハチ厚幣ヲ以テ之ニ報ス、土
 人ソノ教ヲ聴ク事ヲ請ヘハ、則吏民ヲ会シテコレヲ説
 ク、音吐朗暢満座是カ為ニ竦動シ、遠近靡然トシテ信
 従ス、ソノ説ク処ノ法則邪蘇教ナリ、ステニシテ兵艦
 数十艘ヲ率ヒ来リ、僧ヲシテ土人ノ教ニ帰スル者ヲ煽
 動セシメ、相共ニ城邑ヲヤク、国主之ヲ禦ク事アタハ
 ス、終ニ為ニ庄セラル、其桀黠カクノ如ク、ソノ他西
 夷ノ地ヲ取り疆ヲ拓ク、オホムネ此ニ類ス、唯他邦ノ
 ミナラス我神州ニ施スニモ亦カツテ此術ヲ以テスル事
 アリ、ナホ更ニ詳ニ是ヲ言シ、昔天文十一年葡萄芽マ
 サニ震旦ニ往ントシ、風ニ遇テ我豊後神宮浦ニイタリ、
 国主大友宗麟ニ贈ルニ珍貨及銃砲ヲ以テシ互市ヲナス
 ヲコフ、宗麟大ニ喜ヒ是ヲ許ス、其後二年葡萄芽人大
 船ニ駕シ来リ、ソノ一艘ハ薩摩種子島ニイタリ、是年
 珍宝ヲ遺餽スルモツトモ夥シ、宗麟アツクコレニ酬ヒ、
 其臣齋藤源助ヲシテ其国ニ至テ報礼セシム、是ヨリ毎

歳互市タヘス、蛮人スナハチ誘フニ妖教ヲ以シ、奇幼百出土民コレヲ崇敬スレハ遺ルニ厚幣ヲ以テス、是由テ妖教盛ニ行ル、十八年大和ノ僧了西、亡命シテ臥西洋錢ニ入ル時ニ、葡萄芽ステニ臥亜因テ教国伴天連ニツケ、其法ヲ大ニ我日本ニ行シム、伴天連オホヒニ喜ヒ、其弟子若キ人ヲ扶ニ了西ヲ以テ先導トシ、又九州ニ入ル、大友氏モツトモ崇敬シ、他ノ侯伯士庶モ亦皆信従ス、彼更ニ是ヲ蠱スルニ貿易ノ利ヲ以テシ、珍宝奇貨コト々阿瑠港ヨリ輸送ス、知ル者心酔ヒ目眩シ、ソノ法ニ帰セサルナシ、ヲルコト数年、言語漸通シ情好益厚シ、信従ノ者枚拏スヘカラス、是ニ方テ吞啗ノ心ヲ生シ、士民ヲス、メテ仏寺ヲ壞チ、ソノ教寺ヲ創立ス、織田公モ亦カツテ其法ニ惑ヒ、南蛮寺ヲ京都ニ建テ、蛮僧ヲ延キ其法漸ク中州ニ浸淫シ、高山右近・小西攝津守・明石掃部ノ徒ノ如キ一時ノ豪傑ヲ以テ皆是ヲ崇奉セリ、ソノ後天正十五年豊臣公西征シ、蛮僧ヲ見テ其倨傲ヲ憤リ、寺ヲ壞チ、僧ヲ逐ヒ、愚民ノ邪教ニ穢サル、モノヲ併セ縛リ、悉クコレヲ海外ニ出シ、敵ニソノ教法ヲ禁止ス、然レトモナヲ感シテ反セス、陰ニソノ教ヲ信スルモノアリ、東照宮起リ禁ヲ

設ル事殊ニ敵シク、アハセテ互市ヲ禁スレトモ、遂ニ天草ノ變ヲ致シ、征誅セラレ、死スル者三万余人、其余前後禁ヲ犯シ磔刑ニカ、リ戮セラル、モノ凡二十八万余ニ至リ、邪蘇ノ毒終ニ滅除セリ、邪説ノ人ヲ禍スルコ、ニ至ル、コレモツテ其人ノ國ヲ取ラント教ヲ以テスルノ巧ニシテ、且オソルヘキヲ見ルベシ、其レ我教法既ニ國家ニ害ナクシテ、以テ神州ヲ守ルニ足ラハ、則チ侯伯儒士亦何ソコレヲ破斥誹謗セサルノミナラス、將ニ必喜ンテコレヲ用ントス、我マタ何ソ佛法滅亡スルヲ憂ンヤ、兵法ニ曰ク、知レ彼知レ己百戰百勝ト、臣僧黨ナリト雖トモ幼ヨリ好テ書ヲ讀ミ、古今ノ成敗ヲシテ又喜テ天下ノ豪傑儒士ニ交リ、常ニコレト議論ヲ上下シ、頗ルヨク彼情ヲシレリ、則チ嘗テ自奮テ曰ク、今ノ護法ハ唯法ヲ以テ國ヲ護スルニアアルノミ、法ヲ以テ國ヲ護スレハ教ヲヨクセスンハアルヘカラス、教ヲヨクスルハ他ナシ、民心ヲ維持シ士氣ヲ振興スルニアリ、民心維持スレハ以テ國ヲ護ルヘシ、士氣振興スレハ以テ夷ヲ攘フベシ、而仏敵法讐モ以テ婦依降伏スヘシト、因テ自ら誓テ身ヲ以テ法ニ殉ヒ、我責ニ任シ、我職ヲ尽サント欲スルナリ、故臣僧郷國

ニアリ門徒ヲ教化スルニ、専ラ中興法主作ル所ノ掟ノ
 文ニ根拠シ、ハシメ他力信心ノ旨ヲ述テ曰ク、ソレ此
 信心ハ宗祖上人(勳)觀化ノ本ニシテ、阿彌陀仏大願強力ヲ
 以テ増上縁トスル仏願所成ノ真実至誠ノ心也、惑易キ
 凡夫ノ迷心ニハアラサルナリ、此信則チ衆生往生ノ正
 因凡夫成仏ノ淨業ナルカ故ニ、汝們ヨク聽聞シ、内心
 ニ深藏スルモノ後生淨土ノ生ヲ得、無上ノ極樂ヲ極ム
 ル事固ヨリ論ヲ待ス、其現世ニアルニ亦一心堅固猶金
 剛ノ如ク、然リ天下誰カヨク之ヲ惑ハシ、之ニ敵スル
 者アラシヤ、次ニ王護地頭方ニ向テ、ワレハ信心ヲ得
 タリトイフテ疎略ノ義ナク、愈々公事ヲ全フスヘシ掟
 ノ文ヲ述テ曰ク、吾聞ク、汝們門徒ノ中マ、或ハ宗意
 ヲ誤マリキトイフ、吾等既ニ仏祖教ニ因テ他力信心ヲ
 得、唯当来永世ノ樂果ヲ期スルノミ、又何区々トシテ
 五十年暇托ノ世事ニ身心ヲ勞スル事ヲ用レハ、遂ニ公
 事ヲ疎略ニシ、産業懈怠シ、コレニヨツテ罪ヲ領主地
 頭ニ得、謗ヲ他宗他門ヨリ來スルモノ往々コレアリト、
 嗚呼何ソ思ハサルノ甚シキヤ、凡下民タルモノ信心ヲ
 得ストイヘトモ公事ヲ勤メ、国家ノ洪恩ヲ報スヘキハ
 勿論ナリ、況ヤ我宗ノ門徒コノ信心ヲ聴キ得、イハユ

ル現当二世ノ果報ヲ得ルモノ仏祖(度カ)濟渡ノ功ニヨルト雖
 トモ、抑又國王大臣外護ノ力ナリ、之ヲ未タ信セサル
 人ニ比スルニ、其恩ノ大小輕重弁スルヲ得シテ知ル
 ヘシ、法主ノ愈々公事ヲ全クスヘシト云フモノハ之レ
 カ為ノ故ナリ、而シテ今日公事最大ニシテ、汝們疎略
 ナク全クスヘキモノハ海防ヨリ急ナルハナシ、何トナ
 レハ則チ夷狄ハ神國ノ寇ニシテ主ノ愾スル所ナリ、將
 軍ノ憂慮スル所ナリ、國主地頭奔命ニ疲ル所ナリ、蓋
 シ彼ノ頻年屢々來去スルハ、其意我神國ヲ奪、犬羊ノ
 屬國トスルニアリ、此神國ノ寇ニアラスヤ、癸丑ノ夏
 墨夷ノ浦賀ニ(割)攔入スルヤ
 今上天皇御詠アリ、曰、「朝ナタナ民ヤスカレトイノ
 ル身ノ、コ、ロニカ、ル異國ノ船」ト、コレ王ノ愾ス
 ル所ニアラスヤ、其時愼徳公憂慮、天下ノ諸侯辺防ニ
 勞シ、戍役ニ困シ、列國疲弊困窮ス、コレ將軍ノ憂慮
 スル所ニアラスヤ、詩ニ曰ク、普天之下莫非王土、率
 土之濱莫非王臣ト汝們微賤ト雖トモ、既ニ王土ニ生シ
 王臣トナル、モシ王愾ニ敵スル心ナキ時ハ、此皇國ノ人
 民ニアラサルナリ、皇國ノ人民ニアラサレハ則チ外國ノ
 人ナリ、夷狄ノ民ナリ、墨魯英佛ノ奴隸ナリ、今上ス

テニ夷船ノ攔入(亂)ニヨツテ汝們万民ノ安穩ヲ得サルヲ憂へ、
憂慮ヲ惱シメタマフ、試ニ問フ、汝們下民之當時夷舶來ル国ノ憂慮如何ト思タルモノアリヤ、若シソノ人ナカリセハ旌旗ヲ見ス、安穩ニシテ腹ヲ大平ニ鼓スル、抑誰ノ力ソヤ、豈照宮亂ヲ撥シテ正ニ反シ、征夷職ニ任シソノ賢子孫相統キ、天下之大政ヲトリ四海ヲ治平スル功ニアラスヤ、苟モ此恩沢ニ沐スル者、將軍ノ憂慮シテ身命ヲ殞ス所ノ者ノ為ニ、讐ヲ報スル心ナクシテ可ナランヤ、又汝們祖先以來ヨリ汝カ身ニ迫フ迄、妻子眷屬住居スル所ノ屋宅、耕(ヤヒ)ヘス所ノ田畝ハ尽ク皆国王地頭ノ所領ナリ、其宅ニ住シ、其田ヲ耕シ、數世飢渴ノ憂ナク、飽食暖衣シ、其防禦ニ勞シ奔命ニ疲カル、ヲ見ル、越人ノ肥瘠ヲ視ルカ如クシテ汝カ心ニ慄(慄)キカ、抑マタ神国モシ夷狄ニ有セラレ、彼カ邪教盛ニ行ハル、ニ至テハ、我仏法焉ソ滅亡スルナキヲ保ツヲ得ン、是ヲ以テ當時法主モ亦歌ヲ製シテ曰ク、「エミシ等ヨハヤタチカヘレ神ノマス国トシラスニナニ襲フラン」ト、コレ夷狄ハマタ仏敵法讐法主ノ速ニサラント欲スル所ナリ、汝們法主教化ニヨリ無上ノ法ト他力ノ信ヲ得、現当ニ世利益ヲ蒙ル者夷狄ノ船諸所

攔入(亂)スルヲ見キ、已ニ度外ニオキ、法主ノ憂フル所ヲ憂ヘサルハマタ我門徒ニハアラサルナリ、他宗ナリ、宗門ノ罪人トイフ可シ、コレニ由テコレヲ觀レハ、今日公事ノ最モ大ニシテ汝們疎略ナリ、全クスヘキハ豈海防ヨリ急ナルハナキニアラスヤ、然リト雖トモイハユル海防ナルモノ、汝們卑賤ノ下民祿位ナキモノヲシテ、士人ト同ク甲冑ヲ被リ劍槍ニ舞シ、銃砲ヲ放發シテ、以テ夷人ト勝負ヲ彈丸矢石ノ間ニ決セシメント欲スルニハアラス、唯汝們ヲシテ一心堅固ナラシメ、彼ノ邪教ニ蠱惑セラレサラシメント欲スルノミ、書ニ曰ク、紂有ニ臣億万、惟億万心、周有臣三千惟一心ト、孟子曰ク、天時不如地利、地利不如人和、城非不高也、池非不深也、兵革非不堅固也、米粟非不多也、委而去、是地利不如人和也、是ニ由テ之ヲ觀レハ、国ヲ守ルハ敵ニ勝ト雖、皆民心ノ和シテ一ナルヨリ善キハナシ、夫我邦高山絶岳多クシテ四面海ヲ環ラシ、要害ノ国トスルノミナラス、近頃幕府及ヒ諸藩砲台ヲ築キ、巨艦ヲ造リ、大砲ヲ鑄、甲冑ヲ繕ヒ、以テ兵糧ヲ蓄積セラレタリ、コレ城高ナリ、池深キナリ、兵革堅利ナルナリ、米粟多キナリ、然トモ若汝們億万ノ民心和セサレ

ハ、則不幸ニシテ万一沿海變ヲ生スルトキ、恐ラクハ
 タ、委テコレヲ去ルノミナラス、必マサニ戈ヲ倒ニシ
 テ走り、爪哇人ノ葡萄芽ニ於ケルカ如クナルヘシ、嗚
 呼又危カラスヤ、但鬼神ヲ好ミ貨財ヲ貪ルハ、賤民常
 情ノ免レサル所ナリ、豈独リ賤民ノミナラン、士大夫
 ト雖トモ亦巫覡ヲ信シ、狐狸ニ疊シ、利祿ヲ貪ルモノ
 アリ、今ヤ邪教ノ蠱惑スル、豈巫覡狐狸ノ比ナランヤ、
 夷狄ノ人ヲ誑誘セラレサルヲ期スルハ亦甚難シ、此故
 ニ汝們サキニ勸メシ所ノ他力信心ヲ聞持スルヲ急務ト
 セヨ、コノ信心ハ則チ仏願婦命一心ニシテ億万離心ニ
 ハアラサルナリ、モシヨク其堅固ナル力独金剛ノ如シ、
 則チ千百万ノ夷狄一時ニ来リ迫リ、百万ニ誑誘スルト
 モ夫レ將タ此ヲ如何センヤ、語ニ曰、三軍可奪帥也、
 匹夫不可奪志也トハ、愚夫愚婦ト雖トモヨクコノ信心
 ヲ聞持セハ、以テ三軍ノ帥ニカツヘキナリ、夫死生ノ大
 事ニ疑ナク死ヲ視ル婦スルカ如キハ、固ヨリ仏者ノ常
 ニシテ、我宗信者ノ尤モ長スル所ナリ、是ヲ以テ石山
 ノ役鳥合ノ門徒織田氏老練諸將ト戦ヒシハ、タ、ソノ
 鋒銳ヲ挫キ一寺ヲ守ル十数年、亦以テ大願強力天下ニ
 敵ナキヲ見ルヘシ、然リト雖トモコノ役ステニ祖宗ノ

遺訓ニ違ヒ、僧徒戈ヲトリ、私ニ天下ノ兵ヲ動カスハ、
 固ヨリ宗門ノ美事ト謂フヘカラス、今ハ則チ然ラス、
 天下ノ為メニ外ハ寇ヲ攘フテ、以テ國家ヲ護ルハコレ
 公事ナリ、善戦ナリ、故ニモシ辺海事アルニ及ハ、
 乃チ汝們一同ニ奮発シテ身命ヲ惜マス、昔織田氏ニ勝
 ツ所ノ信力ヲ以テ、夷狄ヲ波濤洶湧ノ間ニ鑿ニスルモ、
 亦何ノ不可カコレアラン、死ハ均ク死ナリ、衾辱ノ上
 ニ斃レ、徒ラニ草木ト共ニ朽果シヨリハ寧ロ彈丸矢石
 ノ下ニ斃レ、生テ勤王ノ忠臣トナリ名ヲ千歳ノ後ニ輝
 シ、死シテ往生成仏シ、寿ヲ無量ノ永キニ保ツニ若シ
 ヤ、臣僧憂國護法ノ赤心ヲ以テ、慷慨激烈割切ニ論ス
 事斯ノ如シ、之ニ由テ門徒ノ中往々流涕感奮身ヲ挺シ
 テ大義ニ赴カント欲スルモノアリ、著フ所ノ銅器ヲ出
 シテ、コレヲ藩ニ獻シテ以テ鑄砲ノ用ニ充ント請フ者
 アリ、最モ奇特ナルハ、寒女窶婦一簪一衣ヲ獻シ、國
 用ノ助ニ充ント願フモノアリ、唯門徒ノ感奮スルノミ
 ナラス、士大夫儒生平生我法ヲ誹謗破斥スルモノトイ
 ヘトモ、一度臣僧ノ説ヲ聞ケハ、則チ慨然トシテ腕ヲ
 振り、歎憤ノ氣ヲ壯ニシ、而シテ鄙説ヲ以テ確当カニ
 ヘカラストナラサルナシ、蓋シ義氣相感スル、自ラ人

ヲ悚動興起スルノミ、故ニ藩ノ執政已下凡ソ有志ノ者
争フテ臣僧ヲ延テ、以テ時務ヲ義論シ、マタ招テ其采
邑ニイタリ、前ニ述ル所ノ意ヲ以テ臣民ヲ教諭セシム、
客多藩府マタ内命ヲ下シ、鄙説ヲ以テ時務ニ於テ裨益
少ナカラストシ、向後招クモノアラハ則チ之ニ趣キ、
倍々精神ヲ竭シテ以テ教諭セシム、臣僧深く過稱ノ実
ニ過クルヲ恐レ、益々自ラ激勵其実ヲ求メテ、以テ我責
ニ任シ、我職ヲ尽サント欲スルナリ、夫臣僧ハ一介ノ
狂禿ノミ、然レトモ猶ホ此説ヲ持シテ、以テ侮リヲ一
方ニ防クニ足レリ、況ヤ学徳位望臣僧ヨリ勝リタルモ
ノニ於テヲヤ、又況ンヤ一家ノ大法主之ヲ以テ化道ス
ルニ於テヲヤ、伏テ願クハ今ヨリ以後大法主益知莊嚴
ヲ盛シ、学徳ヲ挙ケ、賢才ヲ用ヒ、言路ヲ開キ、下情
ヲ通シ、土木ヲ興サス、宮室ヲ崇フセス、賄賂請托ノ
路ヲ防テ、以テモロ／＼福莊嚴ノ国家ニ害アルモノヲ
除カハ、則チ天下門徒信心ヲ行フ者靡然トシテ風動シ、
億万一心敵愾ノ誠ヲ生シ、大拳シテ勤王ノ義ニ赴クモ
難カラサルナリ、果シテ然ラハ則夷狄ハ防ニタラサル
ナリ、皇國ハ護ルニタラサルナリ、而シテ宗門以テ國
ト存スヘシ、臣僧故ニ曰、今時国家以中興スヘシ、今

(論九)

勢宗門可ニ以再隆、何ソ神州ノ陸沈シ仏法ノ滅亡スル
ヲ憂フル事カコレアラン、嚮キニ臣僧微命ヲ蒙リテ京
ニ入り、罪ヲ逆旅ニマツ、意ハサリキ、校書ノ命ヲ受
ケ月俸ノ賜ヲ辱シ、以テ東山ノ刑館ニ寓セシメ、又不
次ノ撰ヲ以テ学階一級登リ持通優待望外ニ出ントハ、
海嶽ノ天恩コレニ報ユル所以ヲシラサルナリ、此頃更
ニ命アリ、意見ヲ書シテ以テ之ヲ獻セシメ、則謹テ素
論ヲ述ヘ、敢テ規諷ノ言寓シ、以テ尊嚴ヲ冒瀆ス、涓埃
ノ裨補ヲ効スニ足ラスト雖トモ、聊獻花ノ微衷ニ擬ス
ルノミ、伏シテ願クハ大法主之ヲ寛容シ狂妄罪ヲ録セ
ス、区々ノ意ヲ察セス、即幸甚々々、臣僧月性昧死惶
恐和南、

三四〇 阿部伊勢守卒去布告〔安政四年〕

(安政四年)

已六月二十八日為御詰日、永井肥前守様・黒田和泉守
様被成御出仕候処、久世大和守様被成御渡候由ニテ、
堀伊豆守様御達被成候御書付写一通、御用廻状ヲ以来、
久世大和守殿御渡

詰衆

大目付へ

伊勢守阿部正弘卒去ニ付、国持衆表向之面々、老中宅へ、
明二十九日、以使者御機嫌可被伺候事、

一 雁間詰・菊之間縁頼詰・諸番頭・諸物頭・諸役人へ、
為伺御機嫌、明日四時、可有登城候事、

一 在国在邑之面々へ、飛札ヲ以、御機嫌可被相伺候事、
一 鳴物へ、今二十八日ヨリ晦日迄停止候事、

但普請不苦候、

右之通可被相触候、

(安政四年)
六月二十八日

(續徳川実紀(國史大系)にて校訂)

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編

安政二年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数五十四枚）」の記載あり〕

目録

諸国寺院ノ梵鐘大小砲鑄換詔勅ニ対シ幕令

寺院ノ梵鐘鑄換ノ詔勅ニ対シ引揚ノ手順各藩へ布令

〔諸宗触頭共へ諭書〕

寺院梵鐘曳揚ノ内査

梵鐘鑄換寺社奉行へ達書

東叡山へ達書

林大學頭へ達書

御三家方始万石以上以下向々へ可相達下案

卯三月廿八日阿部伊勢守ヨリ差上候書面

擬論天下緇徒

知恩院梵鐘鑄換停止歎願

梵鐘鑄換ノ事ヲ近衛忠熙公ヨリ尾州侯へ御書翰

齊彬公尾州侯ニ送ル書版

梵鐘毀壞ノ説

梵鐘鑄換事件近衛忠熙公尾州侯へ書翰

延曆寺大衆梵鐘鑄換停止歎願

日光門主梵鐘鑄換停止歎願

齊彬公春嶽公へ内報

齊彬公春嶽公へ回答

尾州侯近衛公へ返翰

以上二十条

三四一 諸国寺院ノ梵鐘大小砲鑄換詔勅ニ対シ幕

令

卯九月晦日〔輸出日〕為御話日、牧野備後守様・板倉伊豫守様被

成御出仕候処、阿部伊勢守様御渡候由〔五月二十七日〕ニテ、柳生播磨

守様被成御達候御書付写二通、備後守様ヨリ御用廻状

ヲ以来、

阿部伊勢守殿御渡

御詰衆

大目付

○以下の文書は、本文第一四四号文書中の二四(安政二年九月二
十七日付老中達)と同文により附す。

三四二 寺院ノ梵鐘鑄換ノ詔勅ニ対シ引揚ノ手順

各藩へ布令

^{三四二の一}
卯十月二日寺社御奉行安藤長門守様ヨリ、御留守居御呼出以寺社
役御渡有之、

諸国寺院梵鐘之儀ニ付、今般御触有之候ニ付、右心得
ヲ以、御領分内附屬之寺院呼出、別紙心得方書取之趣相
含、品ニ寄檀家惣代ノモノトモヲ呼出、本末糺之上、
本寺之分ハ梵鐘有無、并本山又ハ本寺・小本寺等之訳、
其外国郡村寺号ヲ記置、婦寺申付、末寺之内梵鐘無之
分モ同様取計、相残候末寺之分ハ、古来之名器・当節
時之鐘ニ相用候旨申立候分ハ勿論、御由緒其外遮テ難
渋申立候類ハ相除、全無異儀梵鐘可差出寺々ト治定イ
タシ候分ハ、勝手次第鑄換之積請書申付、右名器・時
之鐘、其外難渋之由申立候寺院ハ、追テ可及沙汰旨申
渡、是又婦寺申付置、御領内惣寺院何ヶ寺、内本寺何

ヶ寺、鐘幾ツ、末寺何ヶ寺、内何ヶ寺ハ鐘無之、何ヶ
寺ハ請書差出、何ヶ寺ハ名器・時之鐘其外難渋之由申
立候段、届書直ニ長門守方へ差出、右名器難渋之由等
申立候分別紙ニイタン、取計方之儀、是又長門守方へ
申出、受差図可被取計候、尤末寺之分モ、何宗何国何
郡何村何寺末、何国何郡何村何寺ト認可差出候、依之
別紙心得方書取、并奉行所ヨリ諸宗触頭共へ申諭置候
趣モ有之候ニ付、為心得論書写ヲモ相添相違候事、

^{三四二の一}
別紙

心得方書取

一 諸寺院梵鐘之儀ニ付、御触之内、古来之名器ト有之候
ハ稀成儀ニ可有之候間、名器タル事判然無紛分計相除
候積、
一 鐘銘之内、
勅願、台命、
宝祚長久御武運悠遠、其外 天下泰平国家鎮護等之文
字有之候トモ、不及斟酌事、
一 御由緒并諸家由緒等有之由之銘文有之候趣ニテ、用拾
之儀申立候トモ、容易ニ可被取用筋ニハ無之、尤格別

訳立候分、其外遮テ難決申立候分ハ、長門守方へ可申聞事、

一本寺ト唱候内、大本寺・中本寺・小本寺・本寺並等之名目有之候ヘトモ、一二ヶ寺ニテモ末寺門徒有之候分ハ、相除候積、

但諸国録所掛所、其外末寺ハ無之候トモ、本寺モ無

之一本立候類之大地、或ハ寺格宜分ハ、時宜次第是又長門守方へ可申聞事、

一御朱印地之分差別無之事、

一塔頭地中モ門末無之候ヘハ、末寺同様之事、

但神社之別当、社僧モ同断之事、

一領主附屬ニ無之寺院ハ、縦令領内ニ孕リ居候トモ、

公儀ニテ取調被 仰付候間、私領ニテハ相除可申候事、

一寺院之内無住之分、留守居僧等ニテ難決節ハ、其寺兼

帶之本寺、又ハ法類組合寺等相糺、請印可申付事、

一梵鐘差出方持連ヒ等之儀、寺院共難儀不相成様、追テ

請取ノモノ差遣可申、万端領主方ニテ取計可申事、

右ハ大凡之心得方ニ付、難決儀ハ長門守方へ可申聞事、

(大日本古文書(幕末外國關係文書)にて校訂)

三四三 諸宗触頭共へ論書

三四三の一

諸国寺院ニ有之候梵鐘之儀、本寺之分并古来之名器・

時之鐘ニ相用候分相除、其余ハ大砲・小銃ニ鑄換候儀

ニ付、今般再応被 仰出候通、梵鐘之儀ハ仏門之重器

ニ付、尋常之訳ヲ以可被及御沙汰筋ニハ無之候ヘトモ、

近来異国船度々渡来イタシ、不容易御時節ニ付、格別

之

叡慮モ有之、右体重キ法器ヲモ鑄換被 仰付候儀ニ付、

此上難決ケ間數儀ハ勿論、非常用等申立、歎願等イタ

シ候テモ、御取用可相成筋ニハ無之、万一心得違之輩

モ有之候ハ、於奉行所吟味之上、嚴重之御沙汰ニモ

可被及候条、御触之趣厚相弁、心得違無之様、末々寺

院ニ至迄、不洩様早々可申達事、

(大日本古文書(幕末外國關係文書)にて校訂)

三四三の二

海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵鐘本寺之外古来之名

器及ヒ当節時之鐘ニ用候分相除キ、其余可鑄換大砲・

小銃ノ旨從京都被 仰進候、海防之儀專御世話有之候

折柄、

叡慮之趣深御感戴被遊事候間、一同厚相心得海防筋之

儀弥深可相助旨從 公儀被仰渡候、右ニ付銅鉄ハ勿論

鉛錫、陶器等ニテ相濟候品ヲ右類ニテ相調候儀、又ハ

銅鉄ヲ以新規ニ仏像等鑄造致、シ又ハ仏器モ木製・陶器ニテ相濟候分ハ、以來銅鉄類ヲ以製造之儀可為無用旨モ被仰渡候、

右之趣不洩様可致通達、

四月

御家老座印

這達書ニ則リ、薩隅日三州中、及ヒ諸島大小ノ寺院ニ在ル梵鐘及ヒ仏像・仏具ノ類、銅製ノモノ調査命セラレ、而シテ安政五年ニ至リテ、時報鐘ヲ除クノ外悉皆収メシメ、大砲製造局ニ渡シ鑄換セントスルニ方リ窮セラレ、後齊興公ノ命ニ依リテ返下セラレタリ、返下セラレタルニ就テ、當時巷説ニモ涉レルコト勘カラサリキ、而シテ慶應二三年ニ至リ、忠義公寺院廢除ノ一大英断ヲ以テ鑄換スヘキ旨命セラレ、軍器又ハ天保通宝ニ鑄換シ、要用ノ料トハナレリ、詳ナルハ舊邦秘録寺院廢滅ノ部ニ記スルカ如シ、

三四三の三
○この文書は、本文第一四四号文書中の二四ならびに第三四〇号文書(安政二年九月二十七日付老中達)と同文により略す。本文省略に従い、異なる末部の月日のみを収む。
九月晦日

三四三の四

梵鐘之儀ニ付書附

御朱印地除地坎(狀脫カ)

何州何郡何村何宗何寺末

何宗惣本山

全 本寺歇

全 本寺並

全 無本寺

何州何郡何村

何寺院

長サ何尺何寸

差渡何尺何寸

厚サ何寸

右銘文之写

一 古来ヨリノ名器欵、当節時ノ鐘ニ用候有無ノ訳、

一 檀越寄進ノ訳、

一 本山本寺并無本寺、并未寺有無ノ訳、

一 本山ノ外、寺格有之向ハ、其訳可申立候、

一 梵鐘前々ヨリ無御座候、

但シ、往古有之、當時中絶之向ハ、其訳可申立候、

右之趣相違無御座候、以上、

名器并時之鐘ニ相用候儀無之向ハ、(其訳可申立候、脱カ)

右之通相違無御座候間、何時ニテモ差上可申候、以上、

安政二卯年十一月

肩書見出之通

何寺院印

〔御脱カ〕
奉行所宛

三四三の五

梵鐘之儀ニ付書付

案

御朱印地欵除地欵

御代官

何之誰領分 附屬

知行所

何州何郡何村何宗何寺末

惣本山

本寺欵

本寺並

無本寺

何州何郡何村

何寺院

長サ何尺何寸

差渡シ何尺何寸

厚サ何寸

在来
一梵鐘

右銘文之写

一古来ヨリノ名器欵、当節時之鐘ニ相用ヒ候有無之訳、
一檀越寄進之訳、

右之通相違無御座、則御代官領何ノ誰方ヘ書附差上ケ申
候、以上、

安政二卯年十一月

肩書見出之通

何寺院印

奉行所宛

三四四の六

口達書

諸国寺院ニ有之候梵鐘之儀、本寺之分並古来之名器・
時之鐘ニ相用候分相除、其余ハ大砲・小銃ニ鑄換候儀
ニ付、今般再心被 仰出候通、梵鐘ノ儀ハ仏門ノ重器
ニ付、尋常ノ訳ヲ以可被及 御汰沙筋ニハ無之候ヘト
モ、近来異国船度々致渡来、不容易御時節ニ付、格別
ノ 叡慮モ有之、右体重キ法器ヲ鑄換被 仰出候儀ニ
付、此上難渋ケ間敷儀ハ勿論、非常用等申立歎願等致
シ候テモ、御取用ニ可相成筋ニハ無之、万一心得違ノ
輩モ有之候ハ、於奉行所吟味ノ上、嚴重ニ御沙汰可
被及候条、御触ノ趣厚ク相弁、末々寺院ニ至迄、心得
違無之様可致候、

一録所・掛所其外末寺ニ無之候テモ、本寺モ無之一本立類ノ大地ハ勿論、其外共寺格ノ次第可申立事、
一御朱印地ノ分、差別無之事、
一塔中寺中モ、門末無之候ヘハ、末寺同様相心得、神社

別当・社僧モ全断ノ事、

一御代官御預所、領主地頭附属無之寺院並其寺社領ノ寺院ハ、最寄次第其所ノ奉行所ニテ取調候間、其旨相心得被申立事、
(可み)

但本文御代官其外附属ノ寺院ハ、梵鐘ノ有無、右御代官其外ヘ申立候段、書附可差出申事、

一寺院ノ内無住ノ分、留主居僧等ニテ難決節ハ、其寺院兼帯ノ本寺、又ハ法類組合寺等ヨリ可申立事、
右之通相心得、其余別紙案文ノ趣ヲ以取調、美濃紙帳面ニ三通相認、早々備後守御役所ヘ可差出申事、

卯十一月

三四三の七

諸国寺院ニ有之候梵鐘ノ儀、本寺並古来ノ名器・当節時ノ鐘ニ相用候分相除、其余ハ不殘大砲・小銃ニ可鈔

換旨、先達テ

叙慮ヲ以被

仰出候、一体梵鐘ノ儀其寺々ノ法器ニ候ヘハ容易ニ御沙汰可有之品ニ無之候ヘトモ、近来諸夷引続入津致、武備專要ノ御時節、大砲・小銃トモ急務ノ品ニテ、御国備御堅固ニ被成置度格別ノ叙慮モ有之被

仰出候事ニ候条、寺院ハ勿論、大小ノ檀越寄進ノ輩ニ至迄厚御趣意ノ程相弁、法用ノ儀ハ在来ノ半鐘又ハ盤木・太鼓等相用、本寺并名器当節相用候時ノ鐘ノ外、撞鐘ノ分ハ一同

公儀ヘ可差上候、勿論万石以上領内ノ分ハ、其所ノ領主ヘ被下領主ニテ鈔換、万石以下知行並御代官・領主地頭ハ附属ニ無之寺院、其寺社領ノ分ハ、御料所寺院一同、公儀ニ於テ鈔換被

仰付候間、御府内ハ寺社奉行、其余ハ最寄遠国奉行・御代官・御預リ所領主ニテ、寺院本末并梵鐘有無、名器・時ノ鐘ノ訳等札ノ上取計、尤時宜ニ寄、檀家惣代ノ者呼出候儀モ可有之候、

一万石以下知行ノ分モ、自分ニテ鈔換ノ儀相願候ハ、其通ニモ可被仰付候間、早々願書可差出候、

但自分ニ鈔換被仰付候ヘハ、

公儀ニテ御構無之候間、万石以上ノ振合ニ準シ、

知行寺院(所説)一手ニ取計候儀ト可心得候、

右御書附從江戸表到来候条、得其意、当地ハ勿論他国

ニ罷在候末寺末派ニ至迄、被

仰出ノ趣厚可相心得、尤梵鐘差出方等ノ儀ハ、追テ可

申渡間、其旨可存段、夫々不洩様可申渡候、

右之通本寺へ申渡候間、無本寺ノ寺院ニテハ此触書ヲ

以テ致承知、被 仰出ノ趣厚可相心得候、

十月

別紙御書附老通從江戸至来候間、御書面ノ趣承知可仕候、

卯十一月十九日 備後印

中務印

近江国蒲生郡村々

寺社

庄屋

年寄

右之通被 仰出候間、則写相廻シ候、町々家並寺院申中不洩様可被相触候、廻状早々順達、留リ町ヨリ会所へ、可被致返却候、以上、

卯十二月三日

惣年寄 (大日本古文書(幕末外国關係文書)にて校訂)

三四四 寺院梵鐘曳揚ノ内查

三四四の一 下書向々へ可相達趣手跡奥御右筆調ニ見ユ

○この文書は、本文第二九六号文書の一(安政二年正月付老中達案)と同文により略す。

三四四の二

寺社奉行へ

○この文書は、本文第二九六号文書の二(安政二年正月付老中達案)と同文により略す。

三四四の三

下書向々へ可相達趣此分モ奥御右筆調ニ見ユ

御三家方始万石以上以下向々へ可相達趣

○この文書は、本文第二九六号文書の三(安政二年正月付老中達案)と同文により略す。

三四四の四

寺社奉行へ

下ケ札

○この文書は、本文第二九六号文書の四と同文により略す。

三四五 梵鐘鑄換寺社奉行へ達書

海岸防禦之為、此度諸国寺院ノ梵鐘ヲ以可鑄換大砲・小銃之旨、旧臘廿三日於京都

宣下有之、別紙之通被 仰出候、近来夷船度々渡来、

御備向之儀早々御計画被為在候折柄、

叡慮之趣御尤之儀被 思召候、右体重キ被

仰出候条厚相心得、本寺之外並古来之名器及ヒ当節時

之鐘ニ相用候分相除、其余ハ悉ク可差出候、万一遠境

辺土之者等、不存時勢御趣意柄難相弁ヨリ心得違之者

モ出来候テハ不容易事ニ付、末々迄能々心得致シ候様

入念可説示候、尤差出方等委細之儀ハ、追テ可相達候、

右之趣諸寺院へ不洩様、早々可被申渡候、

正月

三四六の一

増上寺加勢へ

同文言

別紙之通被

仰出候、委細之儀ハ寺社奉行ヨリ可相達候間、可被得

其意候、

三四六の三

三奉行海防掛へ被達

大目付

御目付

同文言

旧臘廿三日於京都

宣下有之趣今日被 仰出候、右鐘為差出方之儀、早々

評議イタシ可被申聞候事、

太政官符写一枚添

但外表事情ヨリ符到奉行迄ノミニテ、前後ハ都テ白紙ニ

テ張ケシ、

三四六の一

三四六 東叡山へ達書

上野執当へ東叡山ヲ云フ

海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵鐘ヲ以可鑄換大砲・

小銃之旨、旧臘廿三日於京都

宣下有之、別紙之通被 仰出候、此段日光御門跡へ可

被申上候、尤委細之儀ハ寺社奉行ヨリ可相達候間、可

被得其意候、

正月

三四六の四

林大學頭申出書付

○この文書は、本文第二九七号文書の一（安政二年正月付林緯上
申書）と同文により略す。

三四七 林大學頭へ達書

表端書ニ 林大學頭

大學頭差出候別紙

向々へ御達之案

御出候品モ可有之トノ事ニ候、以下原文ノ通り尤本寺之外ハ古来云々此二字朱書
掛紙ナリ、原文ハ并ノ字
以下都テ大學頭調候通りユへ、写略ス、

寺社奉行へ

三四七の一

御三家始万石以上以下向々へ可相達趣

○この文書は、本文第二九七号文書の二（林繪上申書別紙）と
文により略す。

海岸防禦之為ヨリ宣下有之迄 大學頭原文之通り、既是ヨリ

ニ公辺ニオヒテモ、金・銀・銅・鉄等之諸御道具類、
リ以下朱書掛紙也、原文ハ別帶ノ通

御当用ニ不被為在分ハ、都テ御取毀御実用ニ御充被成

三四七の二

寺社奉行へ

○この文書は、本文第二九七号文書の三（林繪上申書別紙）と同
文により略す。

候筈ニ候、
是ヨリ以下都テ原文ノ通り

右ハ格別重キ被 御出候条厚相心得、本寺之外ハ古来此一宇
朱書、掛紙通ナリ

之云々、

末文

此行丸々白紙ニテ張テ
但別紙官符写ハ、其許心得迄ニ相達候事ニ候、

三四八 御三家方始万石以上以下之向々へ可相達

下案

海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵鐘ヲ以可鑄換大砲・

小銃之旨、旧臘廿三日於京都

宣下有之、「傍書、是ヨリ以下朱書ニテ掛紙下之原文

ハ於当地モ兼々云々、大學頭通也」既ニ 公辺ニヲヒ

テモ、金銀銅鉄等之諸御道具類御当用ニ不被為在分ハ、

都テ御取毀御実用御充被成候筈ニ付、一同厚相心得海

防筋之儀弥可相励、猶右等之儀ニ付テハ、被

御三家方始万石以上以下向々へ可相達趣此ハ奥御
右筆方調
ノ面々ハ張紙又ハ前後ノ
文ヲヌキサシイタシ候也

海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵鐘、本寺之外ハ古来
之名器及ヒ当節時之鐘ニ相用候分相除、其余悉ク可鑄

換大砲・小銃之旨、於京都

宣下有之候、右ハ近来異船度々渡来、御備向之儀早々

御世話有之候ニ付テハ、兼々御内存モ被為在候折柄、

叡慮之趣御尤之儀被 思召、以寺社奉行諸寺院へ申渡候間可被得其意、委細之儀へ追テ可相達候、

正月

寺社奉行へ

同文言

宣下有之候ニ付、諸寺院へ不洩様早々可被申渡候、尤委細之儀へ追テ可相達候間、其段モ申渡可被置候、

上野執当へ

海岸防禦之為、此度諸国寺院之梵鐘ヲ以可鑄換大砲・

小銃之旨、於京都

宣下有之、以下原文ノ通り此段日光御門跡

正月

増上寺へ手紙、別紙之通被 仰出候ノ八字ヲ白紙ニテ

張ケシ、原文其余同シ、

三奉行海防掛大目付御目付へ達

右御書面梵鐘為差出方等之儀へ、別紙評議イタシ申候

通、先ツ海防掛へ取調方被 仰付、其上ニテ向々へ御下被成可然哉ニ御座候、

御触案是へ評定一座調候様相見候事、

○この文書は、本文第三〇〇号文書（安政二年正月付老中達案）と重複により略す。

三四九 卯三月廿八日阿部伊勢守ヨリ差上候書面（島津喜彬宛）

三四九の一

以愚書奉申上候、殊之外南風強御座候得共、其後被成御統御持病氣へ、御快方被為在候哉奉伺度候、

陳へ過日御登城之節申上置候官符御引替之儀ニ付、京

地ヨリ申来書面并右へ差出候返事扣共、為御心得入御

覽候、御請取可被成下、右段奉申上度如此御座候、以

上、

三月廿八日

阿部伊勢守

尚々、書面早様御返却可被成下候、

三四九の二
〔別紙一〕

所司代脇坂淡路守ヨリ伊勢守初六人へ連銘之書翰

御別紙ヲ以被仰聞候梵鐘鑄換之官符御引替之儀へ、時

宜次第ニ候へへ、関白殿へ面謁之上折入厚及内談様被

成度、右ニ付御評議之趣別紙ニ御書取、私心得迄ニ被遣之、示談之砌相含応答イタシ候ハ、可然思召候間、篤ト勘考之上御不都合之儀無之様、精々厚可取計旨委細承知仕、御書取一通落手仕候、以上、

三月十六日 脇坂淡路守

阿部様

尚以官符御改ニ可相成哉之御文言、為御念右写へ御掛紙被成被遣之、是又落手仕候、御封印一返上仕候、以上、

三四九の三
〔別紙一〕

海岸防禦之為、諸国寺院之梵鐘可鑄換大砲・小銃之旨早速

宣下相濟、実以出格之

叙慮深ク 御感戴被遊候御事ニ候、然ル処官符之末文、及辺海無事之時、復又宜銷兵器以為鯨鐘トノ御文言之儀、旧冬 御内慮被 仰進候節、可為 御内慮之通旨被仰出候段御達被成、今更被 仰越候ハ如何ニ候得共、後々之儀篤ト御考候テハ、若後年ニ至リ寺院之輩右御文言ヲ抛ニイタシ、彼是噂願等申出間敷モノニモ無之、

往々混雜之基ニ可有之哉、後年之御不為ト御心付、其尽 御奉行被為在候儀御心配被成、右御文言之儀ハ無御余儀御意味ニテ、右様被 仰出候儀ニモ可有之、殊ニ一旦被 仰出候重キ官符之儀御改等之儀ハ、不容易御筋合ニ可有御座候へトモ、可相成ハ

御所向ヨリ御心付、右拾七字御除ニ相成候欤、若御除ハ相成兼候御模様ニモ候ハ、辺海無事国力充実之後別ニ銅材ヲ以梵鐘鑄立之義ハ勝手次第ト、申様之御文言ニ御改之上、内々官符御引替相成候様之御都合ニハ相成間敷哉、是又官符ニ、五畿内七道諸国司ト有之候処、當時之御体裁ニテハ、右八字モ御除ニ相成候ハ、別テ御都合宜敷候へトモ、御旧格ヲ以御取調相成候御文義ニテ、重キ御事柄ニ候へハ、御所表之御模様モ難計、内々ナカラモ容易ニ難被 仰越候へトモ、最前内々被 仰聞候次第モ有之、格別之

叙慮ヲ以被 仰出候儀、此上後年之儀迄 御遺念不被為在候様被成度、無御伏藏被 仰聞候間、私心得ヲ以テ極密其筋へ申入候テハ如何有之哉、乍然今般之儀格別厚御取計ニ候処、右様之儀被 仰入、万々一梵鐘鑄換ニ差障候欤、両地 御間柄御不都合之儀有之候テハ不

容易儀ト、是又深ク御心配被成候間、厚勸弁之上精々
入念取計可申、五畿内七道諸国司之文字御除ニ相成、
御地迄

宣下ノ御振合ニ相成、於御地ハ御差支之筋無御座候段、
私含迄ニ被仰下承知仕候、早速関白殿へ逢申込去ル
二日参上、十七字・八字式ケ所共御心付ヲ以除文官符
引替之儀及内談候処、御触出シ御延引ニ付、兼テ不審
モ有之、再三之理談ニテ漸意得、十三日参

内夫々へ談判之上申上可被試トノ儀ニ付、同日罷歸、
十三日中何之沙汰モ無之心配罷在候処、一昨十四日以
諸大夫十七字關東御心障ニテハ

御所表御安心不被遊候間、可被削去、御体裁相当不致
トノ儀御尤ニ付、八字被改御引替之賦御内評相決候旨
被申越、十七字之方ハ無子細候ヘトモ、八字之方聊心
障有之、猶又存意申述置候処、昨日兩卿勅使御規式濟
ニテ、右内談有之一覽候処、十七字・八字式ケ所共除
文ニ相成、則以別紙申上候間御承知可被下候、

一 旧臘廿三日

宣下相濟候儀ニ付、早速御触可被成之処、右御文言之
儀御評議中右

宣下濟、追々世上へ伝播イタシ候由ニ御キ、被成、無
御余儀別紙之通御触被成、且銅・鉄・錫・鉛等無用之
品ニ費候テハ不相濟儀ニ付、是又御触被成候間、右等
之趣程能ク其筋へ相達可申旨被 仰下、是又承知仕、
則相達申候、以上、

三月十六日

脇坂淡路守

右一通ハ淡路守直筆

阿部伊勢守様

^{三四九の四}
〔別紙三〕

海岸防禦之為、諸国寺院之梵鐘ヲ以可鑄換大砲・小銃
宣下相濟、官符伝奏衆被致持参候間、旧臘差進候、然
ル処右官符御文言之内

御心障之儀有之候付、今般別紙掛紙之通御取直シ、御
引替相成様被成度候間、拙者迄可被及内談旨、関白殿
被命候段兩卿被申聞候、則被致持参候別紙書付一通、
入御披見候、如何可及挨拶候哉相伺申候、以上、

三月十六日

脇坂淡路守

阿部伊勢守様

右一通ハ代筆也、別紙書付一通ト有之候、旧臘

宣下ノ官符末文、及辺海無事之時云々之十七字へ掛紙、尚
又五畿内七道諸国司之八字モ同断掛紙イタシ候ノミニテ、

三四九の五
〔別紙四〕

三月七日ノ飛脚ニ遣之、直筆ニテ申遣之、
脇坂淡路守へ申遣候趣

梵鐘鑄換

宣下ノ官符御文言之儀ニ付内々申進候趣、関白殿へ被
及内談、右内談之次第等巨細被申越候趣、逐一致承知
候、則内々入 御聴候処、官符御文言之内十七字・八
字御除文ニ相成御引替之儀、被申聞候手續ニ相成候段、
御趣意相届、 御安心被遊候事ニ候間、官符之儀重キ
御事柄ニ候へハ、各ニモ深ク心配イタシ、御自分ニハ
別テ心配被致、格別入精被取計候故、万端御都合モ宜
ク相整重畳之事ニ候、一体梵鐘一条ハ格別之取計托リ
テ、関白殿ニハ最初ヨリ厚ク配慮被在之、尚又今般官
符御引替之儀首尾好相整、当地ニヨヒテ万端御都合モ
宜、後年之御懸念モ不被為在、 御安心被遊候事ニ候
間、右等之趣関白殿へ面謁ノ砌リ、猶又宜ク被申進候
様ニモ存候、以上、

脇坂淡路守様

三四九の六
〔別紙五〕

三月廿七日之次飛脚遣之、奥御右筆執筆、
海岸防禦ノタメ、諸国寺院之梵鐘ヲ以、可鑄換大砲・

小銃

宣下相濟、官符伝奏衆被致持参候間、旧臘被差越之、
然ル処右官符御文言之内御心障之義有之候ニ付、今般
別紙之通御取直シ、御引替相成候様被成度候間、御自
分マテ可被及内談旨、関白殿被命候段、両卿被申聞候、
則被致持参候別紙書付一通被越之到来、御申越趣致承
知候、別紙掛紙之通御取直シ御引替相成候様、可被及
挨拶候、以上、

三月廿七日

連名

脇坂淡路守様

御親書

梵鐘ニ付、脇坂へ懸合等イタシ候ハ老中、如左、

阿部伊勢守
牧野備前守
松平和泉守

松平伊賀守

久世大和守

内藤紀伊守

三五〇 擬論天下緇徒

頃者 明詔諭天下使鎖毀梵鐘換造煩銃、仄聞緇徒有竊議之者、是寡聞固陋不曉

皇上深憂佛法漸滅之遠慮也、癸丑以還墨俄英佛夷迭來我邦、陽乞互市陰誘邪教、姦哀漸見、彼以邪教誑惑愚氓、既奪印度暹邏榜葛刺瑪刺加其他西洋諸國、以至豪斯答利、不為其所者方今唯有支那朝鮮安南及我邦也、已然以世界百分居一之地維持正教岌々乎危矣、夫護持王法所以護持佛法設使釈氏有知毀銅像以為捍虜煩科亦將不之辭、況於区々梵鐘乎、且夫耶蘇之為所尚在利一字、嗜殺好鬪以慈悲為無益、討窮宗旨一々与釈氏相反、然以其投季世薄俗之所喜人易惑溺、釈氏下世之印度猶且受誣論為魔界干戈相尋無有寧歲、其害於世於人寔為釈氏深仇、緇徒不察 聖旨所在、党仏敵而議毀鐘昏惑錯謬就甚焉、我恰其情是以纒論至此、脫有出入邪者一從刑典、勿悔、

聞、伝通院僧某論毀鐘之事、大旨以為 官毀學校為

教人孝悌忠信也、而梵鐘者皆係忠臣孝子、損皆所鑄令

命毀之、則与獎學之意背馳、又聞芝山上野亦有議毀

鐘者、余不堪背裂而恰其魯愚、故作擬論一篇呈覽東

叡法王、

乙卯初夏望後二日

(別倉用九、儒者)
篷翁用九識

三五一 知恩院梵鐘鑄換停止歎願

感激於国恩之徒、謹獻書哀訴為国家陳微忠書

安政二年正月某日某等北面再拜誠恐誠惶頓首、言窃聞

近歲洋夷渡來屢窺辺海事情難測

宸襟憂念給、将令諸国寺院毀銷梵鐘以鑄造砲銃以備海

防之用、伏惟夷虜猖獗無礼凌蔑

皇国国家之患無甚于此者、勿論士庶在緇流僧侶猶且無

不為之搯腕切齒者、且夫僧侶雖世外、自古職在折禱妖

氣護衛国家、当修其法之所護尽其力之所及以答国家、

若梵鐘則雖寺院不可欠之物、苟為国家有所用則豈有所

顧惜乎、然寺院雖屬僧侶实非僧侶之有、闕寺一切法器

鐘磬皆檀越之所護持、非僧侶所得而姿也、故鑄一鐘造

一器、帛依之檀越貴賤甲乙、綵為天下安全報国恩之厚、

或為其祖先懷追孝之志、或為愛兒祈冥後之福、不顧其
身凍餓禿衣減食、或不難辛苦奔走於遠近、以請衆人之
力以助其鑄造、雖一器一鐘皆是千心万魂之所寄也、而
今將毀銷之、假令現住僧侶尽力極口以喻、造之賤陋之
性頑愚之民、不能知國家之深慮、何如唯固信從前僧侶
之所說、以鑄鐘為大功德、顧念精神之所注當痛恨非惜
不翅恨現住僧侶而已、亦將移恨于外矣、陋愚之難喻或
將言獨取我儕尽心力之物以造殺人之凶器、使我祖先之
志願廢滅人心有所不服、而強喻之則恐將致騷擾也、蓋
人心之所歸信有不可如何者、是以自古聖主明公因弘教
以懷柔人心之助矣、左当今最用心于此、營築諸國寺院
不惜財用所以、鼓舞人心而懷柔之無不至也、竊謂懷柔
人心者在今日最不可忽者、而毀鑄之事恐非懷柔人心之
助也、且夫寺院之設雖遍乎天下而宏壯富者寡而蕭散窮
乏者十之八九未必、寺々院々具梵鐘、雖尺數而取之、
於國家未足以為大益也、而名乃為毀天下之梵鐘、則其
名大而其所得甚少、所得少則不足以助國用、其大則足
以驚愕人也、況于賤陋頑愚者多而智識聰明者少、以賤
陋頑愚之民間驚愕人之事以不服之心懷痛恨悲惜之情、
而相唱誘則騷擾之所由而生、是某等所以為疑惑者也、

方今仁聖有上群賢森列於此等事豈有不知之理乎、唯其
憂國之急切將以疾禱深患使兆民長樂太平不遑顧此也、
然人心民情之所關不可為小事以遺棄也、伏願明德深仁
之政化明若日月恩如雨露、察其等之誠衷憫兆庶之哀歎
及明 詔末布辱賜高裁請換梵鐘以他物、且梵鐘有刻
列聖之尊号及國家安全字毀銷之亦似為不祥、不若寺院
之諸器不必用銅器者則改以陶器木器而換之、使子院聚
而致之於本寺、宥梵鐘之量以獻之則不至毀梵鐘而有梵
鐘之銅、不至驚愕人民而足助鑄砲之用矣、如此則不獨
諸國之僧侶感荷仁恩四海之兆民亦將抃舞驩呼也、凡在
天下之僧侶勿論何宗派無不浴于國恩者、孰亦不以護國
為任哉、然而我宗則於國家得恩遇最深、自本寺暨末寺
子院之僧侶日夜感激、皆以國家之憂喜為己之憂喜、無
不思所以報答者苟有於國家不便者不可不取言也、伏冀
垂憐監察給、瀆冒威尊惶懼無已、某等誠恐誠惶頓首再
拜謹言、

安政二年正月

評云

聞、此書知恩僧侶所上、極言毀鐘鑄砲之事大驚愕民
情、唯恐因以致騷擾或生激變、其言的切頗有見解、

至末尾曰、毀鐘名大益少、不若換之以他物、而本寺課之末寺末則不得不取之檀越、其所謂他物者非火鉢燭台等銅造諸器耶、欲応一鐘量則非聚數十有器不可足也、然是皆人家必用之具、為一長物毀損比數十百器、雖檀越豈欣然喜捨之哉、未知為其良策也、

三五三 梵鐘鑄換ノ事ヲ近衛忠潤、公ヨリ尾州侯へ御書翰

○この文書は、本文第一九〇号文書の安政二年二月七日付近衛忠照書翰(徳川慶恕宛)と同文重複により略す。

三五三 齊彬公尾州侯ニ送ル書牘

一筆拝啓仕候、暖和之節御座候得共、益々御機嫌能被遊御座、恐悦至極奉存候、然ハ不快中度々御尋被仰下、難有仕合奉存候、漸ク此節出勤仕、明日御礼可申上ト奉存候、右ニ付極御内々御礼申上度、魚魚呈上仕候、明日

御登城被為在候ハ、何卒拝顔相願度奉存候、先ハ去春ヨリノ御礼奉申上度、如此御座候、頓首、

二月廿七日

薩摩守

上

尚々、時氣御自愛被為在候様乍恐奉存候、此程近衛殿ヨリ被仰下候ニハ、御所御囲(御築地取弘ヲ云)之儀、又々六ヶ敷趣被仰下、如何之事ニ御座候哉、此儀モ明日申上度奉存候(廿八日御登營、殿中ニ於テ談セラレムノ意)、以上、

(鳥津家辨翰集(日本史籍協会叢書)にて補訂)

三五四 梵鐘毀壞ノ説

三月三日家定毀鐘ノ勅ヲ四方ニ伝フ、是ニ於テ延暦・寛永・増上諸寺ノ僧侶、書ヲ上リ哀訴シテ曰ク、

窃ニ聞ク、近歳洋夷屢近海ヲ窺ヒ、事情測リ難シ、天皇為メニ憂苦ス、乃チ諸寺院ニ令シ、梵鐘ヲ毀チ砲礮ヲ鑄造シ、以テ海防ニ備ヘシム、某等伏シテ惟ミルニ、夷虜猖獗 皇国ヲ凌蔑ス、国家ノ患此ヨリ甚シキハナシ、緇流ノ僧侶ト雖トモ、之レカ為メニ扼腕切齒セサル者ナシ、且僧侶ハ古ヨリ職妖氣ヲ禱攘スルニ在リ、正ニ其法ヲ修シ護スル所、其力ヲ尽スノ致ス所以ヲ国家ニ答フ、今夫レ梵鐘ノ如キハ、則寺院欠クヘカラサルノ什器ナリト雖モ、苟モ国家ノ為メニ用フル所アリトセハ、則チ願惜スル所ナシ、然レトモ寺院僧侶ニ属ス、而シテ其実ハ僧侶ノ有ニアラス、闔寺ノ法器・鐘磬皆

檀越ノ寄与スル所、檀越ノ護持スル所、僧侶ノ得テ而シテ檀ニスル所ニアラサルナリ、故ニ一鐘ヲ鑄一器ヲ造ル、或ハ父祖ノ為メニ追考ノ志ヲ懷キ、或ハ愛兒ノ為メニ冥後ノ福ヲ祈リ、其身ノ凍餓ヲ顧ミス衣ヲ売リ、食ヲ減シ、以テ其鑄造ヲ助ク、是ヲ以テ一器・一鐘皆千心万魂ノ寓スル所ナリ、而シテ今將ニ之ヲ毀壞セントス、僧侶力ヲ尽シ口ヲ極メテ之ヲ諭スト雖モ、賤陋頑愚ノ民国家ノ深慮ヲ知ル能ハス、而シテ頑民或ハ痛惋悲惜翹タニ、現住ノ僧侶ヲ恨ムノミナラス、亦將ニ恨ヲ他ニ移サントス、頑陋ノ諭シ難キ此ノ如シ、而シテ或ハ將ニ言ハントス、独我儕心力ヲ尽スノ物ヲ取リテ、以テ人ヲ殺スノ凶器ヲ造ルト、強テ之ヲ諭サハ、則チ恐クハ紛擾ヲ致サン、蓋シ民心ノ帰依スル所、信ニ動スヘカラサル者アリ、是ニ於テ乎、聖主明公亦仏教ヲ以テ人心懷柔ノ助ト為ス、謂ユル人心ヲ懷柔スルハ、今日ニ在リテ最モ忽ニスヘカラサルナリ、而シテ毀鐘ノ事、恐クハ人心ヲ懷柔スルノ助ニアラサルナリ、且夫レ寺院ノ設天下ニ遍シ、而シテ宏壯富有ノ者寡シ、而シテ蕭寂窮乏ノ者十ノ八九、未タ必スシモ寺々院々梵鐘ヲ具ヘス、數ヲ尽シテ而シテ之ヲ取ルト雖モ、未

タ以テ大益ト為スニ足ラサルナリ、而シテ天下ノ梵鐘ヲ毀ツト為ストキハ、則其名大ニシテ而シテ其得ル所甚タ少シ、得ル所少ナケレハ、則チ以テ国用ヲ助クルニ足ラサルナリ、其名大ケレハ則以テ人心ヲ驚スニ足ル、況ヤ賤陋頑愚ノ者多クシテ、而シテ智識聰明ノ者少キヲヤ、是某等ノ諭シ難シト為ス所以ノ者非欤、伏シテ惟ミルニ、天下ノ寺院ニ課シ、梵鐘ニ換フルニ金幣ヲ以テセハ、則国家ノ急務ヲ贍スヤ大ナリ、願クハ之ヲ諒察セヨ、

書入ル、朝議之ヲ然リトス、詔シテ毀鐘ノ事ヲ罷ム、

三五 梵鐘鑄換事件近衛忠熙公尾州侯へ書翰

前略、御帰国御暇相濟、御道中無御滞御着之旨、珍重不斜存候、扱ハ
禁中御造営モ、追々御賑々鋪事共ニ候、去日石河土佐守始上京ニテ、十八日木造始モ被行候、追々恐悅之事ニ候、南之方凸之事モ甚心配候テ、毎口申入、何共御配慮之段深恐候、先達尔来示給候通石河(全上)委細相含上京之趣ニテ、脇坂淡路守參 内、右両隅御広メノ処、表向被

仰立相成候様申出候趣、早々表向被

仰立ニ相成候、全ク成規之事ト深恐悦安心之事ニ候、

忠熙ハ密々心配候儀乍勿論之儀、閃白以下兩役衆モ一

統恐悦之事ニ候、右ニ付テハ、実ニ貴君彼是御配慮成

給、御都合能御成就之事、何共難申尽存候、極内々ハ

叙聞ニモ達置候儀故、誠ニ

叙惑不淺候事ニ候、是ハ極内々御洩シ申候、先々恐悦

安心之余リ、不取敢御札申入候、扱先日之梵鐘之一件、

実ハ甚不快之人々モ有之候事、且諸寺一統歎願モ有之、

実ニ不穩候事共ニ候、關東之様子ハ如何ニ相成居候事

哉、無拋

叙慮恐入候モノニ候、何モ荒々不取敢右申入度、乱書

可免給候、謹言、

三月十八日

忠熙

尾張殿

三五六 延曆寺大衆梵鐘鑄換停止歎願

奉願口上覽

今般遮テ上書歎願仕候詮ハ、万々難黙止次第有之故ニ

御座候、抑当山之儀ハ、忝モ 天子本命之道場、鎮護国

家之靈利ニテ長日臨時之御修法等、玉体安全宝祚永

久之御願門滿之為、丹祈ヲ凝シ候条、本山第一之重任

ニ御座候、因茲 若海内ニ異事有之候ハ、弥々嚴重

之法会相當ミ、信三宝供養相励、加持護念專一ニ可奉祈

御事ニ御座候、近々權ニ不穩事共出來時ニ御祈被 仰

出、一同精修仕居候得共、簡様之節ハ常式ノ外、尚又

転禍為福之タメ、別段ニ式日宮中仁王会或ハ造像起塔

鑄鐘等之百差被為 行候様、願上度儀ニ御座候、然ル

処此度却テ、從來万民之信施ヲ以漸鑄造イタシ本ノマ候諸

国数口ノ梵鐘ヲ、一時ニ破壊シテ兵器ニ鑄換候時ハ、施

主之意ニ背、諸人ノ悲歎不少、殊ニ梵鐘ハ仏場莊嚴具

之第一ナルモノニテ、是ヲ破損スル時ハ、自然仏威ヲ墜

シ、法光ヲ減シ候道理ニテ、三宝ノ冥譴モ難測、諸天

善神ノ擁護モ相薄ラキ、御大切ノ御祈ニモ差障ニモ相

成候テハ、誠以奉恐入候儀ニ御座候、尤モ本寺之梵鐘

名器・報時之分ハ御除ケニ相成候趣、其段ハ難有儀ニ

候ヘトモ、タトヘ辺境末門ノ梵鐘タリトモ、法器ハ則

三宝具ノ随一、三宝ハ即鎮國ノ至宝ニ候得ハ、一器片

物ノ壞滅ニ於テモ、出家沙門護法ノ身トシテ見聞ニ不

堪、実ニ難黙止事ニ御座候、今日ノ急務專ラ武器ニ有

之トイヘトモ、天変地変辺海不虞ノ防禦等神仏ノ加護
ニアラサレハ、人力ニ難及モノ有之候哉ニ奉存候、神
仏ノ加護ヲ祈候ニハ、弥以法器ヲ不減、法光ヲ新ニ耀シ
テ、四海靜謐ヲ可奉祈御事ト奉存候、即今海内法器ノ
損滅ヲ見テ端措默然仕居候ハ、法臣タルモノ、不忠不
義ト愚案仕候、仍聊為法ノ志ヲ続キ、謹テ皇國擁護ノ
旨ヲ守リ奉リ不顧恐侵礼度、遮テ上書敷願仕候儀ニ御
座候、右寸情之趣被為分聞召、出格之御憐愍ヲ以テ、
宜御執奏被成下候様奉願候、此段宜預御沙汰候、以上、

安政二年四月

延曆寺

大衆寺

座主宮

坊官中

三五七 日光門主梵鐘鑄換停止歎願

海岸防禦之為、此度諸國寺院之梵鐘、本寺之外古來之
名器及ヒ当節時之鐘ニ相用候分相除、其余可鑄換大砲・
小銃之旨、被 仰出候趣御承知被成候、右ハ海防ノ儀
專ラ御国力ヲ尽シ候ノ折柄、御必用之品ニ有之、諸寺
院ニ年来泰平ノ御恩沢ニ浴シ候御儀ニ付、何レモ厚ク

敬承可仕候ヘトモ、一体寺院梵鐘之儀ハ、夫々擬仏院
ノ救護候願主ハ申迄モ無之、六趣回生冥願ノ利益無量
ノ功德有之事ハ、經說論判明白ニ御座候、宝祚延長御
武運長久ヲ祈候儀、是又通規之願立ニ古來ヨリ勅願、
又ハ武家・庶民ニ至迄、天下泰平・國家安穩・祖先之
冥福繁營之為、誠信ヲ以テ製造致シ、家運・家昌ヲ相
輝シ候儀ニ有之、且三千威儀經ニ、鐘声十二時之撮要
ヲ挙有之候内、法用功德之事ハ、緇素道之必要、殊ニ諸
國在々等ニテハ人家掛離居候ニ付、出水・火事・賊難
其外非常不寄何事梵鐘ヲ合図ニ用候趣ニテ、敢テ報時
而已ノ用弁ニ無之処、此度御取上ニ相成候テハ、以後
臨時之手筭ヲ失ヒ、自然不虞之災厄可有之哉モ難計、
且本寺之外ヨリ儀ハ、大小高下之寺格ハ候得共、末寺
門徒有之分ハ何レモ本寺席ニ候ヘハ、總テ御除可相成、
左候ヘハ多分之數ニモ有之間敷、其上梵鐘差出方之儀
ハ追々御差図可有之由、右ハ 公儀ニテ御取寄ノ事ニ
候ヘハ、万一夫々寺院ヨリ差出候様ニテハ実ニ難渋ハ
申迄モ無之、運送之儀、河海之最寄ニテ通船等弁利ノ
場所ハ手段モ可有之哉ニ候ヘトモ、山野辺土ニテハ不
容易夫費相掛リ候、迎モ不行届之儀ニ可有之候ヘハ、

当御配下之分ハ御断被 仰入候外無之、右種々無余儀

次第モ有之候上、当年ハ東照宮天下御一統之支干ニ相

当リ、稀ナル御度事ノ御時節、御門主御方ニモ御專務

之御職ニ付、如先規御武運長久・万世不朽之御祈禱、

山門日光・東叡山ヲ始メ夫々被 仰付折柄ニ候処、天

下泰平・国家安穩・宝祚延長等、夫々発願之銘文有之

候梵鐘濱シ候儀、甚以御心障ニ思召候、右ハ

叙慮ヲ以被 仰達候趣諸向へ被 仰出候儀ニ付、何共

御斟酌之儀表立被 仰入兼候間、再三被為尽尊慮、厚

ク御思惟被成候得トモ、御祈禱筋御職務ニ付、相響何分

御黙止難被成、無抛御内々被 仰入候間、何卒御内評

之上梵鐘鑄換之儀被 仰出候迄ニテ、其尽何トナク御

延引ニ相成候様被成度思召ニ候、此段厚ク御含被成進、

如件之御旨趣相整候様、宜敷御取計之儀被為入頼候、

依之御使ヲ以被入候、

卯四月下旬ト云フ 日光御門主御使

信解院

巷説ニ曰フ、日光御門主ヨリ信解院ヲ以テ、黄金百枚閣老

阿部勢州へ賜ハリシヲ辞退セラレケトモ、強テ受納アルヘ

キ由仰ラレケレハ、勢州拝領アリト云フ、惜哉、奇代ノ美

事モ黄金百枚ニテ消失シケルハ、遺憾ノ限りナリケリ、

三五八 齊彬公春嶽公へ内報〔安政元年〕

○この文書は、本文第九七号文書の安政元年四月十一日付島津斉彬書翰（松平慶永宛）と同文により略す。

三五九 齊彬公春嶽公へ回答

皇居御造營及魯船之事

○この文書は、本文第一九二号文書の安政二年正月付島津斉彬書翰（松平慶永宛）と同文重複により略す。

三六〇 尾州侯近衛公へ返翰但御造營及梵鐘之事

前略、拙生今般道中無滞帰国仕候処、御祝詞被成下海

岳奉拝謝候、陳ハ

禁闕御造營モ追々御賑々舖相成、已ニ過日ハ石河土佐

守上京之砌、内意ヲ含候儀ト相見へ、淡路守参 内仕、

兼テノ義表向被 仰立候様御導キ申上候由、左候へハ

御十分之義ニハ不参候共、凸形之処ハ弥被行候義トモ

相見、於小生ハ大慶不斜御事ニ御座候、全ク大樹ノ忠

志ヨリ出候事ノ由ニテ、阿闍初モ是式之御事ハト存入

候処ヨリ、御成就ニ相成候儀ト被存申候、迎モ微力之

及処ニテハ無御座候へトモ、惣テ同勢一氣ニ

天機ヲ大切ニ奉存候儀ハ不外奉存候、付テハ御書中過
當之、御言葉ニ預リ実ニ汗顔之至、決テ左様之儀ニハ
無之候、右ハ御内々

叡聞ニモ被達候趣、扱々冥加至極難有仕合、銘肝之至ニ
御座候、乍併全クノ寸志微忠ニテ、御文意トハ不相當
之儀、畏縮身ヲ置クニ所ナク奉存候、猶御含置被下可
然御執成奉希候、且又先般相伺候梵鐘一条ハ、極密其
起源モ御洩シ被下再愕之儀ニテ、全ク無御扱

叡慮之由御尤至極、已ニ彼是ト不快之人々共有之、且
歎願之寺院モ有之候由、是又左モアルヘキ御事柄、今
更是非之弁別モ申上兼候得共、結局如何落着可仕者哉、
存外ニ当今天下之情態ニ取り、平易ニハ難被行意味モ
事實モ可有之哉ト、密ニ心痛仕居候、其余關東之様子
等ハ何等承知不仕候ヘトモ、只不穩トハ申事ニ御座候、
呉々モ前件早速御知セ被下、実ニ大慶安心仕候、猶又
奉復且乍序時下御容体ヲモ奉伺度、呈拙筆候、誠恐敬
白、

四月

〔表紙〕

齊彬公史料

安政二年

市來四郎編

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数二十六枚）」の記載あり〕

目錄

昨夢記事抄

齊彬公福井侯ニ与ル書翰

福井侯答書

三六一 昨夢記事抄

三六一の二

今般地震ニ付愚衷

一 近年天変地妖存臻ノ処、今般ハ既ニ都下ニ相迫、実

ニ駭愕必天戒ト奉存候、恐懼戰不啻奉存候、就テモ
〔餘脱カ〕

第一可恐ハ外寇ノ一条ニ御座候処、兼テ手後レニ相成候武備弥増撓屈可致ト深憂此事ニ御座候、依之此時節

公辺ニ於カセラレ候テモ

大城御修覆江戸城ヲ初、過日御触ノ通り御取締場所ノ造管

外、一切御取補理無之、両山東叡山三緑山

御廟所等御破損所モ、常体ノ御修覆ニ相成候テハ、

却テ御追孝ニモ相成間敷ヤト奉存候間、別段

御名代ヲ以被仰訳有之、当時ノ処武備御整ニ相成候迄ハ至テ御仮繕ニ被成置、此御儀スラ如此候得ハ、

其他治世ノ御格式ニ関リ候義ハ、御年限ヲ以万般都

テ御擲却、弥一途ニ御必戰ノ御所置ニ相成、扱諸侯

伯ヘモ蔽令相下リ、必戰ノ覚悟御奨励ニオヒテハ、

三夷ハ御条約モ相極候処、墨夷又々測量等ノ儀申出、

此末ノ儀モ如何成願望可有之哉、追々万国輻湊可致

形勢ト相成候事ニ候得ハ、其内ニハ強テ非分ノ義ヲ

申立、或ハ乱妨ニ及候モ難計、加之今般古今未曾有

ノ烈震ト申、殊更御不安心ノ儀ニ付、於諸侯モ

公辺御同様必戰ノ覚悟相極、家作等ノ儀御年限中ハ

大身ノ面々タリトモ、陣屋同様雨露ヲ凌候迄ニ取補

理、精々入費相省キ、武備一偏ニ相成候様、敵敷被仰出無之候半テハ、指当リ家作等ノ費用ニ疲弊イタシ、再武備御引立ノ期ハ有御座間敷奉存候事、

一別紙及建議候諸侯伯交替ノ儀、此節ノ折柄被仰出候ハ、最可然奉存候、就テハ過日御触達有之候地震並火災ニテ、格別難儀之面々ハ勝手次第御暇可被下置旨、被仰出有之候得共、願無之分モ夫々御撰之上、当年在府半分当節早速御暇被仰出、猶来年参府ノ面々モ、半分参觀御指免相成、来年迄在府ノ分ハ夫々持場等被仰付、別段ノ御手当被成下、国許ヨリ人数召呼敵重ニ相備候様被仰付候欵、又ハ当時何モ屋敷・長屋向等大破ノ事ニ候得ハ、在合ノ人数ニ御旗本勢被指加、兼テ調シ合セ必戦ノ覚悟仕置候様、被仰出有之候様仕度候事、

一別紙及建議候軍艦製造之儀ハ、急務中之大急務ニテ、日本全国士民ノ力ヲ不合候テハ、出来不仕儀ト奉存候、当節早速何トカ被仰出無之候テハ、諸侯伯モ窮迫ノ折柄、今般邸宅破壊等ノ入費ヲ国民ニ課シ候様ノ為体ニテハ、其上軍艦製造ノ儀、全国ハ難被仰出次第ニ相運ヒ可申哉ト奉存候、

一諸御住居ノ儀モ、此御時節柄ニ被准、御衣食住共御省略、御召使婦人ハ非常之節御足手纏ヒニ無之様、三分一計リニ被成、^(城也)男子ノ分モ御引移リノ御当座而已ニテ、御附人被相止、兼テ被仰出ノ通、代々妻女ノ通り御手輕ニ相成候様仕度奉存候事、

但諸家御住居有之分ハ、入費ヲ不厭尊崇ノ振合故、国計尽果、武備モ難相整振合ニ候処、此節柄老女ヲ始メ婦女子ハ、只地震ヲノミ恐怖戦兢罷在候事ニ候得ハ、如何様ノ被仰出モ行ハレ易キ勢ト奉存候、

一妻女国邑へ引移^{妻女国邑住居ノ論之ヲ初トシ文久二年ニ就ル}候儀、及建議候得共、尚又此比ニ至リ、世上ノ様子觀察仕候得ハ、外寇モ追々御当地へ自指油断難成折柄、今度ノ地震等ニテ、柔弱ノ輩ハ愈胆ヲ潰シ、是迄ノ江戸好モ俄ニ国好ニ可変勢ノ処、参觀間遠ニテ妻子共国邑ニ居住ニ相成候テハ、却テ快楽ニ耽リ、武備ハ愈相弛ミ、只参觀ヲ厭候様相成候様ノ儀ハ有之間敷哉、深考仕候得ハ、人情ノ趨向モ難計候間、此意味御熟考被下候様仕度奉存候、自然妻子ノ儀ハ此假ニ被指置候事ニ候ハ、衣食住ノ嚴制被相立、都テ奢侈ヲ被禁、

主人在国邑中ハ^{切カ}本同様ノ振合ニ被仰出候様仕度奉
存候事、

但衣類ノ儀ハ、過分ノ地合ハ勿論、第一ニハ縫物

并過当ノ染模様等、其織元・染元迄モ嚴重御指

留ニ相成候様仕度奉存候事、

一 昨年モ及建白候通り、都下ノ遊民夫々故郷へ帰農

ノ一条、此節大機會ト奉存候事、

右等ノ条々、御所置モ兎角因循苟且ノ人情兼テ行ハ

レカタキ儀モ、今般ノ大変未人心恟々タル折柄、却

テ行ハレ易キ勢ニ可有之、若荏苒時日相移リ候得ハ、

自然依旧ノ常態ニ復シ可申ハ必然ニ付、早速

御英断旧習御一新、^(禍カ)^(福也)転福為禍ノ御所置千万奉仰望候、

此余愚考ノ条々モ有之候得共、当節ノ急務ニ無之儀

ハ、追々可及陳告奉存候、

三六一の二

右被進候処、老公ノ御即報如左、

如貴論向寒之節、益御勇猛扑賀之至ニ候、先以此度

之地震前代未聞候処、

將軍家無御別条御同様奉恐悅候、如論御^(城脱カ)内ヲ初メ

諸藩在町迄モ潰、或ハ出火等ニテ死亡モ不少由、拙

老初身体ニハ無別条候得共、住居ヲ初メ家中居小屋
等潰、死亡モ不少、拙老初モ露宿罷在候仕合、当御

代ニ相成リテ天変地妖等度々ニテ、扱々恐入候御事

ニ候、扱々御建白可被成ト御考ノ処、此度ノ儀ニ

付テハ、尚又貴慮閣老迄御出シ可被成哉ニ付、極密^(論也)

一覽仕候様被仰越忝存候、一覽ノ処、於貴論ハ何レ

モ御尤ト存候、乍然当世態皆々御取用ヒニ相成候哉

否ヤハ、何トモ拙老考ニハ及兼候得共、御取用ヒノ

有無ハ兎モ角モ、貴考ノ処ハ阿闍迄御出シノ方ト存

候、只今登城前、急草略貴答申進候也、

十月十六日即時

二白、御端書ノ趣忝存候、貴家ニテモ時氣折角御厭

可被成候、^(伺考カ)以下ノ御品賜ハリ致拜謝候、不尽、

御別紙兩田^(藤田)云々ニ付テハ、是迄兩田ニテ扱候儀

ハ、微臣誰方へ御申聞可有之哉ノ儀、右ハ幸地震前、

戸田ノ実弟安島彌次ト申者、側用人申付置候得ハ、

是レへ御指出シニテ可然、若シ此者指合候ハ、厚田^(原)

兵介・桑原治兵衛ト申者、何モ奥右筆調役ニ申付候

是レハ地震、是レハ何レモ戸田^(田脱カ)・藤腹心ノ者ニ候得ハ、

後ノ事ニ候、^(原)内密ノ儀御申聞ニテ不苦候、早々、

右ニ付、又々翌十七日早朝、再被進御内書、左之通、

連日晴色(空カ)新寒相増候処、愈御安健奉欣賀候、昨日ハ

御登城早速御即報被成下、奉厚謝候、扱御紙表(題)ノ赴

ニテハ、貴邸御居住被成兼、未御露宿被為在候旨、

無々御不自由、且此比ノ新寒等別テ御困リ可被成ト

奉推察候、殊更御自重奉折候、然ハ愚衷書取ノ趣、

当御時態御採用之儀ハ、御見詰被成兼候得共、何分

阿闍へ指出可然、御教示被成下奉拝承候、然ル処昨

日ノ書取ハ、第一尊君ノ高慮ヲ相伺候積リニテ、阿

闍ノ密話等迄モ相認候事ニ御座候得ハ、右密話等ノ

条ハ、阿闍モ他泄ヲ堅ク相禁候事ニ候得ハ、此段御

舍御斟酌被成下候様仕度奉存候、尤阿闍へ指出候書

付ニハ、右等ノ辺相省キ候筈ニ御座候得共、是迄毎

々阿闍へ右様ノ筋申立候例モ有之候得共、一通リニ

テハ敢テ益モ無之、是又此度ノ儀ハ、近来天下ノ見

当ハ、元ヨリ御奉公ノ覚悟モ相立兼候次第故、一己

ニ取候儀ハ国許迄モ申越、同様為致覚悟候程ノ儀ニ

御座候得ハ、此等ノ筋、絶へテ御採用無之候テハ、

此末一身ノ方角モ相立不申儀ニ付、兎モ角モ尊君御

内慮相伺、再応御教示相願、御内意ニ於テハ、專御

主張モ被成下候事ニ候ハ、阿闍へモ申立度心底ニ

罷在候事ニ御座候間、此段御憐察被下、御繁劇中甚

々申上兼候得共、

廷議ハ指置、愚衷ノ可否賢考ノ処、今一応無御伏藏、

具ニ御垂諭奉仰希候、尚其上ニテ阿闍へモ指出度候

間、毎々乍御面倒貴答奉待希候、右奉得尊意度如此

御座候、頓首、

十月十七日

右被進候処、即晚方御返報来リ、左之通、

披閱如貴論新寒相増候処、無御恙欣賀、拙家ノ義ニ

付、縷々御尋之赴、御厚志ノ段、奉多謝候云々、御

申聞之赴謹承仕候、別紙ニテ御承知可被下候、此梨

子如何敷候得共、過日鶏卵御投患ノ御挨拶迄ニ進入

イタシ候、打続天変地妖、如何致シ候事ニ候哉、此

上ニ夷狄云々ノ義ト心配イタシ候、

異国のあたの防きのなきまゝに

国地の神かくやせむらん

大なるにかゝるうきめを見ることも

神なき月の印ならまし

十月十七日即時

御別紙

(別カ)
前貴答

極密御懇意ニ任セ御咄申候、追々御承知モ有之候通
 リ、拙老事、防禦御用向伺申候得共、大方ハ表発イ
 タシ候跡ニテノミ承リ云々相成候故、為心得為見候
 ト申義多ク、タトヘ愚慮ニ相違ノ事有之候トテモ、
 表発ニ相成候ヲ彼是ト申兼、又申ハ^(候カ)逆モ御取上ニ不
 相成候得ハ、毎度未功ニイタシ候御政事ノ方、伺候
 様ニトノ仰ハ蒙リ候得共、閣老ノ出来候事サヘ相談
 無之^(閣老カ水戸公ヲ忌避ノ情)、此度再勤ノ者杯ハ、^(兼々カ)益々ランペキ
 故ト申、阿モ^(阿部正弘)不好、下官モ不好候処、何レヨリ
 ノ建白ニテ相成候哉、表発後中納言咄云々初テ承リ
 申候、例閣老出来候節ハ、^(紀・尾)三家^(水三家)ヘ御相談有之
 候得共、此度指カ、リ候故、無御相談被仰付候ト申
 由、右ニテ拙老ハ初テ承知イタシ候、細々タル事ハ
 格別閣老杯ハ天下ノ御為御大切ノ職ニ候処、右サヘ
 御相談モ無之候上ハ、^(家)全クノ按山子^(在カ)ニ罷出候義故、

度々御免相願候得共、夫ハ相濟不申、又時々建白イ
 タシ候義モ御用ニ不相成、当惑イタシ候事ニ候、右
 之通故、老拙ニテ云々申進候トテ、夫ニテ御決シニ
 ハ相成兼候義、勿論ノ事ニ候得ハ、拙老被用候時モ
 有之候ハ、心付ノ義ハ可申進候得共、是迄ノ処ハ、
 全ク人見セ看板同様ノカ、シニ候得ハ、兎角思召付
 ノ処ハ御建白被成候方ト存候、如何致候世態哉、不
 見義ノ事ニテ候、乍御氣之毒前文ノ次第故、^(拙老脱カ)被用候
 節ハ、格別当今ノ処ニテハ、拙老ノ建白モ是迄度々
 申試候ヘ共、不被用上ハ御書中愚評申進候トテモ同
 断故、天下ノ御為可然ト御考被成候義ハ、閣老誰ヘ
 ナリトモ御認取御出シノ方ヨリ外無之候、只目今ノ
 存寄ヲ達候ト申迄ニ御座候、クレクレモ御他言ハ御
 無用、直ニ御火中可被下候、
 二白、右様ニハ認候得共、御指出ニ相成候ハ、^(テカ)閣
 老ヨリ万々一モ相談カ、リ候ハ、含ミ居候テ答可
 申候得共、小事ハ被行候共、肝要ト存候義ハ御役々
 ニヨリ故障、閣老モ申兼候半、被察候ナリ、
 前文ノ如キ貴書被下候テモ、一覽致候処モ無之、
 男女取廻リ底ノスミニテ一覽、人目ヲ忍ヒ、矢立

等ニテ認候仕合、御推覽可給候ナリ、

三六一の五

右御再報ノ趣、以之外成御次第ニテ、公ニモ甚々御失望思召候得共、老公ヘモ御談シアリシ末ナレハ、御文段少々御引直シアツテ、同十八日夕福山侯ヘ御相談旁被進タリ、右ニ添ラレタル御内書、如左、

一同十八日夕、勢州侯ヘ大奥廻リ被進候御内書、左ノ通りニ候処、アナタヨリ御返翰可被成旨申来レリ、

一 翰啓上、新寒兎角不可之候ニ候処、愈御佳安御勤務、欣賀之至リニ候、其後ハ彼是御不音罷過候、時

々御様子ハ承及候事ニ候、遠方日々御往還、且当節〔入カ〕一人御勤勞カト万々致推察候、然ハ兼テ愚考並今度

大變ニ付テノ鄙衷共、別紙二冊〔本〕入貴覽候、御熟考之上貴諭希申候、追々恐入候御時態、殆当惑至極御座

候、別紙之通一身之見詰モ立兼候ニ付、実ハ国許ヘ〔モカ〕ハ申越、篤ト打合、覚悟之上相認試候事ニ候間、無

御斟酌可否御教示希申候、何分此假ニテハ不相濟ト存詰候事ニ御座候、愚衷御憐察、只々モ御教示可被

下候、左モ無之候テハ、此節ノ覚悟曹々迷惑ノ外無〔佐倉藩主、堀田正篤〕之候、且又過日ハ佐倉再出被仰出、其後ノ様子如何

ニ候哉、窃カニ御按〔案〕申候、将又備中モ兼テ懇志之

事ニ有之、旁別紙之趣少々認替申達候半哉ニモ存候得ハ、此節ノ御模様モ不致承知、突然指出候テハ如

何ノ勢ニ可有之哉難計候ニ付、極密及御相談候、右ノ可否モ御教諭希申候、当節定テ種々御評議万緒ト

致推察候、只々モ鄙意実体不得止事仕合共亮察垂教高恕々々、右御見廻、且一条為可申陳、草々不宣、

十月十八日

尚々、此節柄不揃之氣候ト申、旁為天下保蓄專折申候、於謚事モ追々快方ノ由、此頃モ委曲承申候、

御内事欣然御座候、何角御介意千万多謝之至御座候、且毎々佳品御惠贈、是又不堪感謝候、當時假

御居住御手狭、殊之外御混雜之由、嘸々御困リ可被成、万々致推察候、已上、

三六一の六

副啓、過日主馬儀罷出候節、御住居一件ノ儀ニ付、

與一兵衛迄申上置候訳モ御座候、然ル処御住居ノ模様、追々取調ニ相成候処、極御大破ノ分御取縮、其

余御建直シニ相成候ハ、可也ニ御居住モ御出来可被成ニ付、左様相成候得ハ、往々ノ御落付ニモ相成、

御都合モ可宜ト則御取縮ニ相成、御取補理ノ分、絵
図等出来ニ付、近々之内彈正指上、御内慮モ相伺、
且右ニ付テハ御住居ニモ御大破ノ分御取払、御取補
理ニテ、御仮住居ニ相成候様、御沙汰被成下候様相
願度積リニ候、然ル処当時丸山御仮住ノ処モ、殊之
外御手狭ニテ、混雜ノ旨承及候ニ付、乍序右等ノ趣、
御内聞之上指上度、否為御聞可被下候、以上、

十月十八日

一右之外ニ別冊ニ被進、水老公へ被進候ト御同趣ニテ、
少々御文意替ノミ、故ニ不記之候事、
〔昨夢紀事(日本史籍協会叢書)にて校訂〕

三六二 齊彬公福井侯ニ与ル書翰〔昨夢紀事抄〕

一十月十五日、薩州侯ヨリ御書翰、左之通、

愈御安泰奉賀寿候、扱此間ハ非常之地震驚入申候、

併シ御怪我モ無之由奉恐寿候、辰之口余程之怪我人

モ有之候由、氣之青千万ト存候、扱又此後世上之光

景如何相成可申哉、不容易御時節ト奉存候、海防一

条モ如何相成候哉、御賢慮何度奉存候、

一当年中登 城ニ不及トノ事、併久々御機嫌モ伺ヒ不

申候間、愚考ニハ米月ヨリ月三度ツ、御機嫌伺ト

〔三一カ〕

シテ登城仕度旨奉願度内存ニ御座候、如何ニ思召候

哉、尊慮何度、御相談旁奉申上候、老中達モ出来兼

候テ、琉球之一条在留外國人処分ニモ差支之訳モ有之候間、

登城ニテ御機嫌相伺節ニ辰へモ逢候間、内存モ有之

候間、旁御様子相伺申候、先々御様体相伺、旁要用

申上度如此ニ御座候、頓首、

十月十五日

猶々、御自愛專一奉存候、芝屋敷住居大破ニ付、

無抛澁谷屋シキへ引移申候、芝へ建直シノ考ニ御

座候、手輕ニ普請仕直〔置カ〕、万事宜敷機故、格別改

格可致内存ニ御座候、其内拝眉之上万々御談申上

度奉存候、已上、
〔昨夢紀事(日本史籍協会叢書)にて校訂〕

三六三 福井侯答書〔昨夢紀事抄〕

一十月十九日、御同所ヨリ御答書、左之通、

一昨夕ハ尊書忝致拜見候、愈御清福奉賀寿候、被仰

下候条々、委細拝承仕候、

御機嫌伺登 城之儀ハ、兩三日中辰へ内々申試候上、

差出候様可仕候、且風説書並約条書云々拜見被仰付、

千万辱奉存候、昨日返上可仕処、一昨夕遅ク相成、

昨日拜見イタシ、延引ニ相成恐入申候、則返上仕候間、御落手可被下候、此度地震ニ付御賢慮モ御座候ハ、被仰下候様仕度、何分不容易時節心配罷在候、着服沙汰之儀モ被 仰出候、右モ御屋敷ニテ如何御処置被成候哉、伺度奉存候、御道中御供等ノ事モ伺度奉存候、今少地震靜ニ相成候ハ、罷出拜眉相願度奉存候、当節ハ家来共差置候仮小屋等ノ下知仕、日々大取込罷在申候、扱又何寄ノ品被下、千万辱奉存候、先ハ貴答旁可申上如斯ニ御座候、頓首、

神無月十九日

猶々、御自愛專一奉存候、梵鐘ノ義梵鐘取調ハ既ニ着令後卷ニ記ス御領分中追々御取調ニ相成候哉、小子方モ早々取調申付候事ニ御座候、頓首、

三六三の二

〔條須賀音格〕

十一月二十四日阿州徳島様ヨリ御返書、左之通但時変ニ付御奨励之御書ヲ

被進
タリ

昨日ハ華墨被投辱雪手謹読仕候、已来愈御清福御起居ノ段奉怡悦候、然ハ過日モ御同異御文通仕候通、今般之天災不容易義ニテ、同然痛心仕候、右ハ數々被仰下候貴慮ノ云々、夫々貴答ニハ不及候得共、具

ニ謹承仕候、如貴意近年ハ諸蛮夷屢來舶、先般被仰出承知仕候通、御条約モ相濟、此末度々渡帆モ可有之ハ必定、乍恐

公辺ニテモ愈以御武備御敵整ハ、乍恐申上候迄ニモ無之、愈御憤発被為在度、付テハ此度段々簡易ノ命令相下リ、右モ全ク武備御敵整ニトノ御趣意、弥以難有事ニ奉存候、諸侯伯ニテモ右ノ御趣意篤ト相心得、今般ノ災害破損等可也ニ補理ノ上ハ、其余先指置、人命ノ安危ニ拘リ候処迄手当仕置、其他無益ノ事ハ、尤相省キ候事、当今ノ肝要ト奉存候、此天災恐怖ハ自素ノ事ニ候得ハ、天災ハ天災ト相慎、破損処等ニ密居候時會ニハ毛頭無之、如仰陳中ノ心得ニ候得ハ、雨風寒氣ニモ指テ迷惑可仕筋ニモ無之、如貴論偷安ノ人情致兼、此節聊地震間遠ニ候得ハ、姑息ノ心ヲ生シ、怠惰相萌シ候事ニテ、此一儀可歛可悲事ニ御座候、貴君ノ御卓論尤時世ニ相当リ、誠ニ御尤ノ御儀、甚御同意奉存候、且又此度ノ災害ハ、皇国復古ノ基ヲ開復古論當時稱諸侯ノ口筆ニ頭ル候ニハ、誠ニ天ノ時ヲ得候事ニテ、此機會ヲ外シ候テハ、又イツノ世ニ改正ノ時期無之、奉始

公辺、諸家共簡易ノ政事ニ復候義、今年ノ中ニ可有
 之ト奉存候、何故ニ簡易ヲ相用候ト質問仕候得ハ、
 是全ク余ノ義ニ無之、自素御承知申上候迄モ無之、
 儉素武備相整候ヨリ外無之、文武並行ハレルノ処成
不尤否申テハ、全盛ノ世ニハ成不申、何分ニモ文武両主有
全尤之度義ニ奉存候、今般ノ天災ニ苦心恐縮而已ニテハ、
 此末異舶渡来万一異変ノ節、汚銘ヲ取候迄ニ無之、
 營ノ御高恩忘却致候ニ相至、恐縮ノ限ハ無之候、且御
 国辱ニモ相成候事ニテ、儉素第一ノ事ニテ候得ハ、
共尤先ハ武備尤專一ノ義ニテ御同然、此時会ニヨソ憤発
 致シ、武備精勵可仕ト、水魚ノ御交ニ任セ、此義御
 約諾仕候、且万一ノ節ハ、心力ノ及候丈ケハ御奉公
 仕度存意ニテ、貴君ニモ自素御同心ノ義ト奉存候、
 軛禍為福所置、当今ニ有之ト奉存候、定テ貴君ニモ
 左様御座候半、此災害可慎ハ慎、又是依リ憤発可致
 時至リ候事ニ御座候、誠ニ恐入候事ニ御座候得共、
敏尤不容易御時世、重々恐入、可歎可悲又可勤可勵時ト
 奉存候、誠ニ愚陋ノ浅智、何ノ遠謀モ無之、乍憚貴
 君英明之御儀ニ候得ハ、定テ御良策モ可有御座候、
 尚又同度奉存候、何分ニモ屈愁然尤可仕時ニテハ無之、

憤発ニハ至極ノ時ト、呉々存罷在候、且又来月ニモ
ハ、腕尤至候參殿可仕旨承知仕候、先段之敏尤

命令ニ付篤論御篤論尤モ可仕、又短慮モ可申述ト存候、先ハ

昨貴答此尤当今ノ御動靜モ可伺、且聊愚意モ申上度、早

々内密如何御座候、頓首再拜、

初冬念四日

二伸、時下当今別テ為 皇国御自重專一奉存候、

取紛乱書御海忍可被下候、小子無事乍憚御休意可

被下候、不備、

三白、簡易之

命令ハ、武備ヲ勵メトノ御趣意ニテ、尤難有厚心
行尤得不申候テハ不相濟不申ト奉存候、已上、

三六三の三

一十月二十三日、藤田與一兵衛ヨリ彈正迄内書通、左之通、

以手紙啓上仕候、寒氣相催候得共、先以益御勇健被

成御奉職、恐悦之御儀奉存候、一昨日ハ御苦勞奉存

候、其節ハ大失敬御仁恕可被成下候、擬其節奉蒙仰

候御儀、一々申上候処、附札之通伺候付、不文ニ其

尽ヲ認取候事ニ御座候、御賢察御覽可被下候、御不

審之儀可有御座候間、無御伏藏蒙仰度奉願上候、則

御絵図面並四通奉返^(壁カ)壁候、今日ハ伊勢守様至テ御微邪ニテ、御登城不被成候得共、御按事^(案)被進候テハ、恐入思召候間、尊所様迄御含ニ申上候事ニ御座候、右奉申上度如此御座候、以上、

十月二十三日

三六三の四

十月二十一日夕、秋田彈正ヲ福山侯丸山ノ邸へ被指出、過日被進タル御書取ノ御返答、且此筋柄ニ付、御住屋^(居)御修覆並御在國中江戸詰人減少、或ハ御献上物御省略ノ義、彈正伺ヒ、書取ヲ以テ與一兵衛迄及内談タリシニ、此日與一兵衛ヨリ彈正へノ書面且覚書伺取附紙等、爰ニ記スルカ如シ、

一十月二十一日夕、彈正義丸山へ被指出覚書類等^(持參カ)左之通、與一兵衛迄熟談致置候処、伺取候趣ニテ前書面之通申来、右附札出来候書附、左之通、外ニ御住居御取縮別紙出来之絵図面一枚、是又持參之処、御一覽相濟候旨ニ付返却之事、

覚

一当節之折柄、今般之地震等弥

公辺之御儀深御按事ニテ、御模様次第尚又御熟考

モ被成度ニ付、此間進候御書取之御返事、殊之外御待兼被成、御繁用中甚被仰上兼候得共、条々ハ御同意御不同意ノ処、荒方成共御垂諭被成御頼候、右ニ付テハ此節定テ御繁劇、御書御認之御間モ被為在間敷ト被成御察候間、不苦御儀ニ御座候ハ、彈正迄被仰下候儀ハ相成間敷哉、此段相伺候様被仰付候事、

御書取ニ付テハ、イツレ御直書ヲ以テ、近日被仰進候御積之由、

一此後御在府中ニハ、成丈ケ御人数モ御増被成思召候ニ付、此表御留守中之儀ハ、兼テ御人少ニハ候得共、此上御屋敷向御ノ切御同様ニテ、御人数等モ御減格外御省略御取行被成度、就テハ別紙之御廉々、無御抛御備モ相立兼候、右ハ敢テ

公辺へ御拘リモ無御座哉ニ付、別紙御届等^(段カ)ニモ不及、御手前限り御取行ニ相成、御指支モ有御間敷ト^(慮脱カ)ハ思召候得共、猶又一応御相談被仰上事、^(付柄)此儀御見込ノ通ニテ宜敷ト思召候、

一御住居之儀不容易御大破ニテ、是非御立替無之候^(建)テハ、御帛輿難被成御次第ニ候処、此御時節

公辺へ御拝借等ハ如何ニモ御願被成兼、甚御当惑
 思召、種々御心配被成、必至之御手續御才覚ヲ以
 テ、御大破之分御取払、精々御取縮之上、当分御
 仮御住居御指支無之程ニハ被成進度、併御元形ニ
 被仰出候テハ、御手関ニ難適儀ニ御座候、然ル処
 御附方ヨリ是迄余リ御手広ニテ、非常ノ御掛念有
 之候間、今度ハ御取縮ニ御建替ニ相成可然旨、無
 急度沙汰モ有之、大体御同意ノ赴ニハ被相考候得
 共、此節從公辺御住居向ノ御時節柄之儀ニ付、御
 大破之分御取縮精々御勘弁ニテ、御仮住居御指支
 無之程ニ御取補理、御婦輿ニ相成候様御沙汰被成
 下候ハ、万端格別御取縮モ相届、御入用筋モ相
 減可申ト思召モ、左モ無之テハ、御取掛リノ上、
 夫々御附方ヨリ御物好ノ廉々被
 仰出有之、意外ノ御入用増ニ可相成ハ必定ニ付、
 何卒右等之辺御汲察被成進、何トカ御沙汰被成下
 候様奉願候、此程主馬罷出候節、御内々申上置候
 儀モ御座候得共、右様ノ御運ニ被成進候方、御落
 付ニ相成、行々ノ御都合モ可宜ニ思召候付、尚又
 御内々被仰出候間、則別紙絵図面御取縮等ノ見込

ケ所奉入御内覧候、何分御住居ノ不日御沙汰ノ儀
 ハ、一統奉願上候事、

一先達テ表伺御内慮御何置被成候来年御引揚御暇之
 儀、御様子如何可有御座哉、

此儀ハ伺置ノ通可相成ト思召候得共、未タ御調
 中駈トハ難被仰進候、

一御献上物並御役方へ御配り物ノ義、別紙左之通表
 向御内慮御伺、御指出被成度御調ニ御座候、右ハ

此節御背可被成候御儀モ有御座間敷哉、御内々御
 相談被仰上事、

此儀表伺御内慮御用番へ御伺、御差出被成候テ
 可然思召候、

右之趣此節別テ御繁多ニ可被為入、右御中へ被仰進
 候儀、甚御氣之毒思召候得共、一応御内談之上御決

着被成度ニ付、私罷出候テ、御内々相伺候様被仰付
 候御事ニ御座候間、無覆蔵可否御教示被成進候様、

御頼思召候事、
 秋田 彈正

覚

一 是迄御在國中、此表ニテ非常之御用並御奉書火消

等被仰出候御例無之、旁以來ハ御心当御人数被相

止度候、右ハ別段御届ニハ及間敷哉ニ思召候事、

〔付栞〕 此儀御届ニハ及間敷思召候、

一 御上屋敷東西通用御門、御在國中ハ御ノ切ニ被成候事、

〔付栞〕 此儀思召無御座候、

一 御老中様御始御役方へ、年始初定式並御吉凶之節、

御使者被指出候御仕来ニ候得共、以來御在國中ハ

御止被成度、尤

公辺へ御拘リ被成候御廉々ハ、是迄之通御指出被

成候事、

但此儀ハ御留守居ヨリ御表へ夫々為御伺被成

候御積ニ御座候事、

〔付栞〕 此儀御用番へ御留守居ヲ以テ、御伺御座候テ可

然思候、
〔召願カ〕

一 御住居御定用天保十四卯年被仰出、三千七百兩ノ

御規定ニ相成候得共、年御入増ニテ四千五百兩ヨ

リ五千九百兩ニモ至リ候儀有之、

公辺へハ相願レ不申、御附方ヨリ内談ニテ指出ノ

振合多ク有之候、

〔付栞〕 此儀公辺へハ願レ不申、伺トカ御含可被成候、
〔伺カ〕

別書付ニテ與一兵衛書取

御絵図面高キ御建物等御取潰シニ相成、御

空地モ御程々御出来、地震・火災等ノ御為

宜敷、少シハ御安心ノ方ト御同意思召候、

近年異国船渡来ニ付テハ、被 仰出モ有之候通、万

端無益ノ失費・旧習古格タリ共相省、非常之手当厚

心掛、軍備嚴重ニ致置不申候半テハ、不相濟御時体

ニ付、不顧他無類ノ省略取行、精々致心配候得共、

從來不如意之勝手向ニテ、兎角存意ニ整兼致心痛候、

就テハ分限勤向之廉ニテ申上兼候儀奉恐入候得共、

別紙之通省略之儀相願申度奉存候、右ハ相願候テモ

不苦義可有御座哉、此段御内慮相伺申候、以上、
〔付栞〕

此御伺書御用番へ御内意御伺可被成候、御不向キ
〔兼リカ〕

ニ不相成様可被成候、乍去夫々調進候モ有之、御

規定モ有之事故、惣テ御思召通りニ相成候事モ參

間敷思召候、

別紙

一 塩鮎子籠

右ハ享保六五年、中務大輔宗昌当家相統仕候以来
献上仕来候処、年柄ニヨリ出来兼、

一 国許仕立駒

右ハ享保十三申年、参勤年四五度ニ一度ツ、献上
候様被 仰出、以来献上仕来候処、追年駒^{〔近カ〕}払底ニ
テ献上可仕程ノ駒出来兼、

右両品之儀、往古ヨリノ献上ニモ無御座、其上右
中上候通、年柄ニヨリ出来兼候儀モ御座候間、以
後御用捨被成下候儀ハ相成申間敷哉、此段相同申
候、

別紙

一 御老中方へ金馬
一代相贈り候廉々

都テ銀馬代拾枚宛相贈候様

一 若年寄中

同断

一 御側衆

同断

一 荒菜^{〔若カ〕}

御老中方飼料千疋ツツ相贈候
処、五百疋ツツ相贈り候様

一 端手^{〔午カ〕}
一 重陽^{〔午カ〕}
一 歳暮

御老中方・若年寄へ一種千疋宛、御側衆
へ一種五百疋ツツ相贈候処、御老中方・
若年寄中へ一種五百疋ツツ相贈候様、御
側衆へ一種五百疋ツツ相贈候様
〔三カ〕

一 国産献上之節

〔始脱カ〕
御老中方御残り相贈候
廉々御周旋被成候様
〔用捨カ〕

右之通、御儉約御年限中致省略候様相同申候、

別紙

一 端午^{〔重陽〕}
歳暮

時服献上仕候処、為御祝
儀一種ツツ献上仕候様

一 寒中

国許之生繕二度献上仕候処、初度献上計
ニテ一度目献上ノ分御用捨被下候様
〔分カ〕
〔銀カ〕
〔二カ〕

一金馬代献上之儀^{〔分カ〕}
駒馬代拾枚ツ、献上候様

一 不時御檜重献上之儀^{〔分カ〕}
御代料ニテ式千疋献上候様

一 帰国御礼

国許ヨリ家老格之者ヲ以テ御礼申上候処
当地詰合同様ノ者ヲ以テ御礼申上候様
〔格カ〕

一 宿次御奉書ヲ以
テ檜梓領ノ御礼

同断

一 宿次御奉書ヲ以テ呈^{〔書カ〕}国許ヨリ番頭格以上ノ者ヲ以テ御礼申上候
中御尋被成下候御礼処、当地詰合同様ノ者ヲ以テ御礼申上候様
〔格カ〕

一 不依何事從^{〔格カ〕}国
許御礼申上候廉
番頭格以上ノ者ヲ以テ申上候様、
当地詰合同様ノ者ヲ以テ申上候様
〔格カ〕

一 不依何事使^{〔格カ〕}札
ヲ以申上候廉
飛札ヲ以テ申上候様

右之通、御儉約御年限中御用捨被成下候様相同申候、
〔昨夢紀事(日本史籍協会選書)にて校訂〕

〔表紙〕

齊彬公史料

安政二年

市來四郎編

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数二十枚）」の記載あり〕

目録

英・魯・米等条約交換ノ達

諸大名節儉令

齊彬公多紀樂眞院へ与フ御書

全上

大地震藩邸破壊ノ形況

或人ノ手帖

〔脱之〕
〔全上〕

寺島宗則自記履歷抄

三六四 英・魯・米等条約交換ノ達

阿部伊勢守様ニテ御渡相成候書付
〔八月十三日、阿部正弘直達〕

魯西亜・英吉利・アメリカ等へ、別冊ノ通条約御取替セ相成候へ共、追々諸夷入港ノ上へ、以後ノ御実備弥以肝要ノ儀ニ付、銘々右ノ心得ヲ以、尚又平常覚悟モ可有之事ニ候、因テ為心得条約書写相達候事、

右条々安政二年卯十月
〔八月十三日の老中達書なり〕

三六五 諸大名節儉令

大目付へ

近年外夷度々渡来ニ付テハ、守衛ノ為メ御府内人別多々相成、ヲノツカラ失費モ相増候段ハ無拠筋ニ候、然如今般ノ天災ニ付テハ、莫大ノ入費モ相増、窮迫ニ陥リ、尚又可為難儀、殊ニ此度不慮ノ死亡、又ハ怪我人等モ不少哉ニ相聞、何共敷敷次第ニ候、必竟夫等モ中古ニ見合候へハ、追々御府内人数多々相成候事ニ付、諸家屋敷ニテモ家作等建詰候様ニ相成候故、猶更非常ノ間害逢慮候者モ夥敷儀ニ可有之、一体近年諸藩困窮ノ上、右様ノ儀相加里、殊ニ外夷差湊候折柄、当節ノ

処ニテハ、御府内老幼ノ男女子人別減少有之度ニ付、
万石以上隠居並厄介ノ男女子、在所勝手ニモ可被仰出
ノ処、先ツ此ノ節ハ不被及

御沙汰ニ付、向後家作ハ勿論、年中ノ暮方等マテモ、
銘々家仕米ニ不拘、万端手輕ニ取扱、聊外見ヲ不厭、
質素省略ヲ相用可被申候、尤右ノ趣等閑ニ相心得候向
有之候ハ、急度

御沙汰可被及候事、

但本文通り相達シ候ニ付テハ、隠居并ニ厄介ノ男女
子等、在所へ遣シ置度向ハ、夫々相伺候様可被致

候事、

一一君以上家来ノ儀、前文人別減少ノ御趣意ヲ以、
追々定府相減候様可被致候、尤領分ノ遠近共、家
々ノ都合モ可有之事故、銘々勝手次第ノ事ニハ候
へ共、可成丈御趣意相立候様可被心得候事、

右之通寄々可被達候、

卯十一月

(晦日)

三六六 齊彬公多喜樂眞院へ与フ御書〔嘉永六年〕

○この文書は、「鹿児島県史料 斉彬公史料」第一巻の第四八九号
文書の嘉永六年八月二十九日付島津斉彬書翰と同文により略す。

三六七 全上〔嘉永六年〕

三六七の一

○この文書は、「鹿児島県史料 斉彬公史料」第一巻の第四八九号
文書中の嘉永六年十月二十九日附島津斉彬書翰と同文により略す。

三六七の二

○この文書は、「鹿児島県史料 斉彬公史料」第一巻の第四八九号
文書中の嘉永六年十一月朔日附島津斉彬書翰と同文により略す。

三六八 大地震藩邸破壊ノ形況

一土蔵 七軒

一家 一軒

右二行、堀畑御屋敷破損、

一土蔵 四軒

一長屋 二流

一中長屋 二流

右三行、西向御屋敷破損、

一土蔵 四軒

一長屋 一流

右二行、大久保御取添御屋敷破損、

一土蔵 三軒

一御物見 一流

- 一長屋 二流
- 一練堀、都テ破損、
(堀九)
- 右四行、三田御屋敷御取添地破損、
- 一土蔵 廿一軒
- 一長屋 一流
- 一御物見 一流
- 一御表御門内借屋 一流
- 一御表御休息所
- 御書院其外御取附之間・二之間・三之間御式台并御
玄関・御成御玄喚・御廊下筋御座廻リ都テ破損、
- 一大奥御玄喚倒損、
- 一御前様并御方々様御座廻リ其外大奥都テ破損、
- 一練堀廻リ都テ破損、
- 右九行、上御屋敷破損、
- 一御家老御長屋 一軒
- 一西御長屋
- 右二行焼失、
- 一物見 一流
- 一東御長屋并通融門
- 一稻荷社
- 一御島方并付役長屋
- 一御式台御膳所長屋 二流
- 一表御座廻リ
- 一御納戸土蔵
- 右六行倒家、
- 一御長屋 二流
- 一御殿廻リ都テ破損
- 右二行破損、
- 右十行、櫻田御屋敷、
- 一御長屋 十軒
- 右一行、南向御屋敷破損、
- 一中御門并張番所其外同所堀廻リ、同所石垣
- 一御門 一棟引損
- 一御米蔵 一流
- 一大奥板蔵 一流
- 一諸人通融門并中番所
- 一板蔵 一流
- 一亀ノ甲御門 一棟
- 右都テ相倒、
- 一表通御長屋 一流

一 御屋敷中長屋諸役所其外石垣等破損

一 土蔵 十五軒

右全、

一 稻荷社 二棟

右同、

右十一行、高輪御屋敷、

一 土蔵 七軒

一 御物見 一流

一 長屋 一流

右三行、田町御屋敷破損、

三六九 或人ノ手帖

〔十月二日〕
一昨二日、地震ニ相成リ、中々強ク震候テ、夫成脇差計リ取り、二階ヨリ馳下リ候処、土壁等落、土地へ皆々相円居候処、漸クイタシ、震ヒ止ミ、直ニ盤木打ナラシ候故、火事装束ニテ御殿へ罷出候、御屋敷ヨリ北ニ当リ、一天白日ノ如ク燃上リ、其内度々地震イタシ、火ノ見へ上リ見候へハ、櫻田屋敷モ火相掛リ候由注進有之、勿論当御屋敷ヨリ七八町有芝井町ト申所日影町マテ、一円焼失驚天ノ有様、

御殿所々大破ニ相成リ、去リナカラ風強無之故致安堵居候、

上様方モ御庭へ御布屋構ニテ被為入、騒敷有様、追々櫻田へ御加勢人数被差出、番頭肝付左門殿・御家老石見島津殿増上寺へ出張、一備々々繰出シ有之、終夜騒ケ敷、一睡モ不致、翌日モ時々少々ツ、震ヒ候、八ツ後両三人列立、見物ニ出候処、中々目モ不被当有様、近辺ノ宇田川町ト申処杯ハ、直様ニ相建置候家ハ一軒モ無之、一統往来ノ途中屏風構へニテ円居哀儀形行、大名小路・御大名御屋敷・御舞台外迄皆々崩レ、或ハ焼失、御門崩レ、松平甲斐守様御屋敷杯ハ、何モ無之広野ト相成リ、三百余人ノ焼失ト申事、健馬十八疋有之候処五疋生残有之由、櫻田屋敷モ十一人計焼死有之、小野半左衛門ト申人、三才ノ嫡子ヲ抱キ、妻ハ当才ノ子ヲ抱キ逃レ去ル処、半左衛門ハ戸口出様ニ家崩レ被押、早々子ヲ引オコシノカレ出候処、妻ハ一間計リ後レ居リ、夫成ニ被押、後ヨリ火ヲコリ、母子共焼死ノ由、其外御門番二木ト申人へ、夜具カフリ臥居候形ニ死居候由物語、梅田〔殿カ〕ハ東通融御門初長屋崩レ、西御門通御長屋ノ分焼失、御舞台・御殿迄都テ破崩レ申候、

御城大石垣等崩レ、高塀破レ崩レ、誠ニ驚入候有様、
当御屋敷モ御屋敷ノ分ハ為指痛ハ無之候ヘ共、大奥御
座敷迄大破ニテ、御広敷御舞台モ崩レ、東御門モ崩レ、
其外土蔵崩レ、屏モ崩レ、御栖居出来兼候付、澁谷御
屋敷ヘ昨日七ツ時

太守様齊彬・御前様・御姫方様御ハツシ有之候、昨日

公義ヨリ御使番仁木次郎八郎殿御使者ニテ、御懇之被
為蒙

上意、今日為御礼御登 城有之、

上様方益御機嫌能恐悦至極奉存候、

高輪御屋敷モ御物見崩レ為申由、乍去 御殿中ハ無別
条、御物見等崩有之由也、

四日

三七〇 全上

去ル二日晚ヨリ三日マテ大騒動之次第、徳川家初テケ
程騒動ノ由、

一十月二日晚四ツ時比、如例御客様、四ツ過ヨリ 旦那
様被遊御休、御供人数ニモ相休居申候、四ツ時三四合

比ニテモ候哉、大地震イタシ、何レモ外ヘ飛出候ヘト
モ、足腰不相立、之ハト申ス計リニテ不詳 伏シ、此時
公ヲ奉見失、扱ハト御中門ヲ破リ候処、御庭ヘ被為在
嬉敷奉抱、漸ク守護仕申候、御屋敷中ノ騒動不斜、人
足ノ甚太事頭ヲ痛マセ、気分ヲ失ヒ、菱刈家菱刈全之介
在邸ス被召列医者モ氣絶、皆々人心地無御座候、暫ノ間
ニ地震モ止ミ、公ヲ奉初人数虎口ノ難ヲ通レ候、是又
々八十ノ賀ヲ為致不詳申候間、御安心可被下候、

一市中ハ勿論、諸大名諸家震ヒ崩シ候処、諸所ヨリ火相
起リ、忽チ火天ヲコカシ、諸家板木・半鐘耳ヲ驚カシ、
四十余ヶ所ヨリ火ノ口相発シ、此ノ時ヨリ天下大乱ト
十死一生、

一太守様全御事、増上寺火ノ御番被遊御承知候付、兼テ
御定之通御用意ニ候処、諸方ノ火益盛ニ成立、御寺近
ク芝井町ト申所迄燃来リ、一番乗ニテ御馬廻衆御張出、
二番乗ニテ公御出馬ニテ人数被召列、御寺大手口ヲ被
遊御固、又三番乗ニテ市成君島津石一唱御出馬、寺内ヘ御將
机被召立候事、

太守様御出馬可被為在管之処、少々風振り直シ、御寺
掛念無之模様ニテ、御出馬御見合之事、

- 一八ッ過ニ相成申候処益盛ニ燃立、火花ヲ以空ヲ取切り、四十余ヶ所ヨリ火相掛り、諸方ニ焼立、旗本衆ハ勿論諸家藩中ノ立横十文字蹄之音不斜、櫻田御屋敷モ火相掛り候段大手口へ告来リ、又田町モ火起リタルト承リ、大勢被押立、前後途ヲ失ヒ、此時ヨリ実ニ以進退爰ニ迫リ、御持口大手口ニテ公諸共ニ死スヘキ危キニ候へ共、命迄ノ関ニ留ラレ、今日迄ノ露命ト笑ヒ合申候、御推計可被下候、
- 一男女老若稚子ヲ抱キ、又ハ老タルヲ負ヒ、マタハ死シタルヲ抱キナカラ逃ル、モアリ、戸板ニテ死人運送限リナク、右往左往大勢ニ被押立、命ヲ失ヒ候子供哀ニ御座候、
- 一夜明時分ニ相成、漸々風振り直シ、御寺近ク芝井町迄燃来リ候へ共、御寺ニ掛念無之、夜明ニハ喰止メ相成、尤寒難凌、何方モ地震ニテ家倒レ、焚ク此辺不詳、
- 一翌三日期五ッ過鎮火ニ相成、諸家ノ消鐘ニテ御引取相成申候、
- 一三日ノ日マテ世間騒動不止、
- 一櫻田御屋敷御座之間一軒震崩シ候マテニテ、火不相掛

- 由、御長屋ハ火相掛り、定府親子三人并御門上番衆・中番衆即死也、尤此節守衛トシテ被罷登郷土衆、高原ノ土一人即死、小林衆四人半死半生、蒲生衆ハ腕ヲ折リ、或ハ腰ヲ折リ、郷土衆ニモ怪我無之人ハ稀也、無難ノ衆モ大小ト金子皆丸焼ノ由、ハケシキ地震ニテ、私共モ身ノ格護中々心付不申、御推計可被下候、穎娃郷土園田甚右衛門殿倒家ニシカレ難儀ノ処、脇ノ面々ヨリ被引出、是ハ運命強ク無事ノ由、今朝中島伊左衛門殿ヨリ直咄承申候、高輪御屋敷へモ五六人死人為有之由候へトモ、今日迄ハ右往左往ニテ不詳等承出不申候、
- 一四十余ヶ所ヨリ火口相立、終ニハ四五ヶ所ニツ、マリ、神田外目町ヨリ上野御寺ノ下焼通シ、猿若町カラ吉原迄一ト流ニ焼失、此内ニ火口何ヶ所モ有之候へ共、終ニ一ニ相聞候事、
- 一京橋ヨリ芝神明ノ下櫻田大丸ノ内マテ、一ト流レ焼失、此内火本ハ何ヶ所モ有之、
- 一日本橋辺ハ無事ニテ、火ハ不相掛候へトモ、皆震崩シ候テ死人ハ多ク、焼ケタルモ同前也、
- 一兩國川ノ向ヒ本城ト申ス所一ト流レ焼失、火口ハ数多

也、

- 一 全川ノ向ヒ深川ト申ス所大火、尤火口数多也、
- 一品川続ノ御台場ノ内へ人家有之、是モ焼失也、
- 一 増上寺御出馬ノ時、田町焼立タルト承候へ共、此品川焼失ノ事ニテ御座候、田町方ハ火難ハ無之、地震ニテ即死旁ハ余所ニ不相変候事、右ノ趣書立候へハ、次第前後ノ様ニ御座候へ共、刻限同時也、
- 一 市中ノ家過半ハ倒レ、家内不残死シタルモ有之、芝井町二十七軒ノ内ニ七十人ノ即死、今日迄モ死シタルモ遁レタルモ不相知者数多有之由、纒ニ二十七軒ノ家内サヘ数多ノ死人、江戸中ニハ四五万人ノ死人ニ相及候半ト致評判区々也、
- 一 一日影町ト申所、四部ニ三ノ死人、四部一命ヲ拾ヒ候由、死人ノ数不相知、
- 一 奥州會津ノ城主松平肥後守様御屋敷、御座之間ヨリ外御長屋迄都テ震ヒ崩シ、女中ヨリ諸人数七部通ノ死人ノ由、殿様ト御前様ハ何モ沙汰無之、如何アラント人々アヤシク申上候、御太身ユヘ相分不申、震ヒ崩シ候迄ニテ火ハ掛ラス、神明ノ下増上寺近キ所ニテ御座候、(町方)当御屋敷ヨリ十里計リノ所ニテ御座候、

- 一 同国岩手郡盛岡ノ城主南部美濃守様御屋敷震崩シ候上火相掛リ、七八部通り即死ノ由、之レハ丸ノ内外ノ櫻田ト申所ニテ御座候、御屋敷無人ニテ御座候由、
- 一 丸之内酒井雅樂頭様御屋敷、尤奥女中不残焼死ト承申候、
- 一 深川ノ津輕越中守様御屋敷ハ、六十二人即死、翌日ニ相懸リ死人何十人共不承候、
- 一 丸之内山下下名不詳守様御事、御夫婦様是以御子様其外御不詳ニ至ルマテ即死也、尤十万石御大名ノ由、
- 一 肥前鍋島様御屋敷即死何百人ノ数不相知、死人ヲ車ニテ持出候由、車ハ三十俵二十俵位乗ル車ニテ御座候、之ハ米持運車ニテ皆運ヒ申候、鍋島家ヨリ死人車六ツ七ツ押出迄ハ何レモ見候由、町人共ヨリ承申候、
- 一 十万石ノ御大名ハ住所無之、我知行所へ御引取ノ由、昨日ヨリ国々へ引入ノ衆、段々為有之由承申候、
- 一 兩國ノ兩堂院ト云フ寺、大ナル寺ニテ、死人ヲ車ニテ何レモ押込申候処、坊モ死人ヲ不請取候へ共、日雇ヒ投捨置候由、岡ヲツキ申候由、
- 一 品川続キ御台場ニテ、公儀塩硝藏杯モ有之、右御台場当會津様御預リニテ候処、塩硝藏焼失ニテ、出張ノ役

々何レモ切腹被仰付候由、

一 深川井本城ト申所、大名・旗本・町懸リ三分一ノ死人ト承申候、

一 大丸ノ内御大名家、何レモ半方ハ死人ト承申候、

一 二丸御金蔵モ^{大城内}二ノ丸 焼タル風聞候へ共、是ハサタカナ

ラス、追テ実否可申上候、

一 諸所、地三尺四尺計宛ハチ破レ申候、

一 当御屋敷御門此辺不詳調所殿^{調所笑左衛門}御家老ノ節御立ニテ、

江戸一ト申触候御門、殊ニ大キ事江戸一ニテ御座候柱

ノ根、ネヂ破レ石口モ迦レ懸リ申候、

一 此状認申内ニモ何ケ度モ致地震候へトモ、纔計ノ震ニ

テ御座候、誠ニ恐敷世ノ中ニ御座候、

一 櫻田ト高輪御屋敷ニハ、外々死人有之候へ共、御屋敷

ハ一人モ無之、御運強キ 殿様難有奉存候事、

一 吉原遊女一枕ニ四十人即死ノ由、吉原一万七千人ノ遊

女三分ノ二死シ、三分ノ一逃去候モ有之候由、

一 兼テノ出火ニハ土蔵ハ焼残ル事候へ共、此節ハ震崩シ

破レ目ヨリ火忍ヒ入り、土蔵一ツモ不残焼失ニテ、御

城下ヨリ不詳 兩國吉原迄原野ノ如ク也、

一 御国元御無事欵ト存申候へ共、掛念御座候間、早便ヨ

リ為御知被下度奉願候、

一 常五郎様御事、定テ九州路ニテ何ソ御差支ハ被為在マ

シクト奉存候、最早御着ノ御事候間、形行被仰上、且

ツ御機嫌宜敷被仰上被下度奉希候、

一 今日吉利方藏殿俄ニ御飛脚ニテ被罷下候付、荒々跡先

書散シ申候間、御推覽被下度、余ハ追々為御知可申上

候、已上、

日付ナシ

隈元磯治

郡元名不詳

右日付不相知候へ共、書状相認候内ニモ地震イタシ候趣ニ

候へハ、十月六日立ノ飛脚便ヨリ申遣候日ニコレアリ、其

後同月二十日過五日アタリノ飛脚着候へトモ、其時分ハ最

早震ヒ止居候由ナレハ、両度ヨリ外ニハ便リナケレハ、最

初ノ飛脚ニ相違ナカルヘシ、右本書誤ハ扱置、全ク文字不

通ノ処ノミ多ク、別テ急卒ノ間ニ写シタルト見侍レハ、

之ヲ糺サント欲シテアタハス、

一 翌三日朝カラ晩マテ人々往来夥シク、死人ヲ戸板ニ乗

セ、又死シタル子ヲ直ニ抱テ逃ルモアリ、我々中ニモ

吞タモ喰タモ相知不申候、

一 三日晩マテハ又ハ大地震有之筈不詳、

太守様并御前様御事ハ、澁谷御屋敷御庭ノ広キ故ニテ候哉、彼ノ御屋敷へ御迦シ、御庭へ御布屋ニテ被遊御座、今迄モ御滞在也、澁谷御屋敷モ山手ニテ少シ田舎ニテ御座候、

一諸大名衆ハ其通りノ由、小大名衆ハ諸所ノ川原杯広キ所ニ幕杯不詳野陣ノ様ニテ御用心也不詳、

一市中ノ者思ヒ々々ニ広キ所ヲ見立、御殿山・八ツ山或ハ田舎々々ノ広キ所へ筵囲・戸板囲ニテ野陣之姿、誠に哀成形势也、

一私共モ大小大小刀ヲ云フト少々計金子ヲ腰ニ付逃支度、今哉遅シト待懸候ヘトモ、其夜纔計ハ地震ニテ少々ハ安心仕申候、今日迄モチン々々ツ、数度震申候ヘトモ、少々ノ事ニテ御座候、今ニ薄氷ヲ踏ム心地ニテ罷在申候間、御推計可被下候、

一徳川家ニハ初テ是程ノ騒動有之候由、不詳、異国船参リ候テモ、是程ノ死人騒動ハ有マシクト取々評判也、

三七一 寺島宗則自記履歷抄

安政二年乙卯

実父長野成宗俗称増右衛門、二月二十五日脇元ニ於テ病

没ス、寛政四年壬子十二月三日生誕、齡六十四ナリ、十月二日夜十時、地大ニ震フ、所有品ヲ伊東ノ土蔵ニ託シタルニ、土蔵崩落シ、近火漸ク迫ルヲ以テ、之ヲ他所ニ運搬シ、生徒中幕下与力設樂完爾ノ庭中一小舎アリ、震倒ノ恐レナキヲ以テ、山根敬藏等ト一時之ニ僑居シ、尔後築地小田原丁(町)ニ移住ス、此家ハ奥平大膳大夫ノ藩士岡見彦三ノ周旋ヲ以テ、該藩士両三輩、教授ノ為ニ借家料ヲ給与セラレタル所ナリ、別ニ生徒六七名アリ、肥田濱五郎・鈴木金藏等ナリ、

安政2年 (1855)

〔表紙〕

齊彬公史料

安政二年

市來四郎編

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数四十枚）」の記載あり〕

目録

齊彬公春嶽公へ親書天璋院殿事実

齊彬公越前公へ親書

齊彬公水戸前中納言殿へ御親書

齊彬公洋学生徒ヲ奨励シ玉フ

齊彬公春嶽公へ御親書

同

齊彬公島津豊後ニ与ル書

水戸齊昭公大砲船ノ題詠

安政紀事抄 開港説

江戸大地震死者二十万人

堀田正陸再ヒ老中ニ任ス

所司代脇坂安宅条約書上奏

新内裏遷幸及ヒ御祝宴

非蔵人日記抄

諸大名ノ父兄等在国及ヒ節儉勅諭

非蔵人日記抄

新内裏遷幸

齊彬公水戸侯ニ政務問答

水戸侯御答翰

軍艦昇平丸江戸海ニ廻航ス

汽船運用伝習

幕府洋式ノ銃陣演習ヲ許ス

日下部伊三次水戸藩ニ帰藩ヲ乞フ

参考 訥齋日下部氏并婦人碑文

参考 日下部父子其他就獄封回状

参考 鎌田正純日記抄

参考 江田平藏日記抄

参考 在留英人退琉後取締

三七二 齊彬公春嶽公へ親書天璋院殿事〔安政三年〕

別啓本簡送又仕候、借例ノ御一条、御養女近衛忠熱届差

出府申候、未タ御沙汰ハ無之候へトモ、七日夕願濟ニ

可相成旨、今日辰阿部伊勢守ヨリ申来候、追々御手續ニ可

相成ト奉存候、右ニ付倉橋當中事、厚ク世話ニ預リ忝

全ク 貴所様慶永公 御周旋故ト厚忝奉存候、御序ノ節宜

敷奉希候、実ニ万事差図有之、甚タ都合宜敷大仕合ニ

御座候、呉々奉万謝候、

一 水府ノ儀先ツ治候へ共、又々公兩都御食事ノ内へ如何ノ

事有之由奸党カ毒食云々ノ説アリ、此程朔日登城ノ初ニ 当公中納言殿

リモ御直ニ相伺候、何分未タ奸物相残候事ト被存候、

且又辰全上ヘモ去月六月罷越候節、口氣モ承候処、閣中モ

不承知ノ様子、只今ノ通ニテハ御登營等ノ事六ヶ數奉

存候、全ク 当公水戸中納言ノ御心底御治定ニ相成候テ、其

上ナラデハ安心ノ場ニハ相成間敷ヤト奉存候、 老公

水戸前中納言モ御義論無之、先々當世ニ御從ノ上ニテ、寛大ノ

御所置不被為在候テハ、十分平和無覺束奉存候、何分

三家ノ御方色々混雜候テハ、第一天下ノ御為不可然義、

尾公尾州候ヘモ能々被仰上候テ、此節ハ 尾公御口入ニ

テ御登營ノ義有之候様致度、左候テ水府御国政モ 当

公へ十分御讓ノ姿ニ被遊候テ、程能御教諭被為在候テ、

当公ノ御心中 老公へ真実御從御父子不睦ノ説アリシヲ云ニ相成候様

無之候テハ、十分ニハ治申間敷哉ト乍憚愚考仕候、呉

々モ厚ク御勤考專一奉存候、

一 橋川篤善有橋川編子王様管カ刑部卿殿御簾中ノ儀、去ル十六日御自害可被成ノ

処、漸ニ取留ニ相成候由、夫ヨリ只今ニモ御不快ノ姿

ニ相成居候風聞ニテハ、刑部卿殿・徳信院殿ノ事並ニ

老女女主カノ事悪事有之段、御書置有之由承申候、夫ニ付孰

レ京へ御帰ニ可相成ヤ、未タ委敷様子ハ相分不申候、

右モ矢張水府ノ御カ統旁ニテ、御本丸評判何カニ付テ不

宜様子、兼テ西丸ノ事モ右様ノ事御座候テハ、甚タ六

ヶ數事カト奉存候、

一 老公全ノ事、此節大奥向評判ニテハ、緑カ緑姫君モ如何

ノ義被為在候テ、 当公御立腹ニテ、 姫君へ御封面対カ

無之、其夜ハ老女・御中中郎等ニモ引入ニ相成ト

ノ事申フラン候由、実ハ前文御食事毒ノ事ニテ、其節

ノ女中引入居候由、夫等ノ事取受申候ニ相違無之候へ

共、タトへ風評ニテモ右様ノ義申候ハ、全當時 老公

ノ事悪様ニ申度者有之、申フラサセ候カ被存候當時毒食水等

云々、巷説ニ
モ唱ヘタリ

一 讚州高松ノ事、辰へ申見候へハ格別工ミモ有之間敷、

第一当公当中納言不宣、色々ト御心底変リ候故ノ義、此節

御心付ニ相成候テ、讚州へ悪事ヌリ付ノ思召ノ様ニ存

候趣ノ口氣ニ御座候、実ハ其詔モ可有之候得共、讚州

ヨリ余程ヨク辰へ申含メ有之ヤニ存候間、是又能々御

勘考專一ト奉存候、只今ノ尽ニテハ、又色々ノ事起リ

候ニ相違無之ト奉存候、小子ニハ表ハ老公ノ事時々悪

ク申居候テ、諸人ノ口氣相探候考ニ御座候、辰へ申候

節モ少々悪様ニ申候テ、相探申候義モ有之候間、殊ニ

寄り水府へ小子ノ義、如何ニ相聞得候モ難計候間、此

段ハ貴君へ兼テ申上置候、御合置可被下候公カ水戸公保
疵ノ情ヨリ出

タルモノナリ、故ニ本書ノ如
ク越公ニ含メ置カレシナリ

一 兼テ御存ニ候ヤ、川路左衛門尉方へ居候水府浪人宮崎日下部

事、当時日下部伊三次、右ハ元国出ノ者ノ倅ニテ、兼

テ願望有之由ニテ、水府モ御承知ニテ、此節小子方へ

召抱申候、是ハ只御咄ニ申上候、

一 伊達へ過日被仰遣候手伝金納ノ通唱ノ義、辰へ承候処、是ハ

急度御沙汰無之トノ事ニ御座候、先ハ要用迄早々申上

候、乱筆御仁免可被下候、猶後便可申上候、頓首、

安政三年七月七日(五百九)

猶々、御用大船廿四間ノ方大砲、去ル廿九日(大元九)月 品川

へ着船、二十間ノ方全ハ横濱迄参リ、当時普請取掛

罷在候、先少々安心仕候、色々取込乱筆吳々御高免

奉希候、以上、

(昨夢紀事(日本史籍協会叢書)にて校訂)

三七三 齊彬公越前公へ親書(安政四年カ)

芳翰忝奉存候、其後弥御清榮奉恐寿候、然ハ其御地大

雨ニテ、作毛ニモ相障候由、御心配ノ事ト奉存候、且

如仰西城將軍ノ御儀奉恐入候、実ニ天下衰弊海防ノ大

障幼君紀州ニ定リト奉存候、中山琉球在留英人英人相替事モ無之

候、崎陽蘭船ノ風説何分不相分候、乍然世評色々申候

由、可惡事ニ御座候、海岸別テ油断不相成時節ト奉存

候、先ハ貴答迄草々如斯ニ御座候、恐惶謹言、

八月二日(安政四年カ、島津家書翰集には「八月二日(安政三年)とあり」)

薩摩守

越前様(守鹿カ)

猶々、御自愛專一奉存候、以上、

(薩藩史料齊彬公(東大史料編さん所蔵)にて校訂)

三七四 齊彬公水戸前中納言殿へ御親書

九月二十一日

幕政問答ノ件

別紙奉拜見候、先日 御大政御相談被仰出候段、天下ノ御為メ無此上恐悦奉存候、右ニ付御内書ノ趣難有奉拜見候、夷狄ノ様子扱々可悪次第ニ御座候、当時御手当御行届無之御時節、外ニ致様モ無之ト奉存候、大船ハ勿論、海防御手当御全備ニ相成候様トノ御所置第一ノ義ト奉存候、併当時ノコトク諸大名及困窮候テハ、中々急ニ御全備無覚束奉存候、右ノ御所置願度儀ト奉存候、蝦夷地ノ事箱館奉行計リニテ御手当相成候テハ、十分ノ儀無覚束様ニ乍恐奉存候、可然御普代ノ面々へ、於彼地領地被下、引受手当被仰付候へ、十分ニモ相成可申、乍然不容易大任ニ御座候間、御人撰第一ノ義ト奉存候、世上一同金銭不通用、諸色高直ニ御座候間、此所置第一ト奉存候、近来色々被仰出モ御座候得共、長ク被行不申、夫故被仰出モ行届兼候訳モ御座候ト奉存候間、乍恐以後被仰出候儀、永年被行候様ニ御所置有之度、初発ヨリ手強キ御法令被仰出候テハ、却テ人々恐怖仕候間、行ヒ安キ事ヨリ追々被仰出候へ、人々難有御法令相守可申哉ト奉存候、当時世上ニテ申候

ハ、近々ニハ何ニカ手強キ義被仰出候哉ニ取沙汰仕候、俄ニ発令被仰出候へ、御善政ニテモ、一応ハ人氣動乱可仕哉ト乍恐奉存候、此節ノ様

上ヨリ金銀御道具御下ケニ相成、神田祭礼等ノ被仰出誠ニ難有次第、御妙策ト奉存候、乍恐

上ヨリ右様相成候得ハ、自然ニ御法令被行可申ト難有奉存候、此上ハ永年不相替処第一ノ儀奉存上候、右ノ条々誠ニ恐入奉存候得共、心ニ存候テ建白不仕モ恐入候間、極内奉申上候、御覽後御火中奉願上候、謹言、

九月廿一日 齊彬

上別紙御請

〔照國公文書ならびに願聖公年譜にて校訂〕
此御書簡ニ対シ、水戸侯ノ御返翰第 卷に記ス、

三七五 齊彬公洋学生徒ヲ奨励シ玉フ〔安政三年〕

三七五の一 学問並ニ蘭学為稽古致出度望ノ者ハ、筋々へ相付可願出旨、去年九月乙卯 申渡置候通ニテ、懇望ノ者ハ願書取揃可申出旨、向々支配頭へ申渡、諸郷・私領へモ不洩様早々可申渡候、

三月 丙辰三年
十月十日

下總 徴久

〔願聖公年譜にて校訂〕

三七五の二

学問并ニ蘭学為稽古、他国へ被差出候面々、是迄二人
(各脱)
賄被下置候処、右被下方ニテハ稽古方不行届候由ニ付、
別段以 思召、以来三人賄料被下候旨、

御沙汰被為 在候段申来候、此旨組中へ不洩様諸郷・
私領へモ可申渡候、

五月 丙辰五
月 六日

〔新納久仰〕
駿河

〔順聖公年譜にて校訂〕

和漢洋学研究志望ノ輩ハ、藩費ヲ以テ江戸其他へ出サルヘ
キ旨、乙卯三月布達セラレ、二人賄料ヲ給与セラレタリト
雖モ、追々物価高騰困却ナルカ故、三人賄料給セラル、事
トナレリ(三人賄料トハ、一月ニ玄米四斗五升、金一両二
歩ノ割合ナリ、之レヲ江戸邸在勤御目見以上一般給与ノ定
規ナリ、御目見以下一身賄料トハ足輕等ノ給分ナリ、書生
ノ給料如斯増給アリシヨリ、学費等漸ク弁スルニ至レリ、
当時ノ物価ハ玄米壹石凡ソ三四貫文、酒壹升代二百文内
外ニシテ、一人一月ノ食料金ニ歩位ヲ以テ足レリトシ、
一人ノ旅籠代凡二百文ニ過キサリシナリ)○洋学生徒ハ、
(辛酉年)
亥ノ冬三四名ヲ大坂又ハ長州ノ両所ニ出サレタリ、之レ藩
費生徒ノ初ニシテ、尋テ志望者続々各所ニ出サレタリ、○
漢学生ニハ、堀仲左衛門伊地知貞・上原原之丞・久木山泰藏
重野厚之丞安繹・美玉三平等ヲ初メトス、如此勸奨ノ道ヲ開

カレタルカ故、月二年ニ文学進歩ノ途ニ就キ、今ニシテ重
野其他有名ノ人輩出シタルハ、全ク御誘掖ノ厚キニ依レリ、
其前ハ遊学ノ志アルモ容易ニ允許セラレス、適々允許セラ
ル、モ、自費或ハ年限ノ成規アリテ、束縛究マレルモノナ
リキ、或ハ眼病療養ノ口実ヲ以テ、年月ヲ定メ遊学スルモ
アリタリ、古ヨリ一種鎖国ニ等シキ制度アリテ、商人ヲ除
クノ外、他国へ出ルヲ嚴制シ、容易ニ出ルコトヲ得ス、中
ニモ士分ノ者ハ私ニ他国へ出ルコト能ハス、眼病療治ノ外
ハ允サレサリシナリ、茲ヲ以テ、江戸・大坂等、在勤者ノ
外終身都会ノ地ヲ見サル者多ク、隣国ノ地ヲ踐タル者百中
ノ二三ニ居レリ、故ニ狭隘固陋ニシテ隣隔日ヲ一天地ト思
フ者ノミノ如シ、真ニ井中ノ蛙トモ謂フヘキナリ、適々江
戸・大坂等へ在勤スル者モ、他藩人ニ交ルヲ許サス、邸中
館入リノ商工輩ニ止レルカ如シ、從テ天下ノ事情ヲ知ルヘ
キ様ナシ、茲ヲ以テ遊学御勸奨汎ク天下ノ事情ヲ知ルノ道
ヲ開カレタリ、是ヨリシテ有名ノ者輩出ス、偏ニ御薫陶ノ
厚キニ依レリ、

三七六 齊彬公春嶽公へ御親書(嘉永二年)

○この文書は、「鹿児島史料 齊彬公史料」第一巻の第四〇四
号文書の嘉永二年十月九日附島津齊彬書翰と同文により略す。

三七七 齊彬公春嶽公へ御親書〔安政三年〕

一筆致拜啓候、寒冷ノ節御座候処、愈以御清福奉恐寿候、〔以脱カ〕 偕先日來尊書被下候処、彼是取込候テ、執筆甚イソカシク、其上余リ執筆過候へハ、例ノ持病ニ相障リ、当用ノ事計認メ候、乍存延引ニ相成恐入奉存候、此節ハ時節モ宜敷相成候間、冷氣ノ内ハ御文通モ可仕候、呉々モ是迄ノ処恐入奉存候、神無月四日尊書モ回達忝奉存候、〔御廣敷入モ十一月十一日ニ被 仰出、殊ニ以テ難有奉存候、〕 右ノ御吹聴御礼可申上候、前文ノ次第ニテ延引相成申候、何卒御仁免可被下候、然ハ常磐橋・倉橋ニモ色々世話ニナリ申候、是又御礼奉申上候、
一御法令被仰出之由、小子方ニ無御座候間、上杉ヨリ借受差上候、〔申脱カ〕 阿州登城ノ由故、大廊下御礼ノ義ハ彼方へ御尋御座候へ、可相分ト奉存候、偕亦当戸短刀ノ事、困元へ事付有之御書モ有之候、全ク小子方御惠投ニテハ無御座、此節相糺候処、文化ノ頃於大坂取入候由ニ御座候、則御書写御拵等モ差上申候、
一外夷ノ義ハ堀田受持ト相成申候、孰レ交易御開ニ相成〔候脱カ〕 訳ト相見得申候、老公ヨリ委細被仰遣義ト奉存候、交易モ盛ニ相成、夫ニテ武備十分ニ相成候テ、世界中強

國ト被呼候様相成候へハ、宜敷候へ共、当座ノ御利益〔而ニカ〕 ニノミ相成候テハ、其限ノ事ト奉存候、此節ハ何モ議論不仕候、自國ノ義ヲ乍不及手当仕候外有間敷奉存候、
一橋ノ事・刑徳ノ事、全ク簾中ノ妬心ニテ、一心ニ思召込候訳ニ相違無之、此段ハ委敷承リ候処、簾ノ不宜敷ニ相違無之候、此節ハ先ツ御出勤ニ相成申候、委細ハ何分筆紙ニ尺兼候、

一遐邇貫珍ノ事、是ハ其後手ニ入不申候、

公辺ニモ承合候処、不参トノ事ニ御座候、唐國ハ先靜

謐ノ由、併シ朱賊未タ降伏ニハ無之由ニ御座候、

一大風ノ事、甚タ当惑仕候、大元丸艦軍未タ引出々來兼申候、色々ト申出候者モ御座候へ共、余リ高直ノ事ニテ、

自物ニ候へハ宜敷候へ共、御用船故高直ノ事ニテハ、

勘定辺幕府勘定奉行如何可申哉ト、旁ニテ此間辰へ相談致シ

置候、昇平丸ハ最早浮出申候、中々大振ニ候故、其通〔二カ〕

リニハ参兼、偕々当惑仕候、

一魯人モ参候由、未タ委細ハ不承候、弥以異國船度々渡

來ノ事ト奉存候、

一御引移リニ付テモ、日々大取込罷在候、右ニ付種々用

向有之候テ、実ニ困却仕候、御上リ相濟候へ、嚙々安

心可仕ト奉存候、夫々大奥御広敷向トモ、例ノ欲心ニテ、彼是ノ義不絶、甚タ心配罷在候、

一水当公水戸当中納言ニモ先日中度々拜顔、矢多部ノ事品々御咄モ有之候、先ツ住所不相知トノ事ニ御座候、併シ少々心当モ出来候ヤト、外ヨリ極内々ニ承候、此儀ハ

老公ヘモ小子ヨリ申上候義、御内々奉願候、弥ノ義相知候ハ、極内可申上候、老公外両三人ノ外、不存事ノ由ニ御座候、

一当公御愛妾モ当月安産致候処ニ、当廿二日〔俄ニ脱カ〕下宿養生被仰付候由承候、兼テ悪評承候処、夫ヨリ事起リ候ト奉

存候、当公ニハ無之、老公思召トノ事、宿元ニテハ申候段承候、此事ヨリ又々、当公思召如何ト奉存候、委敷事ハ未タ不承候、相知候ヘ、可申上候、被捨置難キ事ニテ、当公御承知ノ上候〔ニ脱カ〕ヘハ宜敷、無理成処ニテハ、此末如何ト不及ナカラ心配仕候、猶承次第可申上候、

一箱館ニテ異人色々混雜モ有之由ニ候ヘ共、委敷事存不申候、

一講武所度々老若見分有之由、品々御世話ハ有之候ヘ共、大本ノ処御所置頓ト無之故、此末ノ処無覚束義ト奉存

候、先々無言ノ方宜敷様子故、辰〔盛カ〕達候テモ御引移ノ事計、異船ノ事一言モ不申候、

一御引移道具モ廿一日ヨリ相初メ、廿五日・廿九日ト相廻申候間、此節ハ大取込罷在、其外色々承候事有之、寸暇無御座候、先ハ先頃中ヨリノ御請并ニ要用、前後取受申上候、其上大乱筆偏ニ御仁免奉希候、来月御入相濟候ハ、細事可申上候、只々モ大略ノ貴答恐入奉存候、恐惶謹言、
十月廿六日夜認

〔安政二年〕

薩摩守

越前守様

猶々、時氣御自愛專一奉存候、伊達ヨリ風説書モ上候ト奉存候、色々下田ノ事承候ヘハ、何分此節ハ申上兼候、来月相濟申候ヘハ、追々可申上候、以上、
〔其カ〕
〔蝦國公文書ならびに順聖公年譜にて校訂〕

三七八 齊彬公島津豊後ニ与ル書

一筆申入候、愈無事通行珍重存候、御道中モ無御滞由、恐悦奉存候、当地地震ニテ大變到来、併先々外ト競候得ハ宜敷、其後相替候事モ無之候、然ハ申越候趣委細相心得申候、此程御道中ヨリ御直書ヲ以テ、地震ニ付テハ、来々秋比ノ御参府ニ相成候様、萬印遊羅女ノ事モヲ云

被仰下候、未タ右様ノ義申出候時節ニ無之候間、様子見合セ、辰之口へ申込候様可仕旨、御請モ申上候間、イツレ其ウチ何分可申遣候、

一於大坂新借取計候由、重疊ノ都合ニ御座候、此度直ニ芝ノ修覆取計候テハ、実ニ莫大ノ入価ニ候間、段々及勘考、武兵衛申談候テ、先ツ此節ハ長屋向取繕申付、住居ハ一兩年ハ澁谷ニ致、左候テ芝ヲハ来秋比ヨリ、ソロ／＼ト取掛リ、巳年^{安政四年}ヨリ午年^{全五}ノ春迄ニ成就ニ相成候様可致、左候得ハ新借ニモ不及、年々ノ余分ニテ可也ニ可相濟ト存候、其上近年關東辺地震多候間、来多モ無覚束、旁少々様子見計候方可宜ト存候間、住居ノ分ハ一番跡ニ相廻シ申候考ユへ、差当リ三万兩ト二万兩有之候得ハ、宜敷ト存候間、其心得ニテ可罷在候、左候テ大工モ国ヨリ呼寄、手丈夫ニ致度ト存候、尤家根モ銅ヲ多致度ト存候、

一其上大奥向余リ手広過申候トテモ、此節不建直候テハ難相濟様子ユへ、此度幸ノ事ユへ画図仕直シ、大奥向成丈手細ニ可致、左候へハ平日ノ物入モ少ク相成、旁節儉第一ニ存候間、無用ノ場所等取除キ、廊下少キ様仕直シ度考ニ候事、

一未タ伺ハ不致候へ共、此節ノ地震ニテ、玄闕ハ大カタ崩レ申候屋敷多ク有之候、夫故段々考候処ニ、国元虎之間ノ通ニ致候得ハ、他家ニ無之玄闕拵候程ノ物入モ無之、武家相応ノ事故、表式台取直度存候、内々御目付方承合セ候処、差支ハ無之ト承候間、辰へ内談ノ上、画図ニテ伺候テ宜敷トノ事ニ候ハ、表玄闕無之虎之間ノ様ニ可致ト存候内存ニ御座候、其上公辺ヨリモ、此節ハ如何トモ手丈夫ニ致候様、立派ニ不及トノ事モ被仰出候間、旁考付候事ニ御座候、

一 大砲船モ十二月中相廻候ヨシ、何寄ノ事ニ候、船相廻リ、代金下リ申候得ハ、其金モ此節ノ修覆ニ差分可申候間、旁最早別段金子心配ニハ及間敷ト存申候、

一 其外色々申遣候義モ有之候得共、取込候間、後可申遣候、(備脱也)

一 御縁辺ノ義篤姫、十二月ハ無相違段モ承候処、此節ノ地震ニテ、又々延ヒ可申ト存候、未タ其事ナト申出候時節ニ無之、其内様子可申遣候、誠ニ地震ニテ大手違ニ相成申候、

一 戸田親チカ様事、トカクヤカマシキ事有之候テ、南部遠江守申談候テ、無拠澁谷へ御滞在ニ相成申候、イツ

レ委敷事ハ追々可申遣、成丈ケ御返リニ相成候様可致考、当人何分返リ候心無之ニハ困リ入申候、委細ハ追々可遣候、
(申脱カ)

一折田折田 莫今日御渡ニ相成候、尤手荒ニ咎メ無之様ニトノ事モ内々達候間、親類預ケニテ、困入詐欺取財ノ罪 手ニ權レルヲ申シ取りテ、船牢ニテ鹿児島ニ下シ、永牢ノ処分ヲ受ケタリ リノ処ニテ可然ト存候、取扱ノ処、辰へ届ケ可申候間、大目付へモ能々可申聞候、

先ハ用事早々申入候、猶後便可申遣候、以上、

十一月二日

卯十一月江戸ヨリ、

(照園公文書ならびに順聖公年譜にて校訂)

三七九 水戸齊昭公大砲船ノ題詠

水戸侯於江戸、大砲船為御覽田町へ御出ノ節、御詠歌被遊、豊後島津 殿へ被下候由、

高輪ノ沖島津主ノ船ニ乗リテ読メル

備する名も高輪の軍船

聞きしに優る造りなりけり

當時ノ形況ハ、藤田東湖カ戸田忠大夫へ報告ニ明カナリ、
第(マ) 卷ニ記ス、此時我公モ御案内ノ為メ御乗込ノ積ナリシ

ニ、当朝ニ至リ卒然幕府ノ内示ニ依リ、已ムヲ得ラレス困老島津豊後ニ接待セシメ、公ハ軼シテ田町邸ヨリ試造ノ小蒸氣ニ乗リ、大森ヨリ黒田侯、伊達公ト俱ニ大井村ノ別邸ニ到リ、終日遊ヒ暮シ玉ヒ、晚景ニ帰邸セラレシト(伊達宗城公御手留参看スヘシ)

三八〇 安政紀事抄 開港説

勢州阿部伊勢守 既ニ外国ノ請ヲ容レ、三港横浜・長崎・函館 ヲ開ク、大ニ天下ノ人心ヲ失フコトヲ知ル、故ニ内政ヲ釐革シテ以テ其責ヲ償ント欲スルモ、泉州(松平和泉寺・松平伊賀守)・賀州等小人ト結合、之ヲ妨ケ一ニ意ノ如キヲ得ス、外国亦益肆ニ頻リニ請フ所アリ、於是乎断然意ヲ決シテ二人ヲ罷メ、大ニ内政ヲ修メ、以テ外国ヲ抑ントス云々、

三八一 江戸大地震死者二十万人

十月二日、關東地大ニ震フ、江戸尤甚シク、全国死傷者凡二十余或十六万人トモ云 何レ乎是ナルヤ 万人、邸第・民舎頽破焚燼スル者勝テ計フヘカラス、全府焦土、伏戸横路惨毒最モ極レリ、水戸家臣戸田忠大夫・藤田誠之進共ニ庄死ス云々、

三八二 堀田正睦再ヒ老中ニ任ス

十月九日、堀田備中守老中トナル、備州ハ天保中嘗テ老中タリ、後閑ニ居ル者十四年、是ニ至テ復出班、勢州ノ上ニ在、備州固ヨリ洋学ヲ信シ、意専ラ開交互市ニ在、コレヲ以テ前中納言ト合ハス、納言亦其輔翼阿臣ヲ喪ヒ、意氣前日ノ如クナルアタハス、勢州モ亦勢ヲ備中ニ譲ラント欲ス、是ニ於テ権稍備州ニウツル、世人謂、納言ハ内事ニ明ラカニシテ、内国ノ人望ヲ得タリ、公武ノ間殊ニ此人ナカルヘカラス、堀田ハ外事ニ通シテ内情ニ暗ラク、諸藩志士ノ情実ヲシラスト、是レ戊午ノ事ニ当テ困^{〔安政五年〕}頓スル所以ナリ、戊午ノ時ニ於テ、モン納言ヲシテ京師ニ使セシメ、堀田ヲシテハルリスニ接セシメハ、内外其所ヲ得シ、シカレトモ是亦時勢ノナシカタキ所ナリ、是ヨリサキ納言勢州ト謀リ、松平河内守ニ托シ、其臣藤田ヲシテ歐米諸國ニ歴遊セシメントス、事未行フニ及ハス、此変アリ、人皆之ヲ惜ム、震後令アリ、諸大名ヲシテ隨意國ニ就シメ、常例ノ儀式季節吉凶ノ賜与享献ヲ止、其他賑恤省略ノ方、簡易節儉ノ政備拏セサルナシ、皆勢州ノ決行スル処ナリ、是ニ因テ人心安堵、衆其機略ヲ称ス云々、

三八三 所司代脇坂安宅条約書上奏

十一月二十二日、月並為伺御機嫌、今二十二日拙者致参内候処、関白殿被逢、去ル十八日三ヶ国ヘノ条約書写持参、演説之趣并都筑駿河守直話ノ次第等、委細被及奏聞、条約書写モ被入 観覧候処、段々ノ御処置振具サニ聞食、殊ノ外 観感被為在、

先以御安心被遊候、不容易事状追々居合候段、千万御苦勞ノ御儀ト被思食候、猶此上ノ御取扱振御国体ニ不拘様御頼被思食候、右之趣宜申上旨被仰出候、且又各様ニモ不通御心勞、其外掛リノ面々モ骨折候義ト被思食候、是等ノ趣各様迄能々可申進旨御沙汰候旨、今日関白殿被申問候間、此段申進候、以上、

九月二十二日 脇坂淡路守

猶又本文之趣、都筑駿河守ヘハ別段不相達候旨、為心得被申問候間、被遊御安心候迄ノ義ハ、同人罷出候節、拙者ヨリ相達可申存候、以上、

三八四 新内裏遷幸及ヒ御祝宴

十一月二十三日

皇宮成、天皇遷幸、

三八五 非藏人日記抄

十一月廿四日

| | | | | | | | | | | | | | | | |
|--------|--------|--------|------|----------|----------|-------|---------------------------|------|-----|-----|------|----|------|------|-----|
| 近衛大納言殿 | 九條大納言殿 | 二條大納言殿 | 左大將殿 | 德大寺前内大臣殿 | 花山院前内大臣殿 | 前内大臣殿 | 大炊御門 <small>(ウツミ)</small> | 内大臣殿 | 座主宮 | 長吏宮 | 兵部卿宮 | 帥宮 | 中務卿殿 | 右大臣殿 | 閔白殿 |
|--------|--------|--------|------|----------|----------|-------|---------------------------|------|-----|-----|------|----|------|------|-----|

中納言中將殿
九條中將殿

等御参、其余御不参有御使、

一 諸家参賀、同列同之、晩頭書付上之、

一 参賀一同へ御祝酒被出、

(非藏人日記抄(宮内庁書陵部所蔵)にて校訂)

三八六 諸大名ノ父兄等在国及ヒ節儉勸諭

十一月晦日、諸大名ノ父兄子弟ヲシテ国ニ居シムルヲ許シ以テ費用ヲ省キ、府下ノ人民ヲ減ス、前者都筑駿河ノ上京スル、所司代脇坂淡路守ト共ニ鷹司閔白殿下ニ謁シテ、幕府外国ノ処分ヲ具陳ス、殿下之ヲ奏聞、教旨ヲ所司代ニ達ス、所司代之ヲ幕府ニ伝テ曰ク、

駿河守京着ノ上、其御地ヨリ持越候ロシヤ・エギリス・アメリカノ条約書写持参ニ付、委細演説之趣承之、兼テ被仰下候義モ有之ニ付申談、一昨十八日、駿河守同道閔白殿へ致伺候、条約書写拙者指出、被仰下之趣及演説、引続キ駿河守ヨリ御直話イタシ、相尋ラレ候ケ条モ有之、同人ヨリ逐一及御答候処、委細被承知、是迄応接ノ次第并三國トノ条約無御拠訳柄、其外異国ノ事情等、実事分明ニ相訳リ被致安心、右ノ段可被及言

上候間、是等ノ趣ハ宜申上旨、関白殿被申聞候、且各
様ニモ彼是御配慮之段、是亦宜申進旨被申聞候間、此
段申進候、右ノ節伝奏衆、議奏廣橋大納言・萬里小路
中納言被致侍座候、以上、

九月二十日

脇坂淡路守

阿部伊勢守様

牧野備前守様

久世大和守様

内藤紀伊守様

三八七 非藏人日記抄

八月十二日

一 造内裏上棟日時定陣儀也、上卿權大納言實萬卿三・弁
權右中弁長順室・奉行職事頭左中弁光愛朝臣柳、其余
職事六位侍中新藏人源常典等参侍、於陽明家寢殿被行
中殿代 奏聞、内侍寮有之、此間依番頭代示、花車杉戸
外自端一人令警衛、如每例、

一直盧設有之、

一 虎間代献広之 良知役之、

一 三條大納言殿・萬里小路中納言殿着陣卜云、

一来ル廿四日辰刻造内裏上棟ニ付、参賀献物等寛政度之
通相可心得、奉行西洞院殿被申渡候事、仍令壁書、

九月十五日

一月帶蝕也、御殿覆大江俊堅奉仕、

九月廿八日

一 酉一刻前地震、長動、依之諸家同列馳参、或ハ御使有
之、雖然今日ハ書付不及献上旨、議奏衆被申渡候、

〔非藏人日記抄〔宮内庁書陵部所蔵〕にて校訂〕

三八八 新内裏遷幸〔非藏人日記抄〕

十月廿四日

一来月廿三日卯刻遷 幸、賢所同刻渡御、准后御方同刻
御徙移等、内々御治定被仰出之旨、且禁中准后御方・
新待賢門院殿下等へ可有参賀之旨、奉行信堅卿西洞院被
申渡、令壁書一統触達了但参賀兩三日中且廿六日被除
一 就来月一日春日祭、従来廿八日晚至来月二日朝御神事
之旨、議奏萬里小路殿被申渡、令壁書、

飛鳥井侍従三位

一 議奏加勢被 仰出之旨、萬里小路殿被申渡、令壁書了、

一諸家參賀、非藏人同之、

十月廿八日

一來月三日、新 御所引渡ニ付、別紙条々以書付被申渡、
且於此度へ是迄小番寛政度共相違之事故、結改小番組
可献上、奉行日野殿被申渡但朔日二日ノ内
献上可有旨也

別紙

一自來月三日此日新内、
裏引渡也、小番可為四番事、

内奥端共

三番 仮皇居 勤番

一番 申合新内裏勤番

一雖 仮皇居 御神事中、於新 内裏、輕服者不
及憚事、

一遷幸御当日、輕服者不憚事、

一遷幸御当日、仮 皇居參勤之輩、唐門外々堂上

ニ隨從御見送之事、

一同上新 御所參勤之輩、堂上ニ隨從、建禮門外

西方ニテ御出迎之事、

一遷幸已前、新 内裏詰所ハ勿論、惣体疊・建具

以下万事破損等無之様、大切ニ可心付事、

一仮 皇居御格子凡亥半刻頃、於新 御所モ其頃

休息之儀、議奏ヨリ夫々申渡候へ、早速休息、
不及深更候様可心得事、

一火取扱、第一堅固相慎可用心事、

右令壁書、依之明日番頭々々代詰改、集会相催了、

十一月三日

一遷幸被 仰出、諸家恐悅、晚頭書付上之、

一新 内裏引渡也、未申刻計修理職奉行衆參向、此時御
造宮掛同列隨從參向各闕服、
青侍供、暫時引渡相濟、奉行中山大

納言殿言上參侍仕、此時議奏衆へ番頭相伺、新殿參勤

之輩此已前已刻斗子
此御所へ參集于并御道具御用掛ノ同列三人、先可令參

上哉申入処、早可參向被命、其旨夫々へ番頭申渡有、

須臾議奏第一卿并近習内々々様衆、各同時被參上、

十一月廿七日

一關東使為 遷幸御祝儀、六角越前守廣泰・諸司代龍野

侍從同伴參 内、參着於雀間兩役呢近衆等有出會、出

御于小御所、有 御对面賜 天盃、訖テ復鶴間御礼申

述退出、先是御殿敷設奉行衆之沙汰也、円座之員數兩

番尋へ尋之、如例設之、

一使者 参内以前、於諸大夫伝奏雜掌ヨリ献物請取如左、

御太刀正永

一腰

御馬代(白銀五百枚)

一疋

御肴

三種

御樽

三種

右自大樹公

御太刀

一腰

昆布

一箱

御馬代(白銀)

一疋

塩鯛

一箱

御樽

一荷

右六角越前守廣泰

御太刀

一腰

御馬代(黄金十両)

一匹

右龍野侍從安宅朝臣

以上進献

右献物於御拜道廊下、伝奏衆有内覧、大樹公之太刀折

紙ハ六位侍中へ被授、白銀付台目六上包台等撤却之御小御所東廂

へ繰置如例、使者之太刀折紙ハ高廊階下ニ置之、以金

屏風屈之、御対面之節、出向之者越前守・所司代等へ

渡之、御塞被解之、後鈴之廊下へ令運送議奏衆へ、鶴杉御尋申入

戸内ニ有之太刀折紙ハ、議奏衆前廊下へ繰置是亦議奏、衆へ相尋

且献物目錄写議奏衆へ進之御詰同上

一出向元續・正直設之、

一桂家自今桂御所ト被称旨、奉行日野殿被申渡、

町尻大宰大式

飛鳥井侍從三位

右被、免議奏加勢之旨、同卿被申渡、

右兩条令壁書、

(非藏人日記抄(宮内庁書陵部所蔵)にて校訂)

三八九 齊彬公水戸侯ニ政務問答

○この文書は、本文第三七四号文書と同文により略す。

三九〇 水戸公御答諭

(一脱カ) 昨鳥ハ御細答、誠ニ御別紙ノ趣逐一御尤ニ存候得共、

大小名ノ窮迫ヲ御救ヒハ、如何様ノ御仕向ケニテ可然

哉、金穀ヲ以救ヒ候ハ際限モ無之候間、定テ御制度ノ

上ヨリ御救ヒノ貴考モ存候処、其廉々全ク愚老ノ心得

迄ニ委細承知イタシ度、建白イタシ候迎モ成否ハ勿論

難計候得共、ヨロシキト存候事ハ、乍不及力ヲ尽シ申度候、号令等剛勢ハ不宜云々、御尤千万ニ候、是ハ愚老モ元ヨリ右ノ見込ニ有之、文略草々也、

晚秋念三

水隠士

薩州殿

(照國公文書にて校訂)

三九一 軍艦昇平丸江戸海ニ廻航ス

三月十八日、御船奉行石原某助、公製造スル所ノ昇平丸ニ駕シテ江戸ニ至ル、大槻平治奥州ノ儒臣青溪ト号ス一詩ヲ賦シ、以テ公ニ献ス、詞ニ曰ク、

四海三櫓我一櫓 驚看新造擬西洋

只心直筆伝千歳 日本軍艦是濫觴

八月十四日、島津齊彬始メテ洋艦ヲ模造シ、昇平丸ト名ケ、之ヲ幕府ニ献ス、

六月二十六日、閣老阿部正弘書ヲ公ノ左右ニ贈リ、公造ル所ノ昇平丸ヲ得ント欲スルノ意ヲ論ス、左右以テ聞ス、公曰ク、幸甚、吾軍艦ヲ製造ス要国家ノ用ニ供セント欲スト、明日昇平丸ヲ挙テコレヲ幕府ニ献ス、公因テ正弘ヲ見テ曰ク、宜ク国旗ナカルベカラス、知ラス何ヲ以テ国旗トナス、正弘曰ク、幕議未タ国旗ニ及ハス、公ニ問

フ、公対テ曰ク、日ノ丸ヲ以テスル如何シ、正弘大ニ感喜シ、以テ將軍家定ニ聞ス、家定亦感喜ス、是ニ於テ日ノ丸ヲ以テ国旗ト為スヲ布告ス、是日本ニ於テ国旗ヲ製スルノ始ト為ス、和蘭人我国旗ヲ以テ世界第一ト称スト云フ、是夏国産ノ販売所ヲ江戸深川ニ設ク、初メ我藩産スル所ノ品物悉クコレヲ大坂ニ出シテ鬻売セシメ、曾テ他邦ニ出スコトナシ、大坂ノ賣人はヲ以テ常ニ其利ヲ得、公以テ為ク、此大ニ国産ヲ鬻売スル所以ニ非ラスト、是ニ於テ更ニ販売所ヲ深川ニ開カシム、大坂ノ賣人コレヲ聞キ、以テ己ニ不利トシ、或ハ奸計ヲ為スモノアリ、公コレヲ聞テ曰ク、彼輩何ソ能ク為ン、三五年ヲ出スシテ吾必ス多ク大船ヲ造リ、運輸ノ便ヲ開キ、大ニ産物ヲ裝載シ、四方ニ鬻売セシメ、以テ国家ノ用ニ供セント欲ス、然ルニ国産ヲ挙ケ、官売ニスルトキハ、市人以テ生ヲ為スナシ、吾固ヨリ以テ市人ニ鬻売セシメント欲スルナリ、下利ヲ得レハ即チ是レ上ノ利ナリ、

三九二 汽船運用伝習

七月二十九日、幕府勝麟太郎・矢田堀景藏並ニ小頭ニ命シテ、蘭人ニ就汽船運転ヲ学ハシム、

三九三 幕府洋式ノ銃陣演習ヲ許ス

近来異国船度々到来ニ付テハ、御備向別テ嚴重無之候
テハ難相成、然処外夷防禦ノ儀ハ、銃陣專要ノ儀ニ付、
与力・同心・御徒等、西洋伝銃陣修行可為致旨被仰出
候、右ニ付、御筒等モ追々張立被仰付候間、出来次第
御借渡可有之候条、此節ヨリ其心得ヲ以、〔脱カ〕專ラ訓練精
出候様世話可被致候、尤弓組之儀モ、〔相脱カ〕右銃隊ヲ兼修行候様
可被致候、

右之通、大番頭・御小姓〔御書院番頭也〕与番頭・百人組頭・御持筒

頭、火消役・御先手御徒頭并八王子千人組頭へ相達、
〔其脱カ〕御鉄砲方へモ相達候間、可被得其意候、尤向々へモ

為心得可被達候、

六月 〔二十九日〕

右之通、從 公儀被 仰渡候条、組中支配中并諸向へ
不洩様可被申渡候也、

卯八月晦日

御軍役方

御家老座印

〔大日本古文書(幕末外国關係文書)にて校訂〕

三九四 日下部伊三治水戸藩ニ帰藩ヲ乞フ

日下部伊三治

其方儀、好学篤実志格別成者ニ付、追々御引立被下置
候処、亡父連遺言相守、父祖累代旧主之恩ニ報申度段
陳情之趣達 御聴候処、志操格別之儀ニ付、願之趣無
余儀相聞、臣子之常ニハ候へ共、旁以御感称被遊、依
之願之通御暇被下置旨被 仰出者也、

金式拾両

日下部伊三治

右ハ御暇被下置候処、旅用差支モ可有之、

思召ヲ以、本文之通被下置候条、其旨可被相達事、

附 別ニ 御手許ヨリ御送別之御詠、其他

箋〔御社礼御服等賜候由ナレ共、記録ナシ、

日下部父子カ履歴ハ、大久保利通日記、及ヒ樺山資之紀事

ニ詳記ス、或ハ萬延元庚申三月上巳并伊家横死始末、有村

次左衛門カ事蹟中ニ詳記ス、参照スヘシ、

三九五 参考 訥齋日下部氏并婦人碑文

訥齋日下部先生墓碑面

碑陰 訥齋海江田君墓表

石川義俊撰文

君諱崇義、日下部其姓、海江田某氏、字景仁、称連、別

号訥齋、薩州鹿兒島藩士族伊三治君諱信明子、母野元氏、

君以蔭班扈從隊、為造士館句読師、後為江戸副留守、以

直道忤於時、遂去寓於常奧之間、列侯往々聘之、皆辭不

就、天保中營太田郷校、欲以君為幹事、君辞去某聞不願

仕途、況齡已垂七旬、不能勝其任、固以請焉、有司云、

子之耆宿篤学、人之所仰、故欲使優遊文場、後進有所矜

式、非必就仕途之謂也、君翻然云、始不就仕途者、聊答

故君之恩也、今流寓此地者、既三十余年、偶值明君振起

政教之時、以殊礼待之、亦既至矣、義不得固辭、誓心其

命、則亦可以報積年寄身之恩也、乃起就職、服勤四年、

天保十一年庚子十月十四日病没、享年七十二、權厝於馬

場村、安政二年乙卯十一月合葬於配加志村氏之墓、君為

人沈深温雅、專潜思紫陽之学、有著書若干卷、兼好武艺、

教授之暇、以其技教子弟、受業者頗多、槍法尤其所長云、

元配山形氏先没、次配加志村氏有三男、長翼、称伊三治、

以公命為鹿兒島藩士族、次重信、称準藏、嗣鹿志村氏、

為本藩士族、次種英、称渡、嗣高橋氏、為松岡藩士族、

如其世系、具於墓誌、故不復云、銘曰、

博聞強記、学有淵源、進退踐礼、克服德言、
誓辭軒冕、綱常用存、水城之西、常磐之原、

斯安斯厝、永慰旅魂、

男翼

重信 建

種英

石川義俊撰

日下部婦人加志村氏墓

婦人諱英、父曰加志村昔行、母下山田氏、益習館幹事、

訥齋日下部君諱崇義之配也、生三子、曰翼、曰重信、曰

種英、為人貞静沈義、凡辛楚之際、処之確如焉、方甲辰

之難、晨夕憂悲、跼勉經紀家事、能使翼等不以家室為患

以効力於国家、而翼等東西奔走、遂得達其志云、安政二

年乙卯十月二日没於家、享年六十有五、葬於常磐郷神崎

寺域内、其世系具於翼所撰之拓記、銘曰、
克事厥夫、亦有此兒、時窮才見、行適事宜、
其美足述、可以銘碑、

日下部父子其他就獄

封回状

御小姓酒井阿波守

曾賀權右衛門家来医師

飯泉春堂養父

飯泉喜内

年五十四

改預

(履歷中路延年紀事ニ
詳記ス、参照スベシ)

島津又次郎家来

日下部伊三治

年四十四

年五十五

小笠原彌八郎組下田奉行支配調役出役

大沼又四郎

年四十

細川俊道ト申スモノニテ小網町名主

伊十郎

年四十四

改牢屋敷へ預ケ

二ノ丸御留主居古賀謹一郎家来

藤森恭介

年六十

牢屋敷預

藤森權右衛門組御掃除之者

岩本常介

年四十三

神田太左衛門町二丁目藏地家持

鐵之介後見彌七郎仕

源介

年五十七

林部喜太左衛門御代官所

武州葛飾郡寺島村

百姓仁平後家

浪人当時病死山本貞一郎妻

青山風關寺触下

当山修驗利益院

行阿

改預

飯泉春堂

年三十八

(全上中路カ紀事ニ
詳記、参照スベシ)

日下部裕之進

年二十四

小笠原彌八郎支配阿部十二郎家来

改屋敷預

勝野豊作悴

勝野吉之助

同家来

勝野保三郎

年六十一

豊作妻

ちか

年四十八

同人娘

ゆう

年六十三

小笠原繁三郎組御徒

柴山藏之介借地水戸殿家来

太宰清左衛門妻

せい

年二十七

同人方同居清左衛門弟

雷介

年二十四

京都町奉行岡部土佐守家来

寛承三

年二十九

牢屋敷へ預

右於石谷因幡守御役宅松平久之允立合因幡守申渡、

十月十八日

若州浪士

召捕

熊本浪士

召捕

梅田源次郎

三條殿家来

飯泉内記

淺草三軒町住居

同春堂

羽倉外記

出奔

池田大學

勝野豊作

長谷川宗右衛門

櫻住藏

(有馬新七日記参照)

自殺

梁川星巖

因州

召捕

安達志津摩

粕谷各馬飛

鷹司殿家来

召捕

小林民部大輔

藤森恭介

三九六 参考 鎌田正純日記抄

安政二年卯正月十一日、坊泊地頭職被仰付、国老島津豊後^{宝久}伝之、同月六月三日、菱刈松之助^(平カ)隆^敬へ交代発江府御邸、同七月十九日還府宅、同八月廿八日、大目附被仰付、国老末川近江^平久伝之、年三拾七歳、

三九七 参考 江田平藏日記抄

齊興公御入湯ノ為メ御帰国

安政二年卯秋 宰相様大口筋玉里へ就御下向、御建場等取馴候人無之ニ付、万端差引イタシ候様、島津石見殿ヨリ御側役名越彦太夫殿御取次ヲ以被仰付、六月比

ヨリ重富・加治木・大口・肥後境迄、度々廻勤イタシ候、就中加治木ノ儀ハ、兼テ内用向御頼入ニテ、分テ諸差図イタシ、尤御泊ニ付御膳進上ニテ、御囃子且百姓太鼓踊御視、前以御内々兵庫殿ヨリ御願、何モ手当相成居候処、御膳進上之儀何様間違候哉、不遊御受筋十一月七日大口御入前晚加治木へ相聞へ、兵庫殿ハ勿論一統当惑ニテ、彼是評議ノ上、大口へ平藏罷越、内願ノ通何廉被仰付被下候様、御内意申上具様、兵庫殿御沙汰ニ付、近習役邦永仲之進馬役兩人召列、平藏ニハ駕籠、外三人ニハ乗馬ニテ、夜四時分加治木出立、夜通シニ大口ノ様差越候処、御先番ノ御側役得能彦左衛門殿・御小納戸永江休之丞殿追々着ニテ、形行御内意相頼、御着之上伺ニ相成候処、無口能伺濟相成候由ニテ、御用部屋ヨリ端書ヲ以致承知候付、則近習役并馬役共へ右之御書付ヲ為持、加治木ノ様乗切ニテ申越、平藏ニハ跡ヨリ静ニ、翌八日朝加治木ノ様罷帰候、九日七半時栗野御立、溝辺石原御休ニテ、八半時分加治木へ被為入、御膳進上ハ勿論、御囃子百姓太鼓踊、其外万事極々上御都合ニテ、翌十日晝七時加治木御立、重富梅山別荘御休、夫ヨリ御乗船、磯御茶屋へ被為入、

玉里へ被遊 御光着候、十日噺子有之、御跡大祝ニテ
十一日致帰宅候事、

三九八 参考 在留英人退疏後取締

護國寺へ逗留為有之喚人引払ニ付、寺中為見物祈願人
ノ外、老若男女多人数立寄踏荒候由相聞へ、格別成御
寺ノ弁モ無之、右様初メツラシク遊樂ノ挙動、甚以不
調法ノ仕形、別テ如何ノ事ニテ、屹ト御取締被仰渡候
間、久米村那覇総横目相合、右寺辺へ詰居下知イタシ、
自然違犯ノ者ハ則チ捕付可被申出、尤祈願ニ事寄立寄
候者モ可有之哉、氣ヲ附致差行、縦令祈願迎モ多人数
出入不致様取締可有之候、此旨御差函ニテ候、以上、

卯十二月十五日 益城親雲上

英人伯徳令退去ノ事実ハ、前卷ニ記スルカ如シ、

〔表紙〕

齊彬公史料

安政二年

市來四郎編

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事缺掌史料（紙数三十六枚）」の記載あり〕

目録

新御所遷幸御列書

京都留守居報告

御所御造営費諸大名御手伝献納金額

蝦夷地開拓布告

三九九

新御所遷幸御列書

原田才輔書状
添フ、送ス、

○この文書は、本文第一四六号文書と重複により略す。

四〇〇 京都留守居報告（所司代へ奉呈書ノ写ナリ

ト云フ）

○この文書は、本文第一四七号文書と重複により略す。

四〇一 御所御造営費諸大名御手伝献納金額

○この文書は、本文第一四八号文書と重複により略す。

四〇二 蝦夷地開拓布告

○この文書は、本文第一四九号文書と重複により略す。

〔表紙〕

齊彬公史料

安政二年

市來四郎編

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料(紙数十九枚)」の記載あり〕

四〇三 齊彬江戸邸勤番長屋ノ制限ヲ令ス

四〇三の一

一近年異国船手当ハ勿論、万端及入価候折柄、又ハ今度〔候カ〕

稀成ル地震ニテ、芝屋敷ヲ初メ大凡ソ及大破、修復其

外莫大ノ入価差見得、当惑ノ至候、右ニ付テハ、出銀

等不申付候テハ難相成時節ニ候ヘ共、近年一同及困窮

候折柄、出銀之儀〔從來風火災等非常ノ節ハ、御国中一般毎戸口ニ課出スルヲ出銀ト通唱ス、或ハ知行高二課スルアリ、之ヲ重出来ト云フ〕一切不申付候間、弥節儉ヲ守リ、士道厳重

ニ心得候様、分テ可相達候、

一江戸長屋向、近年ハ自然ト广大ニ相成リ、各御家老・番頭等ノ重役

ヲ初メ手広ニ住居候儀、第一儉約ノ為メ不可然候間、〔節儉カ〕

以後何役ハ何間、何人賦〔後葉ニ其職制ヲ記ス〕ハ何程ト申ス儀、長

屋ノ軒数相極メ候様、吟味第一ニ存候、定府ノ儀ハ家

内ノ者モ有之候間、一樣ニハ難相成儀ニ可有之候ヘ共、

是又大概ノ定相立候様吟味可致候、

一家老・用人以上交代ノ節ノ為メ、西向屋敷〔芝藩邸ノ西隣ニ本邸ノ内へ取建、西向屋敷ト云フ〕

ヘ長屋有之候ヘ共、以来上屋敷〔通唱〕内ヘ取建、西向屋

敷ヘハ家老・用人ノ長屋不拵様可取計候、

一近年殊ノ外物入打続候上、此後如何様臨時ノ儀到来モ

難計候間、弥無用ノ費無之様可心掛候、当時連モ格外

ノ儉約ハ相用候事ナカラ、他家ヘ競候ヘハ、十分トモ

難申訳モ有之哉ニ被存候間、膳所向〔膳所向トハ朝昼暮ノ入御膳部モ減省ヲ云フ〕

用ヲ初メ、万端心付候儀ハ、其向々ヨリ為申出候テ、

節儉ノ道行届候様吟味専一ニ存候、右ニ付存寄有之者

ハ、無遠慮存寄書〔言路洞開〕差出候様、能々可申渡候、

右ノ通御書取ヲ以テ被 仰出、誠ニ以難有 御趣意ノ

御事候条、一統謹テ奉承知、屹度御趣意行届候様誠実

ニ可心掛旨、於江戸申渡相成候段申来候条、此旨向々

ヘ不洩様可致通達候、

十二月乙卯十二日

豊後

下總久
徵

西向邸ニ御家老・番頭・用人交代長屋ト唱フルアリ、新古交代ノ節、古役出立帰国迄ノ間、新役居住スル長屋ヲ云フ、其構造可也立派ナルモノナリキ、

四〇三^二 役職ノ等級ニ依リ給与ノ多少アリ、左ノ如シ、

御城代兼御家老

六十人賦

一人分一ヶ月ニ金二歩米一斗五升宛ナリ

役高二千石

持高ノ多少ニ関セス

御家老

五十人賦

役高千石

持高三千石以上ノ者ハ役高下サレス、

御側詰

三十人賦

若年寄

役高三百石

持高万石以上ノ者卅五人賦

大目付

廿五人賦

役高二百石

大番頭

廿三人賦

役高百九十石

寺社奉行

廿三人賦

御勘定奉行

役高同上

御小姓与番頭

廿二人賦

役高百八十石

ラセラレシ
コトモアリ

当番頭

廿二人賦

役高百八十石

御側御用人

十八人賦

役高百四十石

御用人表御勝手方

全

全

町奉行

十七人賦

役高九十石

御側役

十五人賦

役高九十石

江戸・京都・大坂御留守居

十五人賦

役高千五百石

御軍役奉行

十四人賦

千五百石ノ納額時
価ヲ以テ給与ス

御細工奉行
屋久島奉行
宗門改役
御鳥見頭
御鷹匠頭
御同朋頭
御茶道頭
御記録方添役
御作事奉行見習
物奉行見習
御馬預見習
以上、六人賦
唐船改役
寺社方取次
御勘定方小頭
御菜園奉行
御庭奉行
尾畔奉行
磯奉行
玉里奉行

中村奉行
御膳所頭
御数寄屋頭
奥医師
以上、五人賦
表方御代官
帖佐与御代官
御台所頭
御春屋役
奥御小姓
御近習番
表御小姓
御裁許掛見習
山奉行見習
郡奉行見習
御小姓
表御同朋
御記録方見習
御右筆見習
以上、四人賦

助教

御歴者〔廢カ〕

御鷹匠頭見習

奥御茶道小坊主

御役人

中小姓

横目

下目付等都テ御目見ノ者

以上、三人賦

右御役米ノ多少アリ、略ス、又役場ニ依リ近代廢シタルモアリ、

四〇四 松平慶永公ノ齊彬公行狀記

松平齊彬卿、号順聖公、朝廷ヨリ官幣社ニ列セラレ

タル照國社ノ祭神ナリ、即チ天璋院殿ノ御父ナリ天璋院殿ハ

近衛忠顯ノ御養女、家定公ノ御台所ナリ、実ニ大名第一番ノ御方ニテ、水戸烈

公・鍋島閑臈・山内容堂ナトノ尤モ及フ所ニアラス、

幕府ヲ助ケ玉ヒ、〔重〕公武ノ御和親ニ専ラ尽力セラレ、

其他外国ノ海陸軍・々艦・鉄砲等モ、〔脱カ〕非常ノ御功勞ア

ルコトハ申スマテモナク、最モ御懇意ニシテ、師友ト

仰キ親密ノ交ヲナセリ、或ル時卿ノ言ハル、ニハ、私

ハ随分儉約モ仕リ候ヘトモ、トカク千円以上〔脱カ〕〔或ハ万円

以上〕ノ如キハ、其有益ニナルヘキ入費故、毫モ惜ム

念ハ更ニ之レナク候、十円以下二三百疋位ハ、格別益

ニモナラス、夫故惜ム念アリトノ話ナリ、公ノ胆力

盛ナルコト、此ノ一斑ヲ見テモ知ルヲ得ヘシ、

是モ亦齊彬卿ノ殿中ニ於テ余ニ御話シアリタルコトナ

リ、諸藩ニ莫大ナル金ヲ費シ、物産ヲ起スカ如キハ誠

ニ結構ナレトモ、始終ヲ考ヘサレハ、大ナル益ヲ得ル

ノ反对ニシテ、人民是カ為メニ困苦スルコトヲ生セリ、

私モ御恥シキコトナカラ、大ニ失敗ヲ来タセリ、之レ

ハ薩摩〔文カ〕ダケ布ノ一件〔鹿兒島武村ニ織物所アリナリ、西洋ヨ

リ機織器械ヲ、二台彼ニ注文シテ取寄セタリ、最モ高

価ノモノニシテ、一日二十反ツ、織レル器械一台アリ、

又百反ツ、織レル器械一台アリ、一日十反、十日ノ百

反、三十日ノ三百反、一日百反ナレハ、十日ノ千反、

三十日ノ三千反ナリ、私ハ大ニ喜ヒテ、早速工場ヲ設

ケ、工夫男女ヲ雇ヒ、工事ヲ奨励セリ、然ルニ四五ヶ

月立テハ、器械ニテ織レル反物ハ一年中ノモノ不殘終

リタリ、其上丈布幅広ノ反ヲ云フヲ織レル糸、薩摩ニテハ毫モ

ナク絶ヘタリ、是マテ職業トスル男女ハ糊口ニ差支ヘ、甚タ困難セリト、西洋ニテハ職業トスル人ニハ、各其産業ニ就キ、其上ニテ便利法ヲ用ユルカ故便利ナレトモ、日本ニテハ是等ノ便利法ヲ用ユルト、職人ノ空手スル者多ク出来テ、却テ失敗ノ基トナリ、物産ヲ起スニモ篤ト考ヘサレハ、容易ニ執行シ難シト咄サレタリ、日本ニテ西洋学大ニ開ケ、軍艦・鉄砲・訓練等盛ンニ行ハレシ原因ハ、水戸烈公頻ニ国事ヲ憂ヘサセラレ、米利堅人渡来前ヨリ頻リニ鹿狩等ニ托セラレ、軍訓練ヲナサレタリ尤目本流、其後領内寺院ノ鐘ヲ残ラス取揚ケラレ、鑄造シ玉フ大砲数百アリ、固ヨリ西洋風ニテハナケレトモ、日本風トモ亦違ヘリ、朝日丸軍艦ヲ造ラレタリ、齊彬卿モ軍艦昇平丸ヲ始メテ造ラレ、其他大砲西洋未用ノ品々、巨費ヲ以テ製造セラレタリ、今ノマグネットナルモノハ、日本ニ於テ造ラレ、ハ脱カ齊彬卿カ嚆矢ナリ、之ニ次クニ閑史卿モ、佐賀ニ於テ頻リニ調練大砲ヲ製セラル、反射炉ノ如キハ、鍋島ヲ以テ嚆矢トセリ、水戸・薩摩・肥前ノ三国カ、軍備・大砲其外ノ西洋品ニ付テハ権輿ト云フヘシ、

齊彬卿ハ天璋院殿ノ御実父ニシテ、余ハ最モ師父ト仰キ親密ノ交ヲナセリ、卿ハ賢明ノ主ニシテ、公武ノ間ニ立タレ平和ヲ御尽力ナサレ、阿部伊勢守ニモ御政事ノ儀ニツキ専ラ御注意モ多ク、水戸烈公ニモ御交リ相成り、非凡ノ御方ニテ、大名中第一等ノ人ナリ、天璋院殿未タ島津家ニ入ラセラレ候比、余齊彬卿ノ屋敷ニ参リ、御対面申上ケタリ、其後公儀御縁祖天璋院殿ノ事ニツキ、齊彬卿ハ余ニ脱カ依頼セラル、コトニヨリテ、阿部伊勢守親ニ毎々照会シ、我祖母松榮院ヨリモ、公儀ニ願ハレ候等ノ事モアリ、余カ齊彬卿ニ聞クニ、貴娘ノ御心ザシハ如何ニト問ヘリ、卿ノ答ニ、中々我々如キモノ、及フ所ニアラス、忍耐力アリテ、幼年ヨリイマタ怒ノ色ヲ見タルコトモナク、不平ノ様子モナシ、腹中ハ大キナルモノト見ユ、軽タンキ事ナク、温和ニ見ヘテ、人ニ応接スルコトモ誠ニ上手ナリ、將軍家ノ御台所ニハ適當ナリ、之ハ私カ請合申スト云ヘリ、卿ノ賢明ニテ斯ク申サル、程ノ御方ユヘ、実ニ徳川家ニトリテハ幸福ト云ヘリ、

以上慶永公紀事ニ就テ、關東集筆松平春岳全集にて改訂、（題）、明治二十年四月、府下關口町目白臺ノ邸ニ拜晤、刻ヲ移シ、専ラ先公ノ御事

蹟ヲ質問ス、慶永公喜シテ答弁シ玉フ、依テ之ヲ筆記シテ、慶永公對話ト名ツケテ参考ニ供ス、

四〇五 英・佛人清国北京ニ迫リタル事実琉球人

届書ニ対シ齊彬公茶話

嘉永五年ノ夏、琉球国ヨリ清国ノ事情御届書毎年琉球渡唐船情御届ノ内ニ、英・佛両国連衝シテ清国ニ迫リ、遂ニ北京城ヲ攻落シ、清帝ハ遠ク滿州地方ニ避遁シ、後チ城下ノ盟ヲナシタル顛末ヲ、琉球人ヨリノ御届書御覽、御歎息アラセラレ、清国此ノ様情弱ナリトハ思ハサリキ、真ニ案外ナル弱国ナリ、彼ノ大国ニ知慮アル人、或ハ忠臣義士モナキモノカ、先年阿片ノ乱ヨリシテ数年ヲ過キタルニ、政事ヲ立テ直スコトモナク、内ニハ長髪ノ賊起リ、外ニハ外国迫リ、帝王ハ遠ク逃ケ出スナト、実ニ恥ヲ知ラサルモ甚シキナリ、最早病モ肺肝ニ入りタリ、療治ノ仕様ハアルマシ、殊ニ国ヲ割キ、和ヲ乞フノ事ニ至リタレハ、救フニ術ナシ、彼ノ国斯クナリタル上ハ、日本モ隣国ナレハ心ヲ用フル時ナリ、兎角明末ノ輩勢ヲ得ルニ至ルヘシ、長髪賊ノ中ニハ忠義ノモノアリテ、明ノ血統ヲ回復セント思フモノアルヘシ、必ス勢ヲ得ルニ至ルヘ

シ、英・佛等ノ外国モ清国ニ属地ヲ得タル上ハ、日本ニモ必ス彼等カ手ヲ掛ルハ疑ヒナシ、其心得ニテ手当ヲ敵ニシ、清国ノ如キ恥ヲ世界ニ曝ラサル様セネハナラヌ時ナリ、手当モ出掛ケテ制スル程ノ勢ニナラネハ、守ルコトモ十分ニ行届カヌモノナリ、今ヨリ出テ、制スルノ見込ヲ立テ、手当ヲナシナハ、漸ク守調フヘシ、又出掛クルノ見込ヲ立テタル上ハ、是非出掛ケテ、福州一ヶ所ニテモ此方ノ手ニ入ル、トキハ、其勢万国ニ響キテ、内外大ニ日本ノ益トナルヘシ、其時ハ日本ノ人氣奮ヒ立チ、外国モ妄リニ手差ハナルマシ、早ク福州及ヒ臺灣・朝鮮ヲ取ルハ、何ヨリ日本ノ強ミナルヘシ、之レ海岸防禦第一ノ良策ナリ、清国ハ日本ト違ヒ、誰ニテモ勢ノ強キモノ天子トナリ、国人服従スル習俗ノ国風ナリ、英・佛ハ数万里ノ海上ヲ越シ来リテ軍ヲナシ、遂ニハ彼ノ領地トナスノ見込ナルヘシ、然ルトキハ日本ノ憂之レヨリ大ナルハナシ、依テ此方ハ其用心ヲナシ、福州辺ニテモ速ク手ニ入ル、ヲ第一ト思フ、又清国モ早ク政事ヲ改革シ、軍備ヲ整ヘ、日本ト一致スルトキハ、英・佛モ恐ル、ニ足ラスト雖モ、清国ハ日本ヲ見ルコト属国ノ如ク思フカ故、トテモ日本ト一致ハ覺束ナシ、清国ハ一体高慢ニシ

テ、國ノ広キヲ自慢シ、我ヨリ上ナシト云フ様ナル風俗ナレハ、日本ト心ヲ合セルコトナトハ、思ヒヨラサルコトナルヘシ、依リテ助クルニ道ナシ、此ノ方ヨリ早く手ヲ入ル、ヲ上策トナストノ御言ナリシトソ
侍医川畑魯水ヘ
御親話 又平川
アラセラレシトナム
玄齊ヘモ同様ノ御話

又或ル時ノ御話ニ、明末ノ輩ヲ助ケ、或ハ臺灣及ヒ朝鮮福州等ヲ早く日本ノ属地トナスハ、外国ノ患ヲ防クノ第一策ナラン、此二三ヶ所ヲ取ルニハ、三ヶ国^{三ヶ国トハ御領内中ノコトナル}シノ兵ニテ十分ノコトナリ、然シ軍艦ナクテハ叶ハサルナリト、御笑譚ナサレタリシトソ、此御話ハ、當時御胸中ニ溢レタル御話ナラン、然レトモ誰レモ之ヲ曉ラス、一ト通り聞キ流シタルモノナリシト、今ニシテ清國ノ形勢、或ハ出掛ケテ制スル程ノ勢ナケレハ、守禦調ハサル云々ノ御言、実ニ御卓見ト云フヘシ、又臺灣・朝鮮・福州等ヲ早く日本ノ所屬トナス云々ノ御言、是又今ニシテ見ルトキハ、実ニ感服ノ至リナリ、又三ヶ国一手ノ兵ヲ以テ云々ノ御言モ、御戯レノ如クニ聞ユレト、果シテ其尊慮モアラセラレシナラム、又臺灣・福州等ニ御手ヲ付ケラル、御真意ナリシハ、安政四年丁巳ノ夏、中山王ヘ御密命數ヶ条ノ内ニ、臺灣ノ内ニ渡唐船往來ノ碇泊場ヲ

設クヘシ、或ハ福州琉球館地取弘メ云々等ノ趣ヲ以テ考フレハ、果シテ遠大ノ御深慮アラセラレタルヲ知ルニ足レリ、北海道開墾ノ御目論見モ、北門ノ鎖鑰魯國ノ憂アラシキコトヲ慮リ玉ヒ、天下ニ率先シテ大小諸侯ヲシテ誘導セラル、ノ尊慮ヲ以テ考フルニ、御卓慮感スルニ余リアリ、今十余年モ御存生アランニハ、如何計記スヘキ御事蹟アルヤ知ルヘカラス、僅々七八ヶ年ノ御知政ニモ、如此ノ御言行御事蹟アリ、嗚呼、

四〇六 西郷隆盛カ諫言ニ対シ齊彬公ノ御弁解

西郷隆盛ハ初メ郡方ノ筆吏ナリシカ、奮然志ヲ立テムト中小姓役ニ転シ、江戸邸ニ在勤シタルニ、御眷顧ヲ蒙リ御庭方役ニ転セラレ、内外ノ御密用命セラレタルハ、皆人ノ知ルカ如シ御庭方ノ職務ハ、卑官ナリト雖モ、草木鳥獸ノ取扱ヒ或ハ御庭向キノ御用ヲ親シク拜聞スルコトヲ得、或ル時御庭口ヨリ拜謁シテ言上スルニ、

御前ニハオランダ好洋癖ノ御癖アラセラルト、皆人評判仕リ、特ニ他藩水戸人ナトモ奉評、私ニモ其通奉存旨言上セシニ、御晒被遊、手前ニモ左様ニ思フ乎、水戸人ナトカ評判スルハ苦シカラス、遠カラス思ヒ当ル世トナルヘシ、因テ考ノ程申シ聞クヘシ、今ノ世態ハ危急存亡

ノ秋ナルハ存ノ通ナリ、二百年來至治泰平ノ弊ヨリシテ天子ハ在ルカ無キカノ如ク、將軍家ハ華美驕奢ニ長シ、藩上ノ所為多ク

朝廷ヲ輕ンシ奉リ、下諸大名ヲ輕蔑シ、武備ヲ怠リ、人民ヲ困メ、阿媚諂諛ノ人多ク在職シ、威權ヲ振ヒ、諸大名モ從テ驕侈安佚ヲ事トシ、國中ノ疲弊極リタルニ際シ、外国ハ日本武備ノ衰ヘタルヲ見透シ、迫リ來リテ遂ニ今日ノ世態トハ成レリ、古人ノ言ニ、彼ヲ知ルヲ以テ用兵ノ要トス、因テ彼ノ長スル処ヲ取り、我カ短欠ヲ補フハ治乱政事ノ要ナリ、是レ余カ政務ノ目的ナリ、支那モ日本ヨリ言ヘハ異國ナリ、英・佛・米國モ亦同シク異國ナリ、古ヨリ支那ノ礼学文物ヲ採リ、我國政体ノ目的トシ、今日ニ開ケタルニアラスヤ、仏法モ其宜シキヲ採リテ、政事ニ加ヘタルニアラスヤ、又西洋人カ發明シタル大小砲モ、今ハ日本武備ノ要トセシニアラスヤ、其外医法・天文モ西洋ノ法ヲ採ルニアラスヤ、支那ニ於テモ、天文學ナトハ西洋ノ法ヲ採リ開ケタルニアラスヤ、支那モ近代阿片ノ乱ヨリシテ、内外ノ混雜トナリ、真ニ危急存亡ニ臨メルモ時勢ヲ弁セス、驕慢ノ国風ヨリシテ、土地モ割キ与ヘタル姿ナリ上海・香港ノ地ヲ割、必竟彼ヲ知り己ヲ

弁ヘ、彼ノ長ヲ採リ我ノ短ヲ補フノ場ニ至ラス、今日ノ辱ヲ受クルニ立到レリ、因テ弘ク宇内ニ耳目ヲ注キ、支那・天竺・オランダ其外歐羅巴諸國何レヨリニテモ、其長スルコト、其宜シキハ悉ク取り用ヒテ、我國ノ短欠ヲ補ヒ、日本ヲシテ世界ニ冠タル國トナシ、國威ヲ輝サンヲ眼目ニ思ヘリ、中ニモ砲術・医術・航海術等ハ、元來西洋人ノ發明ニテ、世界中ニ傳播セリ、今日本ニテ和流ト唱フルハ西洋ノ古流ナリ、此業日本ニ伝リテ間モナク治世トナリ、実場ニ試ミタルハ寡シ、諸流モ皆同シク座上ノ論ニテ、流派ヲ立テタルモノナリ、西洋ニテハ絶ヘス実場ニ当リ、改製或ハ發明シタルモノニシテ、支那・日本ノ及フ処ニアラサルナリ、日本發明ノ様ナル荻野流ナトハ心得タルコトナルガ、西洋近代実験ノ術ト同日ニ語ルヘカラス、其他蒸氣船等ノ如キハ、兎角採用セスシテハ相濟マザルニアラスヤ、依テ要用ノ事ハ弘ク世界ニ求メテ、日本ノ用トスルノ見込ナリ、水戸人ナトカ其位ノ考ニテハ笑フヘキコトナリ、何ト評判スルモ苦シカラス、必ス近年心付クコトアルヘシ、國許ノ者ヘハ此ノ趣意ヲ示置ケヨ、大事ヲ為ス者ハ目前ノ譏譽ヲ願ルモノニアラスト、水ノ流ル、カ如ク御論弁アラセラレタリト、西郷

モ如此廣大無偏ナル御趣意ニハ頗ル感服シ奉レリ、後日
友人等ニ物語レリ

是安政二三年比江戸ニ
於テノ事ナリシト云フ

〔表紙〕

齊彬公史料

安政二年

市來四郎編

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事鞅掌史料（紙数三十枚）」の記載あり〕

目録

橋本左内上京事蹟記抄

長崎人某述志

徳川齊昭公ニ登宮ヲ命ス

鹽谷世弘昇平丸記

齊彬公蝦夷開墾ヲ試ミントス

齊彬公農耕ヲ奨励ス

齊彬公兵庫開港御建白書

孝明天皇御製

洋式ノ造船ヲ許ス

参考 橋本左内日記抄

参考 橋本左内西郷・樺山面晤

四〇七 橋本左内上京事蹟記抄〔安政五年〕

正月廿七日発程、二月七日京着セリ、方今ノ京状

天皇聖明英邁比年痛ク国歩ノ艱難ニ宸襟ヲ悩マセラレ、

夜ル人不知内侍所御参拜、御祈禱ノ事アリ、此般ノ事件

ニ於テモ徳川氏ノ衰頹ヲ扶ケ、幕府ノ威權ヲ興隆シ、諸

侯ト協議シ夷狄ヲ懾伏シ、和戦共ニ神州ノ汚辱ヲ受ケス、

養生ノ安堵ヲ保護シ、

神皇歴世ノ聖業ヲ墜サ、ルヲ以テ 叡念トシ玉ヒ、伝奏

東坊城幕府ニ俊嫺ノ説甚シカリキ嘗テ關東ノ威ヲ畏レテ、其奏請ノ旨趣

御違背ニ於テハ、承久ノ前轍恐ルベシ杯言上セラレシニ、

今上大ニ笑ハセ玉ヒ、当時ハ武家ニ帰シタル威權ヲ朝廷

ニ復取シ玉マハレン 叡旨ニ出ツ、今ハ皇國ノ一大事ナ

レハ人心ノ帰着ニヨツテ所置セントス、古ハ公武ノ確執

今ハ皇夷ノ争ナリ、豈ニ承久ノ覆轍ヲ踏シヤ、汝ハ必ス

心ヲ安ンスベシ、万一其事アルモ朕何ソ畏レンヤト

聖諭アリトソ、九重ノ深邃ニ在ツテ、世間ノ情状ニ通曉シ

玉ヲ事神明ノ如ク、群僚畏服セスト云フ事ナシ、青蓮院宮法親王尊融後朝彦 壯齡三十余、嘗テ南都ニ在テ狂宮ノ目アリ、英爽慷慨 至尊ニ咫尺シ、帷幄ニ參シテ 聖謨ヲ翼賛シ、議論正大一時ノ瞻望タリ、世之ヲ大塔宮ニ比ス、三條内府公温雅寬平伶俐円熟、勇邁ノ氣ニ乏シト雖モ、徹上徹下正論ノ人ナリ、蓮宮ト心ヲ合セ

聖上ヲ輔ケ、皇威ヲ伸サン事ヲ欲、其建議ノ大要ハ天下ノ形勢、此ニ至ツテ大變革ナカルベカラス、然ルニ將軍多病虚弱ニシテ、征夷ノ任ニ堪ヘス、閣老亦其人ニ非ス、此困難ノ時ニ際シ、宗室ニ撰ンテ英主ヲ立テ、三家々門及ヒ諸侯ノ英賢ヲ挙ケテ幕政ヲ輔佐シ、寛永ノ旧典ヲ復シ、將軍諸侯ヲ率ヒテ上洛シ、官民一致、君相同謀籌策ヲ合セテ膺懲ノ大典ヲ挙ケントスルニアリ、唯蓮宮ト議ノ協ハサルハ、宮ノ議ハ戰ヲ主トセサレハ因循ノ弊ヲ脱シカタキニアリ、條公ノ説ハ猥リニ戰ヲ説テ、徒ラニ暴論ヲ長スベカラザルニアリ、其端ヲ異ニスト雖モ、齊シク忠負ヲ抱ヒテ時難ヲ救フノ大義ニ任シ、帝室ノ柱石郎野ノ具胆タリ、コレニ亞テ議奏中山・久我・徳大寺・萬里小路等ノ諸卿、皇威ヲ張り国体ヲ辱メサルノ正義ヲ執リテ一時ノ撰ナリ、伝奏兩卿共奸人廣橋ハ東西觀望ノ

ミ、東坊城ハ小才アツテ從來關東ニ荷担ス、九條尚忠関白殿下蔽明大度、敎旨ヲ奉シ正論ヲ執リ、財賄ヲ却ケ、其公正紳縉ノ有志皆其下風ヲ仰キ、

今上ノ任用此人ニアリ、晩節ノ全カラサルヲ憾ム、特リ異シム、鷹司政通太閤殿下三十余年ノ執柄伶俐通曉威望具備シ、師保ノ重ニ任シ御依頼、他ニ異ナルヲ以テ可惜貪利ノ癖アツテ、先入為主路ヲ受テ關東ニ阿媚セラル、事件有リ、今般堀閣堀田備中守奏上ニ付テモ、

朝廷ハ關東ノ怯懦ニシテ国体ヲ辱メ、皇威ヲ屈スルヲ憤リ、挽回ノ正義專ラナルニ、太閤殿ニハ關東ノ議スル所一々我カ意ト符スト称セラレ、朝議正義此ニ壅滯シテ決セス、関白殿下老太閤ニ庄制セラレテ 叡慮ヲ暢達スル事能ハス、

今上大ニ逆鱗アツテ、関白殿下ニ勅諭アツテ、太閤辞表ヲ捧ケラル、ニ至リシカト、議奏ノ論弁ニヨリ事暫ク止ム、廷議紛々トシテ日ヲ曠フシ、毫モ墨使ノ要求強迫ノ急ナルヲ省スルナシ、東使大ニ其緩漫ニ苦シミ、東坊城ト謀ツテ重賄註兩殿下各一万兩 兩伝奏各五千兩ヲ行ツテ勅許ヲ促スニ至リ、漸ニシテ今一応人心折合方、三家水尾始諸侯赤心ヲ被聞召度ニヨリ、書取ヲ以テ奏問可有之旨ノ勅答ヲ下サ

レ、東使ノ心算違却スト雖モ、不得已之ヲ關東ニ急達シテ、一向ニ其報知ヲ待ツ而已ナリ、已ニシテ私計外漏、大ニ諸卿諸官ノ憤懣ヲ激シ、東使ノ拙策大ニ声聞ヲ墜シタリ、三月四日ニ至ツテ東報アリ、同五日議伝両奏堀閣ノ旅館ニ至ツテ之ヲ聞カサルニ、人心折合ノ儀關東へ至テ為御任ノ儀ニ有之、被及御請合候間、

宸襟ヲ安セラレ候様トノ御返答ナリ、此事又々 廷議ニ及ハルニ、頃日ニ至ツテ鷹太閣關東追從ノ惡評ハ常談トナリ、関白殿下又両端ヲ持セラル、ノ異聞アリ、其婿久我殿下ニ迫ツテ其心術ヲ叩クニ、優柔ノ模糊論談ハ兼日ノ剛正ニ似ス、久我ノ其自反セラレン事ヲ責望スルニ深意アツテ如此トテ、更ニ其忠告ヲ容レラレス、久我大ニ恚リ、公モ亦關東ニ阿党スト罵ラル、ニ至ル、家ニ帰ツテ時事ノ憤怒ニ堪ヘス、其明病ニ托シテ辞表ヲ捧ケタリ、是八日ノ晝ニシテ其結文ニ「報国ノ赤心金石ヨリ堅ク在込」包アリ、依之 廷説其事故アルヲ察シテ罷免ニ及ハスト雖モ、尔来滿朝両伝奏ヲ付シテ奸物トシ反目騒然タリ、関白殿下ハ東報ヲ得、請ニ任セテ惣テ關東へ委任セントノ計画ヲ以テ、先ツ正論ノ障礙ヲ掃ハンカ為メニ同六日殿下ノ内意トシ、両伝奏ヲ以テ蓮宮ノ参内ヲ沮メラ

(忠厚)

レ、七日ニ至ツテ近衛左府公上ヲ沮メ、尋テ三條公ニ及ハントスルニ、両伝奏條公ノ威敵ヲ憚ツテ内命ヲ奏セス、兎角セル間ニ條公此由ヲ聞テ、八日夜ニ入ツテ卒然参内アリテ、即今公卿一統ニ勅問ノ時ニ当ツテ三公ノ参内ヲ止メラル、ハ不審ナリト、近衛公ニモ通達セラレ参内アリ、共ニ伝奏ニ迫リテ三公タラン者関白ノ内命ニハ従ハスト詰問セラレシカ、伝奏大ニ迷惑シテ、近衛殿ニ相達セシハ手違ナリト遁辞怠状セリ、此日関白公ハ正論家ヲ遠ケ置キ、關東へノ勅報人心御晴合ノ上ハ、為御任ニ相成ルベキ趣ニ定メラレシカト、條公激論ノ騷動ニテ奏聞ナク、翌九日ニ至ツテ奏聞ニ及ハル、処、左府内府へモ協議セシカト勅問アリ、両へハ未タシト奏上ノ処、天下ノ大事三公ニ議セスシテ奏スルハ如何ニトノ

叔旨ヨリ、三公初メ諸卿参内ヲ被命処、近衛・三條ノ両公昨日ノ不平ニヨツテ不参ナリシ、鷹右府、三條丞相両公ヲ勅使トシテ被遣、漸ク参内アリ、此ヨリ條公大ニ弁論ヲ尽シ、關東ニ英主ヲ立テ、幕府ノ威信ヲ明カニシ、外夷ノ侮リヲ禦クベク、且此段ノ件モ一概ニ關東へノ御委任ハ不可然旨ヲ建議セラレ、諸卿多クハ之レニ左袒シ、徹晝ニ及ンテ散朝ナリ、同十日蓮宮モ

叡慮ニヨリ参内アツテ、關東へ

〔兵典〕

勅報ノ朝議専ラナリ、此比太閤家司小林筑前守・三國大學等主公ノ方向曖昧ヲ患ヒ、頻リニ太閤殿ニ切諫シ、蓮宮亦諷諭ヲ加ヘラレ、遂ニ和戦共ニ

叡慮奉戴アルベキニ決心セラレタレハ、今ハ関白殿ト東城坊ノミ關東ノ方人ト見エタルニ、関白殿ニハ尚固ク前議ヲ執ツテ、再度奏聞ノ勅報案ニモ尚為御任ノ文アリケレハ、滿朝不滿ヲ抱キ廷議愈險難ニ帰シ、崎・函両港ノ外ハ開港ヲ禁シ、下田ハ彼ノ不便ヲ陳スルニ任セテ鎖港タルベキニ定リ、十一日ニ至ツテ前件ヲ以テ勅報ノ文書出来之処、結尾猶「此上於關東可有御勘考様御頼被遊候事」ト云ヘル文作アル故、三公以下以テノ外不服ナル上、太閤殿大ニ立腹アツテ、如斯相成ルニ於テハ太閤ノ所存ハ別ニ關東へ可申遣ト怒ラル、ニ、関白殿ハ一段奏聞ヲ經タル事更改ノ例アル事ナシト抗議セラレ、兩殿下ノ大争論トナリテ此日ノ廷議遂ニ決セス、十二日ニ至ツテハ、八十八人ノ堂上連署ノ正論ヲ張ツテ、御返答ノ結文ヲ可被指陳旨ノ願書ヲ持テ関白殿亭ニ群參ス、殿下モ群卿ニ迫ラレ困窮ニ勘ヘス、熟考改正スベキノ温言ヲ以テ漸ク鎮撫セラレタリ、畢竟先ニ關東ヨリ奏セラル、

処ノ御答ハ、関白殿坊城ト謀ラレ如此御答アラハ、廷議不得已關東へ御委任ト可相成由ヲ、密ニ關東へ内通セラレンシ事ナリシカ、其事又關東ヨリ漏泄シテ正論家ノ耳ニ触レタル故、猶更所在困難ニ及ヒタリ、太閤殿カ東坊城ノ反覆ヲ怒ラレ、辞表ヲ出サシメラレタレトモ、関白殿ハ不及辞表トテ内覧ナクシテ返サレタリ、太閤殿愈激怒アツテ坊城ノ参内ヲ止メラレ、十七日ニ至テ其職ヲ免セラレタリ、是ヨリ朝説一変シ、勅報ノ次第相定リ、同二十日堀閣参内、決局三家始諸侯衆議ノ上可有言上ノ旨、勅答相成処、堀閣猶伺之儀有之、廿六日ニ至リ永世安全不拘国体後患無之方略、下田条約ノ外不被聞召、其上難被及辰断儀神宮神慮御伺可相成旨ノ御書附御渡有之、四月三日御暇参内ノ節、京師御警衛ノ事被仰出アツテ、同五日京地ヲ立セラレタリ、以上前記スル処、事ノ左内ニ関セサル多シト雖モ、内外不可為ノ情状ヲ略述シテ、左内之ヲ為スベキノ地トセシオ略苦心ノ在ル処ヲ示サントス、見ル人其冗長ヲ厭フコトナカレ、

四〇八 長崎人某述志

前文欠ク、故アルベシ、
其時遙ニ上座ニマシマス御三家之内、常州水戸之城主

中納言頼安卿ハ、上杉憲ヲ宥メ給ヒ、寛仁大度ノ明君ナレハ如何ニ井伊掃部頭直弼先刻ヨリ貴殿ノ申分存言ノ旨委細是ヨリ聞居タリシカ、一天下ノ政道ヲ司トリテ、大老ノ職ト申サレシカ似合ハサル比與ノ振廻ナリ、殊ニ夷國ノ者ニ天下ノ返言ナレハ、再応ノ評議一決セサレハ一席ニテ貴賤ヲ撰ハス存言ヲ申出テコソ、実ニ忠臣トモ云フベシ、貴殿一人ノ了簡ヲ以テ決断アラハ、評議ニ及フベカラス、衆議多分ニツヒテ事ヲ計フ事尤理アリ、唯大老ノ權威ヲ以テ理ヲ非ニシテノ宰判覺束ナク存申也、今此ク上杉申サル、処、尤一理アリ、掃部頭能ク聞カレヨ、日本國中神風ノ渡ラサル処ナシ、普天ノ下率土ノ浜王土ニアラサルハナシ、是草木禽獸虫魚ノ生スル処、山川海野ニ至ルマテ神恩ノ行サル処ナシ、故ニ古ノ天子神功皇后女帝ニテマシ、夷國ニ渡ラセ給ヒ、終ニ神靈ノ威徳ヲ以テ彼ヲ治メ、三韓ヲ平ケ、御無難ニシテ夷國ノ王ハ日本ノ犬ナリト号ケテ、御帰朝アリテ女帝ニハ御懷妊ナルニ依テ、筑前ノ國寶満山ノ麓粕ヤノ郡ニテ、輒ク御安産有テ其処ヲ産村ト号ス、御誕生有リシハ則應仁天皇ト申奉リテ、八幡宮ト尊敬シ奉ル御神ナリ、依テ夷國ヨリ貢ヲ獻シ奉ルナ

リ、其比迄モ夷國ノ先鋒武内ノ大臣蒲瀨シ給フ、数千歳ノ今迄夷國襲来ナシ、誠ニ動キナキ御國ナルニ依テ、筑前箱崎ハ八幡宮御誕生ノ御胞衣ヲ納メシ靈地ナルニ依テ、八幡宮ヲ勸請シ、延喜帝ヨリ宸翰ノ敵國降伏ノ御額ヲ櫻門ニカケ給フ、箱松ツツノ猶繁茂シテ万代戸ヲサ、又御代ナリシカ、遙ニ千歳ノ後弘安年中北條カ天下執権ノ頃、蒙古ヨリ数百万ノ人数、数千艘ノ軍艦ニ打乗テ、筑前ノ海浜ニ襲来シテ太宰府迄襲ハント、水城ノ関ニテ上陸セシカ、俄ニ大風雨暴烈ニシテ、数千ノ雷鳴ニテ誠ニ闇夜ノ如ク、数千艘ノ舟悉ク海底ニ沈ミ、破舟シテ百万ノ夷人溺死シテ、終ニ二三人存命セシカ、便舟ヨリ遁レ歸リテ、神國ノ尊キニ恐レテ再ヒ夷國舟日本ノ地ヘ来ラス、近代大隈秀吉匹夫ヨリ興リ給ヒテ、百戰百勝御運強ク、終ニ日本ノ総主ニ成リ給ヒ、久シキ乱世ニ困ミタル万民ヲ安堵サセ、深ク憐ミ給ヒ、終ニ天下靜謐ニ及シ、上ハ禁裏ノ衰微ヲ悲ミ、王殿宮殿ヲ再興シ給ヒ、宸襟ヲ安メ奉ラレ、其身関白太政大臣ニ昇進シ帝都ノ守護有リシカ、嗣子秀次卿ニ関白職ヲ譲リ、太閤ト成テ中華四百余州ヲ攻取リ、大明ノ王位ニ昇ラント数千ノ兵船、数十万ノ軍勢ヲ集メ、朝鮮ニ

渡海セシメ、大明ノ先手ニセント、太閤ハ肥前名護屋ニ陣城ヲ構ヘ、遙ニ指揮シテ忽王城ヲ賁落シ、王子ヲトリコニシテ日本ノ武勇ヲ大ニ輝シタリ、数年ノ籠城恙ナク蔚山ノ城中兵糧乏敷ナリ、如何トモスベキ様ナシ、是ニヨリテ日本ノ方ニ向ヒ、神力ヲ祈リシカ、不思議ヤ、数万ノ鳥飛来リ、東之方ヨリ紫雲棚引シカハ、日本ノ諸將士卒ニ至ルマテ勇氣リンノトシテ、終ニ勝利ヲ得テ天運ニ叶ハセ給フ事ハ、日本ノ威徳トヤ云ハン、此勢ニテ大明迄征伐セント、専ラ御企アリシト雖モ、年来ノ兵革治メ給ヒ、暑氣タリトモ片時モ御安堵之事ナク、御心魂ヲ傷メ給ヒシカハ、天下泰平ニ成リシ間モナク、異国ニ軍勢ヲ差向ケ、御指揮御心勞ニ御病氣発シ、御養生御叶ナク、終ニ慶長三年三月十八日六拾三歳ヲ一期トシテ、冥途黄泉ノ客トナリテ、草葉ノ露ト消給フ、依テ朝鮮ニ渡海有シ軍勢モ追々帰朝シテ、日本国中之御制定万事誰有テ背ク者ナク、太閤ノ御他界愁傷ヲ、上ハ内裏月卿雲客天下ノ諸大名、下万民ニ至ルマテ深ク歎クト雖モ、詮方ナク豊國大明神ト勅語有シナリ、東照神宮天下ノ守護トナリ給ヒシ事、偏ニ太閤ノ御仕置能キカ故ナリ、以来式百数十年來

泰平ナリシカ、猶異国船渡來ノ事ハ織田信長ノ時、九州瓊浦迄蛮国ノ「ユルテキス」ヨリ、邪道ノ者日本ノ地へ渡來シ、莫大ノ獻貢ヲ備ヘ、奇術ヲ言上シ、詰法シテ殿下始メ諸將ヲ迷ハシ、終ニ京都ニ邪教南蛮寺ヲ建立シ、始ハ匹夫下賤ノ者ニ金錢ヲ施シ引入シカ、後ニハ信長初メ王公貴人ヲ懐ケ、皆悉ク魔道ニ導キシ事数年ナリ、南蛮寺ノ守護ヲナシ給ヒテ、其体ヲ見給ヒシカハ、明白ニ邪道頭ハレタリ、是ニ依テ殿下御怒リ斜ナラス、早速南蛮寺ヲ焼払ヒ、邪法ノ賊僧悉ク追返サレ、今日織田ノ威勢ニテ伴天連切支丹ヲ以テ万民ヲ迷ハシ、榮耀榮花ハ恰モ天上人ノ西方ノ極樂界ノ樂ミモ争テカ之ニ勝ルマシ、カ、ル優美ノ安樂ナルモ、今關白殿下ノ御威徳ニ恐レヲナシ、如何ナル邪法魔道ニテモ、本朝ノ神威ニテ追返サレケル、カ、ル神美ノ国ニ出給ハスンハ、ナトカ是ヲ防ク事叶フマシ、其後ハ日本ノ政事弥改マリ、浦々島々ノ果迄堅ク制禁アリケレハ、絶テ外国ヨリ夷船襲來セシ事ナシ、我神国ニアリ乍ラ邪法ノ切支丹ヲ信仰帰依シ、眼前ノ利欲アレハ是ニ迷ヒ、人ヲ迷ハスモノナレハ匹夫下賤之者共ハ、唯有カタキ事ニ思ヒ立入シナレトモ、斯ノ如キアヤシキ

事ヲ以テ諸人ヲ迷ハスモノナレハ、匹夫下賤ノ者トモハ、唯難有事ニ思ヒ立入シナレトモ、重科ニ行ハルベキトノ御達アリ、又日本ノ海内ニ夷船見ヘル処ハ、防禦ノ手当敵重ナリシカ、海岸ノ国々浦島迄モ遠見ノ番所ヲ出シテ、常ニ目鑑ヲ以テ洋中ヲ詠メシメ以下欠文

此書下文闕失、長崎ノ人記シタルモノナリト云、

四〇九 徳川齊昭公ニ登宮ヲ命ス

十五日幕府復タ齊昭公ニ隔日登城ヲ命シ、以テ軍国ノ政ニ參セシメ、別ニ毎年米五千苞ヲ賜フ、齊昭公乃旧法ニ拘セス洋制ヲ斟酌シ、専ラ实用ニ適スルヲ旨トシ、大ニ兵制ヲ釐革セントス、其建白、論説スル所計画頗ル宏遠ニシテ、或ハ時論ト牴牾ス故ヲ以テ、建論終ニ用ヒラレ

殉難事績五千苞ヲ賜フ云々ハ明治前記ニ拠ル

四一〇 鹽谷世弘昇平丸記

昌平船薩侯所造也、安政二年春來江戸海、余以四月念九日、從其藩士井上正庸庄郎・戸塚藻徳、往觀焉、船長九丈七尺余寸、深三丈二尺余寸、寬二丈二尺余寸、旁板厚尺有余寸、木料多用松、船端以楠板覆之、其吃

水処、包以銅片内為二層、上層兩辺安礮十二位、下層三室、左右履閣、藏彈丸及凡百器械、其下可載物、火藥艙在前頭最下、外板内鉛、鉛厚一寸、板三寸、桅三、頭桅長若干尋、閉若干尺、次桅差短而小、材皆用杉、每桅分為三截、用布為篷、篷索數十條、紛如蛛糸、艙端有橫桅、長若干尋、船尾有玻璃窓、船裏時懸風橐、斜口長身、扇子口、拖于身、風輒習々集、有快蟹、懸在外、以鉄鎖上下之、合而觀之、其制如洋船、而雜以閔船樣、大者如此、其細不可得詳、看覽略遍、於是司舶伝令、舫人可四十名、応声走、轆轤以起碇、繰綱者引綱者、執舵者、登桅斗者、張篷者、建旌者、順序立弁、帆既張、進向東北、嚮在砲洲外者、倏然入洲内、船之快利、与舫人之慣熟、洵可驚異已、予於是窃有感焉、往年清之与英戰也、每合皆敗、雖有忠若裕謙、智勇若陳化成者、無所施其能、議者謂、雖由清人算失機宜、亦器械不備之所致、未雨綢繆、先賀視輓、宜及今多作戰艦以備之、及墨鄂二夷強乞互市、始許諸侯作洋艦、而薩侯為之嚆矢、可謂偉拳哉、是日同觀者數十人、皆奇賞弗措、有人私語曰、堅艦之作、自西洋始、熟習數百年、其巧固宜、我乃今仿之、無異于乳兒之学語、

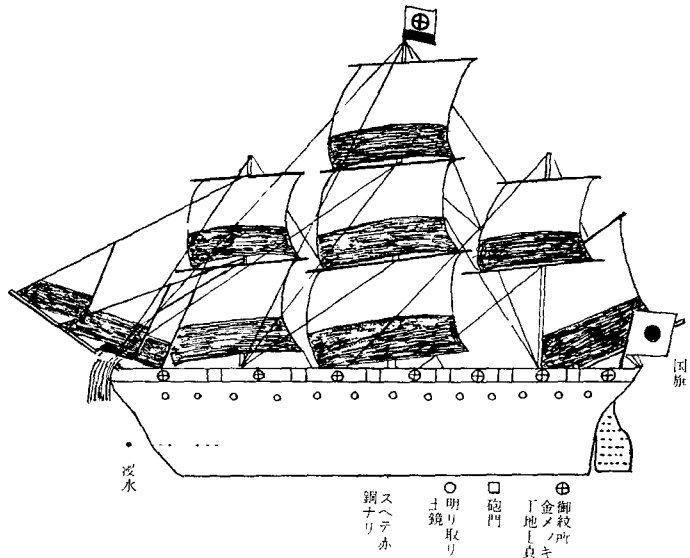
一朝變作、欲以此集事、不亦殆乎、余曰、不然、子獨不聞茅元儀言乎、曰倭善鳥銃、他州無是妙、夫鳥銃亦自西洋、而他州不及、我之能者、非以邦人敏捷乎、凡物創開為難、既創矣、仿之者爭先競出、鳥銃之伝、從天文中、當其初、大友氏獨有一口耳、未踰歲、而諸侯莫不通用、防銃以竹牌、自武田氏始、未終月、而四隣皆為之、船之在今日、亦將如之、兵固有先聲者、我旧無堅艦也、今而忽有之、諸蕃將曰、英与清争鬪四年、清人未及造一戰艦、而日本乃有幾隻、敏鈍之異、既如此、又將曰、日本素標悍、刀槍之銳、他州罕此、加之堅艦、豈易当乎、如此則好我者服、覘我者懼、是不亦不戰而屈人之兵者邪、客默然無以心、退而記焉、以俟仿造者陸統而出云、

編者曰、内部構造等倣和蘭人カ雛形ニ抛レリ、其概略ハ田原明章カ造船記ニ記セリ、這ノ雛形長輪在留甲比丹某ニ依頼シ、本國ニ於テ造船家ノ手ニ成レリト云、付スルニ凶画數十葉ヲ以テス、

(薩藩海軍史(明治百年史叢書)にて校訂)

軍艦昇平丸

安政元年寅冬成就



- 一 総長二十四間
- 一 中央幅凡六間
- 一 中央深二丈三尺

一 帆柱三本

一 帆三段

一 大砲十二挺 二十四ポンド六挺
十八ポンド六挺

左右六挺ツ、

一 自在砲六挺 二ポンド

鹽谷カ文中記ス処長短ノ差アリ、彼ハ口授ヲ写シタル

モノ故、語謬アリシナラム、

四一 齊彬公蝦夷開墾ヲ試ミントス

公嘗テ海國圖誌ヲ讀ミ、魯國ベールトル帝カ世界ニ一帝タ
ラント欲スルノ志アリト云フニ至リ以為ク、我國ノ憂其
此ニ如ランカ、夫蝦夷ハ魯西亜ト隣タリ、魯若シ志ヲ得
ハ必ス先ツ蝦夷ヲ略シ、以テ根拠ト為ント、因テ蝦夷ヲ
開墾シ人民ヲ移住セシムルノ志アリ、又嘗テ經曆誌ヲ読
ミ、蝦夷ノ地物産多キヲ聞キ、益々蝦夷ヲ開カント欲シ、
是月島津登久等ニ命シテ蝦夷ノ地図ヲ製シ、及ヒ物産ノ
品目多寡ヲ詳細録上セシム(第一卷ニ在開墾云々参考)

四二 齊彬公農耕ヲ奨励ス

八月公有司ニ謂テ曰ク、農ハ國ノ本ナリ、本ヲ固スルハ

農ヲ務ルニアリ、農ヲ務ムルハ先ツ農具ヲ作ラサルベカ

ラスト、因テ命シテ盛ニ農具ヲ作ラシム、初メ我藩良鉄

ヲ得ル少シ、常ニ之ヲ他邦ヨリ輸入ス、公以為ク、我國自

ラ鉄鋳ヲ産スルアリ、人智未タ開ケサルヲ以テ良鉄ヲ得

ル能ハサルノミト、是ニ於テ有司ニ命シテ熔鋳製鉄爐名「ホー

グ、オーヘヲ建設シ、良鉄ヲ製シ以テ農具ヲ作ラシム、

四三 齊彬公兵庫開港御建白書中山日記

安政二年卯年兵庫開港ニ当リ、世論之ヲ非トシ、若干ノ建

白書アリタルヨシナリ、今逐編一一ヲ掲載スベシ、

一 近來何トナク街道ノ説承候得ハ、兵庫開港可被仰出哉

ノ趣、右ハ一昨(嘉永六年)丑年十月夷人共一時切迫ノ事情申立候

ニ付、於 朝廷御好ハ不被為在候得共不被為得止、外

國人共何ト申立候共其段申論相断候社、則我國ヲ重シ

シ、信ヲ外国ヘ示スノ偽ナキ儀ニテ、開港不可然ノ一

条ニ候、

一 有文事ハ必有武備ノ話云、治ニ乱ヲ不可忘誠言漢土西

洋姑置、我 皇國中ニテスラ干戈ヲ動シ、互ニ蝸牛ノ

争ヲ生シ候、先蹤歴然和ハ戦ノ始、戦ハ和ノ基ト覚悟、

一日モ油断ハ不仕候古訓ニ候ハスヤ、然ルヲ独旧轍ヲ

墨守、自然ノ大勢ニ戻リ候杯ト申唱候者モ有之哉ニ承
候得共、譬ハ祖先ノ遺訓ニイタセ、家ノ盛衰時勢ニ隨
ヒ、遺訓ヲ守レハ家壞レ、不守ハ家興ルヲ、徒ニ遺訓
ヲ守リ家ヲ壞ル、子孫不幸不過之、仮令遺訓ニハ背ク
共、家ヲ興スハ守ルニ勝リ候、必竟義ニ進ミ、不義ヲ
去リ、得ヲ取リ、失ヲ捨ルノ要語ニテ、兵庫開港ハ御
国体ニ取リ十分御衰弱ノ基ヲ開候ニ、旧轍墨守不可然
トハ申難シ、是遺訓ヲ守リ家ノ興ルヲ、我ヨリ背テ壞
ルニ均シ、開港不可然ノ二条ニ候、

一 一旦取結候条約ハ、遂ケ行不申テハ難相叶哉ニモ承リ
候得共、既ニ一昨丑年勅許被仰出候上ハ、和親ノ道相
立、外夷御取扱不可過之、然ルヲ今日ニ至リ外国人共
如何ニ申立候共、彼ノ望ニ任セ、彼ノ利ヲ營ミ候タメ、
於要地開港仕候共^{音也}神州ノ人心折合申間敷、人心折合不
申候テハ、諸物価愈沸騰、万民塗炭ニ苦ミ、天下ノ大
勢ニ相戻リ、忽乱ノ基ニテ、最兵庫開港不可然ノ三条
ニ候、

一 攝海ハ枢要ノ地、普天率土王土ト申内、大ニシテ論ス
レハ皇国ノ咽喉、小ニシテ申セハ人モ同様、譬ハ親ノ
病ヲ護ルニ腹中元氣有テモ、咽喉ニ煩ヒ有之候ハハ藥

食モ不食、其病ヲモ皇国ノ咽喉ニ求メテ、病ヲ醸スノ
仕方、諸国輻湊幕府ヲ始メ、大小侯伯ノ勝手向都テ兵
庫・大坂兩地ノ豪商承リ、西國ハ固ヨリ中國・四國・
南海・北陸共船路自在ノ要地ニテ、參勤交代ノ用途普
融通弁達、第一帝都ノ四方皆山郡要害ノ地ニハ候ヘト
モ、運送万事自由難成、多クハ攝海ヨリ弁ヲ執リ輸入
候故重立候御用弁、隨テ京都四方遠近住居ノ者、余沢
ヲ蒙リ生計仕候、其外近江・丹波・泉州ハ人馬ノ力ヲ
以輸入・輸出共攝海ヘ十カ一ニ不及、然ハ王城御守衛
專要ノ地、必定開港不可然ノ四条ニ候、

一 古今ノ變革ニ依リ、海外逐日相開ケ、和親交通互ニ各
国相結候得ハ、於皇国ニ御取結被遊候御趣意ニ可有之、
乍去永世不易ノ御良策共ハ乍憚不奉存候、然ハ其規則
ヲ立、万一和親相壞レ候節ハ、必平生鼓舞仕置候士氣
一時ニ振ヒ、防禦ノ策一日モ不可忘事申迄モ無之、其
時ニ當リ彼ハ要地ニ屯集罷在、水陸自由ニ帝都ニ迫リ
候節、勤王ノ諸藩迂遠ノ山路ヲ經上京ノ隙ニ、彼ニ被
先、運送ノ要地ヲ被断、其節千悔無詮次第、尤兼テ諸
藩ヨリ御警衛等ハ立置候得共、充実ノ姿共不奉伺候、
猶又諸侯ハ自國ヲ守リ、夫々手當仕居候得共、平日帝

都ノミ御守衛申上候儀可難届、然ハ期ニ臨ミ競テ上京仕候段、大迂遠ノ拙策皇国ノ御浮沈ニ相拘リ候次第、開港不可然ノ五条ニ候以下欠損、

四一四 孝明天皇御製

皆人の心のかきりつくしてし

後にてたのめ伊勢の神風

朝な夕な民やすかれと思ふみの

心にかゝることくにの船

夷しらよ舟こきもとせ伊勢の海

神の御国と知りてあるかも

あちきなやあちきなや葦原の

たのむかひなき武藏野のはら

此ノ御製ハ嘉永六年癸丑冬比ノ御詠ナリトテ、京都在勤原田才輔ガ御手許ニ奉呈セシモノナリ、公御拝吟聖慮ヲ惱シ玉フヲ感歎セラレシト云、○原田ナルモノハ近衛家御簾中郁姫君附従ノ針医ナリ、国事上機密ノ事ニモ我公ト同殿ノ間ニ在リテ、カヲ尽シタル人ナリキ、其事蹟枚挙ニ遑アラズ、元来櫻島郷士ニテ針医ヲ学ヒ、郁姫君附従医トナリテ、京都在住近衛家下邸櫻木町ノ邸ニ常住セリ、

四一五 洋式ノ造船ヲ許スノ達書〔安政元年正月〕

大砲大船ノ類、近来西洋諸国ニ於テ致発明弁利ノ品モ有之由ニ付、船砲共ニ製造方等、於西洋之法ヲ御用ヒ有之事候ハ、元来砲術之儀ハ、蛮国伝来ノ品ニ候処、追々研究致シ、当時夫々流儀ヲモ相立候得共、西洋新規ノ業ニ至リテハ、未タ相開サルカ、〔發脱カ〕筒銘・貫数・玉藥其外ノ器械ニ至迄、蛮語其俣ニ相用ヒ候類不少、打方調練等ノ節モ、蛮語ノ相詞ヲ以テ進退駈引致、蛮夷ノ挙動ニ倣ヒ候類モ有之哉ニ相聞候、此度砲術習練ノ筋被仰出モ有之、追々熟達ノ者モ相増シ、世上広ク行ハルベキ儀ニ付、此節ヨリ蛮語ノ分都テ国語ニ訳シ相唱、若シ難訳儀ハ別ニ唱呼相立、蛮夷ノ挙動ニ不押移様心掛修業可致候、且亦大船製造ノ儀ハ、猶又新規ノ事候得ハ、是以テ唱呼ニ其心得可有之候、畢竟彼方ノ利器要術ヲ取り、此方ノ武備ニ相用ヒ候事ニ付、船砲其外要用ノ器械蛮製相用候儀ハ、聊不苦候得共、万一新規ヲ好ミ、〔奇カ〕猥リニ蛮語ヲ唱ヒ、夷風ニ倣ヒ候様成行キ候テハ、

御国威ニモ相拘リ、不容易事候条、心得違無之様可被

致候、右之趣万石以下其外へ可被達候、

〔十二月の誤カ、慶永六年十一月二日付老中達〕

十二月 日

別紙之通從 公義被 仰渡候、向々へ不洩様可致通達候、

〔安政元年正月〕
正月 日

御家老座印

〔大日本古文書(幕末外國關係文書)なごびに關藩史料稿本(東大史料編纂所所蔵)にて校訂〕

四一六 参考 橋本左内日記抄〔安政三年〕

五月朔日、

密雲濛々不堪鬱、朝原書校読、午后孟子加注、八時過

秋田参リ、万力ノ事・写料ノ事・原書齋藤へ返却ノ事、

福山ノ事・水府ノ事等談ス、七時帰宅、又孟子加注、

巳之介〔藤前家江戸中屋敷〕靈邸へ遣ス、通鑑五冊七八至八二 借来ル、夕刻書經、

油屋へ代料遣ス、原田へ遣ス状認置、

二日、朝曇天稍向霽、朝原書校読、入浴、原田へ内状遣

ス、西宮へモ同断、西宮ヨリ返書参ル、昼時ヨリ孟子

加注、高須来ル、金澤ノ話、原田来ル、金澤ノ手次、

廿二日杉浦平藏・前田罷越候由、前方受ケ宜候由、兩

日有テ参リ候処、播州聞込トハ逐々相違有之候ト被申

候咄、無程落着ニ可相成ト申咄、其後生方親族吟味ノ

咄、家内帰宅ノ上泣候由、近藤十藏ノ咄、大鹽平八郎ノ

咄、響田市尹ノ咄、夜市村来話、九半過帰ル、

三日、曇天、陰寒、朝飛脚立、書状認ム、宿状一通、桑

山へ水府ノ一件、吉田へ、坪井へ一通ツ、午后仮寝

一時、昼后孟子課並加注、學制彙集校読、

四日朝、曇天、終日不雨、朝原書校読、飛脚着、宿状来

ル、琢磨逐々快キ由申来ル、本多・中根・笠原来状、

中根ヨリ純墓ノ内事申来、祝山朝ヨリ他出、昼后孟子

加注、夕刻祝山帰来、夜談話、孟子加注、祝山岡田屋

へ立寄来ル、

端午、朝稍向晴、暖大ニ生ス、朝校合、孟子加注、千種

来、小魚ヲ買、望遠鏡ヲ翫フ、午后孟子加注、眞下ヲ

伊藤・原田へ遣ス、夕刻又孟子、夜書經、今日八時ヨ

リ八半前迄仮寝、

六日、朝曇天、朝原書校読、昼前ヨリ雨降、昼時ヨリ孟

子加注、夜尚書・孟子、

七日、朝稍向晴天氣不冷、原書校読、孟子加注、午前金

田市兵衛来ル、高鐵ヨリ菓子箱到来、午后入浴、松田

東吉郎来、古本大學相戻ス、八時山城屋へ行キ書働ヲ

払ヒ、且武曹大全ヲ購フ、夕刻山城屋ヨリ人来ル、林

左衛門部屋ヨリ駕取リニ来ル、書付受取相渡ス、

八日、朝孟子課、原書校読、山佐ヨリ汪氏大全来ル、結髮、早昼鹽谷へ罷越、質問二道、學制彙集・心得書・學制議等返ス、八時帰宅、孟子加註、山佐ヨリ三語便覽・廣二篇・三篇・五經一部受取、夜書經典讀己命論、書狀認ム、昼詩史写二枚、

九日、朝稍霽色、昼前看書致シ、五半時ヨリ鹽谷へ罷越申候、學制儀相却ス、課業次第借リ參ル、留守中加藤道菴来ル、午後松田東吉来ル、古本大學ヲ借ル、仮寝、小澤丈太夫来ル、荒川ヨリ使来ル、書狀認、宿狀一通、中參へ一通、佐々木・市川・本多へ一通ツ、夕書終、夜中大雨、雨前黒雲風甚シ、

十日、朝稍霽色、朝六時過起碇、孟子、原書校読、孟子加註、昼后少々覚感冒、仮寝、夕刻ヨリ風邪、夜廢業、十一日、朝孟子、夜来大雨、寒甚、袂衣未覚暖、拔萃數種、四ツ時過松田ヨリ胡瓜到来、四過孟子加註、午后孟子加註、九半時菊池為来、結罰ノ話、刑ヲ拒ミ候話、同謀ヲ怨ミ候話、四月廿五日当朝御用、三百石被召上五百石被下置上ノ寄合藤田主膳、百石被召上四百石被下置上ノ寄合近藤儀太夫、二百石被召上五百石被下隠居小山小四郎、半地隠居慎罷在候様大森彌三左衛門弟

八五郎、御預ケ中ノ寄合友部八太郎、御扶持方被召上兄へ御預ケ同八五郎、親へ御返シ櫻村民之丞、四人扶持蟄居加藤木左内右衛門、五人扶持蟄居藤咲傳之丞、七人扶持蟄居大森金八郎、揚り屋入平尾右近、同断根本新八郎、同断結城一萬丸、御役御免小普請松本金之助、三人扶持被下遠慮柏原八郎兵衛、本月五日御目付同心ノ者二人連ニテ水天宮へ參詣、帰途品川へ廻り候(谷田郡雲)処、谷雲同時ニ欠落ノ人物笠間折右衛門ト申者ニ出會、召捕帰候節、当人風呂敷包一ツ持居候ト申事、御用ノ筋有之候間、礫邸へ參り候様一人ノ同心ヨリ申付候処、スナオニ參邸ハ致候由、其后至テ緩々檢問有之候処、虚偽而已申上候由、当人ハ此迄三浦三崎ニ參り居候由申出候由、谷雲ハ不存ト申居候由、遂ニ敵問ノ沙汰、(疑々カ)其節御留守居同心邸外住居ノ者、右折右衛門朋友ニテ有之候処、折右衛門召捕頃ヨリ欠落致候ト申事、八半時西宮和三郎来話、去年両田戸田藤田庄死ノ節、谷雲酒店ニ在テ拍掌歡喜致シ、唯恨一人尚存耳ト申候由、一人ハ老公ト申事、七時過菊池帰ル、夕刻西宮帰ル、夜書經・孟子、午后稍暖、夕刻綿衣尚寒、

十二日、朝曇天、孟子課、孟子加註、抄書、武藤ヨリ書

状參り、祝山へ内話致度旨申来ル、依テ今夕芝_(芝)运行ク、夜孟子課、祝山帰来リ閑話、

十三日、朝稍欲齋、曇天、朝課書經、三方点竄、抄書、

朝四時林_(伊本題)ヨリ来状、蜂_(原田八兵衛)所_(へ)ノ託物来ル、朝巳之介ヲ七

曲リ薩摩様内重野厚之丞_(安釋)方へ遣ス、返書有之、朝

菊池来ル、午飯出ス、八時原八ヲ訪フ、不在、秋田へ

罷越、不在、山佐へ五經一部返ス、九經談ヲ求ム、夕

刻秋田へ行ク、水府処置、略紙_(本々)ヲ借ス、太西兵鑑ヲ納

ム、朝岡田屋ヨリ人来ル、夜小雨、暮時祝山_(ヨリ脱カ)帰来ル、

今昼結髪、

十四日、朝濛溼、不雨、書經・三方校、飛脚着、七日立

也、齊藤_(齋)十兵衛来、中根ヨリ目貫入状来ル、宿状、半

井・吉田・坪井共ニ米状、午后仮寝、抄書六枚、原書

校読、夕刻孟子、夜写本一枚、祝山今朝ヨリ彦邸へ罷越、

暮時帰来ル、今日七人扶持被下、素読被申付候由、同

人へ月瀬記勝・拔萃書・御遺訓相却ス、

四一七 橋本左内西郷・樺山面晤〔橋本左内日記抄

安政三年〕

五月_{四一七の一}十五日、朝秋田へ行、炎暑鬱蒸、稍欲齋、祝山今日ヨリ

十八日迄彦根邸へ罷越、右之断執法へ達ス、入浴、四

ッ時原八来留書去、加藤道菴来ル、閑話、早午飯、西

郷吉兵衛_(隆盛)ヲ訪フ、帰途原八同道、雨ニ逢フ、今年

ヨリ心忪甚シク、頭痛小齒疼ヲ覚フ、西郷ニテ馳走ニ

相成、八半時柘山三圓_(寶之)来話、夕七半時頃辭去、岡

田屋へ立寄、帰宅後速ニ刺絡ヲ行フ、血沓合、其血凝

結粘質稍結焮皮、夜直ニ就寝、服下剂、雨不止、小地

震六ッ過、曉方ヨリ大風、

十六日、半陰半晴、早朝蒸暑、三方校、写本五枚、午后

仮寝、不眠得、又写本、八時鹽谷ヲ訪フ、雲丹三遣ス、

經世文編・實用館讀例借リ来、墓碑題字ノ論・清朝林

則徐ナト賜恤候話、尾臺良策ニ逢フ、留守中原田敬作

来話、夕刻帰宅、

十七日、朝入浴、加藤道來、原八火ル、薩藩へ往訪ス、

樺山・西郷_(全)上ニ逢フ、樓堀ヲ脱云々、

廿二日、朝有風、蒸暑、飛脚着、宿状並早齋_(桑山)ヨリ書中夢

物語リ、樓某ヲダマシツ、ウエヒー共ニ國へ引込セ

度ト申事、御内御祐筆ヨリ内達ノ様子、第一画御いち

めも難忍見云々、外ニモ一二ヶ条原田ヨリ来状、武田

行、

廿三日、朝有風、鬱蒸、

廿六日、朝御祐筆部屋ヨリ御呼出シ有之、鴨頂戴、即

刻御礼申上、月番宇都宮勘ヶ由、

廿九日、文恭院様御十七回御忌御法事、鬨斗目麻上下着

用ニテ泉藏院へ相詰、朝六ツ時前、

四一七之二

學制彙集 塩谷輯

清朝友教書院式此ハ四大書院ノ一ナリ、四大書院ハ白鹿友教、

課業次第一齊外ニ個菴著述モ有 文年日程

海防危言贊潘長谷川惣

不恤緯 蒲生君藏著

刪定紀効新書 同撮解

文章一隅 尾藤ノ著ト申事

水干〔谷田郡雲ハ給城實壽〕

谷雲 結壽 太田丹波守 金澤伊太夫 今村喜左衛門

宮田助太郎 大峰庄左衛門 根本新八郎 横山兵藏

合羽九十郎 大森金八郎 十河船安 渡邊惣右衛門

弟 主介 大橋斧八郎 森 秀之介 佐野孫次郎

松本金之介 森 雄藏 會澤信平 合羽惣太夫

會澤清左衛門 櫻村安右衛門 同 民之丞 岡崎藤

左衛門 同新兵衛 小林安五郎大森隱伏者 藤田主膳其外三

水雄

白井織部參 中山與三左衛門右頭 矢野唯之允同役 高橋太郎

日向定之助勘 原 十左衛門任藏 袴塚弘藏父

佐々木道太郎当節御代官、武伝ヨリ承ル、

麻布狸穴 都田甲乙太郎馬之為洋字相始候人ノ由岩陰ヨリ承ル、

彦根 長野 主馬国学者、勢州産ノ様子

堀江芳之介日下部二三次 高鉄懸意酸鉄

仙台 赤坂甚左衛門

三好竹三郎

同 森 又之介田村右京大夫内

兩國村 松町 佐藤民之助繼信ノ胤ト申事、

加藤 孫市牧野遠江守家来

小川 宇忠次同鐵遣

佐野 東藏久留米藩留守居下役 精工家

龜田友次郎久世儒臣、鵬之齊ノ後ト申事 芳野隆造ヨリ并弥へ、同 人ヨリ桑山へ伝へ、桑山ヨリ承ル 放蕩家ノ内ナリ

真田愛 有川謙之進砲術家 佐久間ノ後引受

川越高輪 岩倉鐵三郎砲術師範

板倉 山田三郎

宇和島 松根内藏尤善ト申事 菊池ヨリ承ル、姓名 有志ト申事ハ夙板ヨリ承ル

有志 吉見左膳參政

柴田素樂河州謀臣、四ツ屋門外柴田肥前守父ナリ、一色豊 後守ヨリ手続有之ト申事、夙ヨリ承ル、河州ト内

縁有之ト申事高須ヨリ承ル、林肥後守、井上美濃守同復ト申事同人承ル

齊藤 定衛

西人福ノ権臣ナリ、当藩笹川氏親族ノ由

御玉ヶ池東條 文藏折衷字、齊兄弟ノ師ナリ、一堂号ス

監察 岩瀬 修理才吏ノ称アリ、夙ノ事周旋甚タ勉ム

全 大久保右近將監有志ノ由、夙ノ親友、菊池ヨリモ手筋有由、原ハモ友人ト申事

司農吟味 水野筑後守夙ノ知己、当時無比ノ正論家

本多中務少輔

監察 岡部駿河守直臣ノ称アリ、嘗テ近側勤居、慎徳公ヘ諫言申上候由

司農吟味 村松與三郎吟味役

大久保市郎兵衛同藩村田面識、有志ノ称アリ、夙モ親友ト申事相話ス

河瀬典次肥後在任侍ノ由、懇篤人ト申事、読書ハ格別無之ト申事、武田ヨリ承ル、同人武ヘ書状中左ノ名家有之

中川土佐豊岡 小川彌右衛門豊岡 田中寅太郎佐賀

以上三名有志ト申事有之、外ニ梁池、立ノ二名ヲ記ス、君側

肥前 増田忠八郎此人水府ヘ修学ニ罷越候者ノ由篤美人ト申事原ハヨリ承ル

同 原田小太郎有志彼藩永山ニ引就候人ト申事、林ヨリ承ル、後高須ヨリ承ル

肥後 丸山辰之助君及水ヘ為使指越候者ヘ也、銀台作事方、津山三掃園ノ砌、清田新兵衛留守居

同 京師 京極萬一郎浅野用人

贊 小普請 長谷川惣右衛門 岡井郡太夫 同 赤井元藏 何レモ首尾

同 垣 瀧川内膳 親本 田中七郎 秋山平藏 三笠

薩之上屋敷 西郷吉兵衛 鯨島正介友人、卯年極月廿七日始テ御庭方 於原八宅相会ス、燕趙悲歌ノ士ナリ

同 有志 山中甚左衛門 御小納戸 西郷ヨリ承ル 並安島弥次郎ヨリ承ル

同 文人 茂重ノ野弘 厚ノ之丞 原ハヨリ承ル、又西郷ヨリモ承、儒臣

同 有志 伊藤才藏 御小姓、鯨島 友人ノ由

同 山田惣社ノ右衛門 同 山崎廣江 拾ヒ 両人人物ト申事蓬萊屋和兵衛ノ話、古山ヨリ承ル

同 三原藤五郎 側用人 同 茂久ノ誤 重久 奥坊主

同 樺山三益ノ誤 坊主

同 夙板樓 麻布谷町、溜池大垣侯邸隣家、元来真田侯屋敷ノ由、彦根邸ノ鄰ニ相成候由

菊 爲 下野本庄安芸守領小生川村長庄兵衛往返立、武州鴻巣在安養寺村恒見舞、源之介

往來共日光道中、栗橋宿岡野斗平ヘ立寄、十日頃十二三日迄滞留、日光街道石橋宿本陣儀十郎ト平キ在西方村石川又太郎方ニ八日ヨリ九日マテ逗留、此人

横山銀三郎陣屋代官ナリ 蒲生君藏之墓谷中臨江寺ニアリ

(橋本巽岳全集(日本史籍協会叢書)にて校訂)

〔表紙〕

齊彬公史料

市來四郎編

安政二年

〔扉に、表紙の文字の外に「元国事執掌史料（紙数三四枚）」の記載あり〕

目録

藩内石高地所検見来由

四一八 藩内石高地所検見来由

日向五郡ノ内

高拾二万二拾四石五斗八升 諸縣郡

高七万八千八百六拾九石九斗九升四合三夕

高四万八千五百五拾四石五斗八升五合七夕

薩 隅 日

田方 畠方

慶長拾九年御内検御竿

一高頭六拾壹万九千五百五拾五石八斗壹升

内

高壹万三千百九拾貳石壹斗七升九合

京竿文禄二年豊臣氏ノ檢地

フ云、後卷ニヨリ増
記スカ如シ

但高壹石ニ付綬壹石五升廻リ初テ御内檢地ニ相改

申候

内

高貳拾五万六千九百八拾石五斗七升余

薩摩国

外高五万八千二拾五石三升 京竿上全ヨリ引入

高貳拾万千三百拾壹石三斗壹升

大隅国

内高三万四百七拾七石八斗五升九合 京竿上全ヨリ

増

高拾六万七百六拾三石九斗三升余

日向国ノ内諸県郡

内高四万七百三拾九石三斗五升 京竿上全ヨリ増

薩隅日

寛永十年ノ竿、慶安五年ノ竿込ル

一田畠屋敷五万四千四町八反六畝余

内

田方 二万五千八百九拾三町七反六畝八步

畠方 二万七千七百二十町六畝五步半

屋敷 三千三百九拾町四反三畝四步半

寛永十年ノ竿并慶安五年ノ竿込ル

一高五十七万二千六百八石八斗六升六合七夕

但高一石ニ付粃九斗六升廻

内

田高 四十七万三千五百二十三石七斗三升

畠高 九万六千二百六十石四斗八升六合五夕

上木高桑・茶・柿・梨等ノ千六百五十九石一斗二升六合

樹ノ通語、以下全 三夕

塩浜高 千六百五十五斗二升四合

右三州之内

一田畠屋敷二万二千三百三十二町三反二畝三步半

薩摩国

内

田方 一万三千三百十六町八反四畝十一歩

畠方 八千三百十二町七反二畝二十歩

屋敷 千五百二町七反五畝二歩半

一高二十五万四千六百六石九斗九升五合六勺七才

右同

外ニ京竿ヨリ引入

高六万八百八十八石六斗五合

慶長竿ヨリ右同

高老万二千八百六十三石五斗二升四合三勺九才

私考

高二千八百六十三石五斗七升四合三勺九才

内

田高 二拾老万二千六百六十三石八斗七合老勺七才

畠高 四万三百六十三石三斗三升三合二勺六才

上木高上全七百二十五石七斗四升四合八才

一田畠屋敷老万八千二百八十七町三反老畝拾老歩

大隅国

内

田方 八千二百拾四町老畝廿一歩

畠方 八千九百四十六町九反五畝

屋敷 千二拾六町三反四畝二十歩

一高拾九万二千七百拾石老斗八升四合六勺七才

内

田高 拾五万五千三百拾五石四斗九升八合三勺

右同

島高 三万六千六百三十石八斗五升五合二勺六才

上木高^全 四百六拾二石四斗卷升八合六夕二才

塩浜高 三百卷石四斗卷舛二合五勺

一田島屋敷卷万五千八百八十五町二反二畝拾步

日向国ノ内
諸県郡

内

田方 五千八百九町二反四畝拾八步

島方 五千拾四町六反四畝拾步

屋敷 七百六拾卷町三反三畝拾二步

一高拾二万五千七百八十卷石六斗八升六合

右同

内

田高 拾万五千二百三十五石二升六合

島高 二万七十五石六斗九升六合

上木高 四百七拾石九斗六升四合

薩 隅 日 三 州

萬治二年引并竿

一田島屋敷六万二千四百四十四町八反四畝廿步

寛永竿ヨリ増

田島屋敷卷万千百三十九町八畝二步

田方 三万八千八百二十三町二反七畝拾六步半

増田方 五千九百二十九町五反卷畝八步半

島方 二万六千四百四拾五町二畝廿二步

増島方 四千七百二十四町三反二畝十六步半

屋敷 三千八百七十六町五反四畝拾七步

増屋敷 四百八拾六町卷反卷畝七步

萬治二亥年引并竿

一高頭六十二万九百七十卷石六斗四升四合卷勺八才

但高卷石付九斗六升廻

内

高卷万五千九百九十九石七斗

但萬治二亥年御支配ヨリ以後寛文七年未六月二日

仕明込

高六十万九千三百七十卷石九斗四升四合九勺八才

内

高三万六千七百六十三石八升三合四勺

寛永竿ヨリ増

一高三千五百八石三斗卷升三合

京竿ヨリ増

田高 五十万三千六百六十七石五斗五升八合

高三万四千三百八十八斗四升八合四勺

但萬治二年亥御支配ヨリ寛文七年未六月二日

仕明方込

畠高 拾万二千八百三十七石六斗八升七合九勺

高六千五百七十七石二斗九勺九勺

寛永竿ヨリ増

上木高 千八百六十五石一斗五升八合二勺

高二百六石三升壹合七勺二勺

右同

塩浜高 千壹石五斗四升八勺五勺

外高百六十三石九斗八升三合壹勺五勺

右同引入

萬治二亥年御支配ヨリ以後寛文七年未六月二日相究仕

明增高

田畠高 壹万五千五百九十九石七斗

一田畠屋敷二万五千五百七十六町六反三畝拾壹步

薩摩国

内

田畠四千四百四十四町三反壹畝七步半

寛永竿ヨリ増

田方壹万四千八百三十八町七反二畝十二步

田方三千五百二十一町八畝一步

寛永竿ヨリ増

畠方九千六百四十四町二反六畝半步

畠方三千三百三十一町五反三畝十步半

右同

屋敷千九百三十三町六反四畝廿八步

外屋敷四百九町壹反四步半 右同引入

一高二千七百二千三百六十六石壹斗七升五合六勺三勺

薩摩国

内

高壹万八千二百四十九石壹斗八升二勺

寛永竿ヨリ増

但萬治二亥年御支配ヨリ以後寛文七年未六月二日相究仕明増込

日相究仕明増込

内

高壹万六千六百四十五石二斗六升六合七勺引并増

高千六百三十三石九斗壹升三合三勺七勺仕明増

田高三十二万六千六百六十六石六斗壹升八合八勺五勺

高壹万三千九百五十二石八斗壹升壹合七勺四勺

寛永竿ヨリ増

畠高四万三千百六十六石卷升二合七勺九才

高二千八百二石六斗七升九合五勺三才

右同

上木高七百六十六石八升四合七勺

高四十石三斗四升六勺二才 右同

塩浜高七百拾三石五斗四升五合七勺卷才

外高百五拾石五斗六升五合二勺三才

右同引入

外高四万二千六百三十九石四斗二升四合三勺七

才 京竿ヨリ引入

萬治二亥年御支配後寛文七年未六月二日迄相究仕明増

田畠高千六百三十九石九斗卷升三合三勺七才

萬治二亥年引并竿

一田島屋敷二万千八百八十八町三反七畝廿八步

大隅国

内

田畠屋敷三千六百卷町六畝十七步

寛永竿ヨリ増

内

田方九千七百六町四畝三步半

内

千四百九十二町二畝十二步半

寛永竿ヨリ増

畠方卷万六百十九町四反五畝卷步半

内

千六百七十二町五反卷步半 右同

屋敷千五百六十二町八反八畝廿三步

内

四百三十六町五反四畝三步 右同

一高二十一万四千五百三十三石四斗九升二才

大隅国

内

高四万三千七百石三升九合 京竿ヨリ増

内

田高拾六万六千三百五十六石二斗四升五合二勺卷才

内

高卷万千四十石七斗六合九勺卷才

寛永竿ヨリ増

畠高三万九千二百四石七斗六升卷合六勺五才

内

高二千五百七十三石九斗六合三勺九才

右同

上木高四百四十一石六斗三升四合九勺五才

外高二十石七斗八升三合六勺七才

右同引入

塩浜高二百八十七石九斗九升五合老勺四才

外高拾三石四斗老升七合三勺六才

寛永竿ヨリ引入

萬治二年御支配後寛文七年未六月二日迄相究仕明増

田島高八千二百四十二石八斗五升三合八

萬治二年引并竿

一田島屋敷老万四千六百七十九町八反三畝二十卷少半

日向国之内
諸島郡

内

田島屋敷三千九十四町六反老畝老步半

寛永竿ヨリ増

内

田方七千二百七十八町五反老畝老步半

内

田方千四百六十九町二反六畝十三步

寛永竿ヨリ増

島方六千百八十一町三反老畝二十步

内

島方千六百六十六町六反七畝十步

寛永竿ヨリ増

屋敷千二百二十町二十步半

内

屋敷四百五十八町六反老畝八步半 右同

一高拾三万四千七十卷石九斗七升九合五勺六才

内

高老万四千五十七石三斗九升九合五勺

京竿ヨリ増

内

田高拾一万千九百九十四石六斗九升三合九勺六才

内

高五千九百五十九石六斗六升七合九勺二才

寛永竿ヨリ増

島高二万四百六十六石九斗老升二合六勺五才

内

一代成三斗五升ノ上、役米代米ノ二斗相重為申由候、

一田畠不熟仕、御定ノ三斗五升代不納ノ年ハ、檢者見分

ノ上代成被仰付事ニ候、他国之儀ハ凶年豊年相並諸代

ニ仕候ニ付、何様之凶年ニテモ請代ハ上納仕候由承候、

御国之儀豊年ニハ大体六七斗代ニ相廻リ候得共、定代

三斗五升外ハ相納不申候、此段ハ百姓御救ノ方ニテ御

座候、

一御引並幕府ノ命ヲ俟タ
ス檢地ノ通唱前ニハ諸外城無人ノ在所水陸田多ク、
耕人少キ所ノ

唱作高過分寛語仕、不及手者間々有之、荒地又ハ殿役

ニ作高過分有之候ニ付、御分国中人配移任人被仰付、人

居多在所ヨリ過分被召移御支配御座候由承候、然共菱

刈・眞幸・祢答院・庄内表、其外無人ノ諸所ヘハ漸々

百姓被召移候故、当分ハ前廉ノ様ニハ無之候、御引並

御支配ノ時分、郡座ヨリ諸所ヘ被仰渡候書付並諸帳不

殘見届申候処、第一御分国中無人ニテ依外城不カ下相カ

作職仕、作毛出来前悪敷、且又無作高不耕廢田有之候間

田地不荒様ニト御家老中ヨリモ稠敷被仰渡候得共、無

人之所ハ手及不申候ニ付、自ラ殿役作罷成、未熟仕

候故、右通移門脱カ百姓被仰付候由候、

一其以後郡奉行菱刈孫兵衛・汾陽次郎右衛惣田地奉行被

仰付、御分国中田地方差引被仰付、其下ニ郡奉行御座

候ニ付、田地仕付方・上見風水早蟬ノ為納額
減少検査ノ通語・井手・溝・

溜池・川除等ニ至迄、別テ入念下知有之候、

一諸外城諸役人精ヲ出シ、御奉公相勤候人ヘハ御褒美ト

シテ、御銀并高被下候付、別テ肝煎相勤申候、尤役替

杯被仰付候節ハ、人柄ノ善悪迄吟味仕被仰付候ニ付、

惣テ役人モ能ク相勤申候、

一御引並以後未進究檢者被仰付、諸所ヘ差越相究候故、

不合ニ未進イタシ候百姓並作人無御座候、

一田地座代田地座又ハ郡座、近
代郡方郡奉行ト唱フニ取納究稠敷被仰渡候ニ付、

不相応ノ未進致者無之候、大分ニ未進有之候百姓ニハ、

實マキ刑ノ名ニ可仕旨被仰渡、間々不埒者實卷ニ仕候檢

者モ為有之由候、

一御引並御檢地ニテ高甲乙有之、諸百姓迷惑仕候所、例

シ竿之上、高上下為有之所モ方々ニ御座候、

一惣田地座末ニ郡奉行モ不案内ニ有之、諸所ヨリ直リ竿

其外何角ノ訴申出、田地仕置相乱レ候ニ付、世間ニモ

何角ト申分為有之由候、依之追付田地座被召置候事、

一成年丹波清ヨリ惣郡座被召立、彌彌殿御差引罷成候ニ

付、諸外城直リ竿一向被召留候、且又例シ竿ニテ高相

下り候所、本高ニ被仰付諸所モ有之候得共、于今御定
代致上納所モ有之候事、

一 耕作方ノ事、春初ヨリ檢者被差遣打起仕ニ付、草取女
童迄作場ニ罷出候様、稠敷被仰付候ニ付、檢者前ヨリ
仕付草取ニ罷出候共、朝未明ニ星合(到九)着倒ノイタシ、耕
作ニ罷出候様相肝煎入念候故、四方出来前格別相替リ、
能ク出来申候事、

一 俵作米拵入念候様ニ被仰付候故、前方ニ相替り結構ニ
罷成、御仕上セ方モ御米ノ直成高直ニ有之由候事、

一 百姓徒ノ夫仕仕役ノ通唱、一名公役ト唱フ並出錢・出来被召留候故、百
姓勝手罷成候事、

一 古屋シ肥料ノ通語馬屋小便溜其外古ヤシ全等ニ入念候様、檢
者前ヨリ下知可仕旨被仰渡候ニ付、其通於諸所致差引
候ニ付、諸百姓勝手ニ罷成候、惣郡座被召置候以後ハ、

右体ノ儀大形罷成候得共、作方入念候モノハ于今其通
仕候事、

一 春初ヨリ山野作陸水田ニ現地・山野地ノ二種アリ、現地ハ量丈ヲ
經タルヲ云、山野地ハ開墾試作地ノ類ヲ云フ
迄、打起候様ニ檢者ヨリ下知仕候故、百姓勝手ニ罷成
候事、

一 取納究年終ノ善悪ヲ檢見シテ
納期納額ヲ定ル通語之儀、秋初ヨリ檢者余多被差

遣、稠敷下知有之候故、当納米之儀ハ不及申御蔵入諸
給地(古)右未進米迄漸々取付、公私共勝手罷成候事、

一 右之通ニ段々丹波丹波殿ヨリ勸農之儀被仰渡候ニ付、
丹波殿ヨリ勸農之儀被仰渡候ニ付、
万事宜儀ノミ御座候処ニ、役米公仕役
代米一升ノ重被仰付
候故、百姓心入相替候、最前ノ様耕作方一編ニ精ヲ出
候様ニハ被仰付候ハ、諸作人落着仕、漸々祐分仕筈御
座候、右重米ノ儀ハ内々婦服不仕ノ由候、兎角仕置之
儀ハ、土民ノ進候様ニ頭取ノ役人ヨリ申付候儀肝要之
事候、

萬治二年亥秋ヨリ天和元年酉秋迄、

一 御新田方出来高三万四千三百九十二石六斗五升五合四
勺三才

一 高頭老万五千六百二石八斗六升卷合六勺五才

諸士仕明給分自墾
地

一 高頭千五百六十七石八升二合五勺老才

御下屋敷仕明高藩庁
開墾地

惣合出来高五万五千五百六十二石五斗六升九合六勺

九才

御新田方所務取種ノ
通唱代銀

一 惣合銀八千百五十六貫五百七十四匁九分老厘五毛

右之内返上分

寛永六年午年ヨリ以来度々相納、

一銀四百七十五貫六百九十九匁二分

右本入目銀返入トシテ、御納戸御蔵ニ國分与代官

証印帳見届、如此ニ候、

一同五百四十四貫八百七匁

右ハ御入目ノ内返上銀トシテ、二ノ丸^{御隠居方}御方

ヘ先年御高二万石被附置候内、壹万三百石余増高

ノ内相附候、寛文十年戌秋ヨリ同丑年迄四ヶ年分

御年貢代トシテ二ノ御丸御方ヘ相納、並其以後右

同所御高壹万石相附候内、高三千五百壹石余延寶

五巳年ヨリ天和元年迄、五ヶ年分所務代銀相納候

内ヲ以テ本入目返上方差引、是ニテ皆済、

一銀二千二百六十二貫三百九十二匁七分壹厘

右ハ井手溝方御修甫銀トシテ、國分与御蔵並帖佐

組^{國分帖佐高組ノ名唱及ヒ源因}御新田蔵ヨリ被相払候、

此節大増高所務代銀ノ内ヨリ引除ケ、是ニテ惣御

入目皆済、

残テ

御徳銀四千八百七十三貫七十六匁五毛

右ハ御新田方ニ付檢地相除、御取納高如此御座候、此

外之開地未御竿入見掛ニテ御年貢相納、地方御下屋敷

御新田諸所仕明被相附分、諸所^上郡見廻役分地トシテ

相開候田畠、并百姓仕明・諸所大山野相加不申候、右

之外水不廻ニテ、干損地位御定代罷成候増過分ノ儀ニ

候得共、右之総ニ相込不申候、御入日本払諸役人年々

御勘定被逐相済申候、時々総衆被仰付、右諸帳ヲ以テ

兩三度総有之候跡、八ヶ年分去ル戌年総如此御座候、

以上、

丑十一月八日明和六巳丑乎

村尾源左衛門

村田五郎左衛門

汾陽次郎右衛門

菱刈孫兵衛

右之通先年総衆被仰付、諸座並代官帳面被見届、

総帳書写如此御座候、

一出来高二万斛余

但惣田地座御竿入御新田、並惣郡座代ヨリ当分迄

御竿入候御新田高、並帖佐組御新田高、大抵右員

数可有之ト相考申候、総無御座候故究テ難申候、

一 江戸上方ノ田地仕置之様子、大抵見聞仕候処、先年江戸御代官衆百姓ノ仕置、其外諸事ニ付段々得ト見申候処、御檢地其他ノ百姓御仕置ノ儀、御国許地方百姓仕置ノ儀、コト葉ハ替候得共、爰許功者之郡奉行杯被相究置候儀ニ、道理ハ少シモ為替事無之候、

一 江戸並上方ノ道中田地ノ作職見合候処、田地ノ作様ハ加治木・國分・牛根・根占、其外人居多キ諸所下拵仕付ヨリ、都テ廬相仕候様ニ見及申候、麦地其外作之儀ハ相替、入念草取・追コヤシ仕候ニ付、出来前以ノ外能ク御座候、御分国中モ麦作入念、尤コヤシ覚悟第一ニ候ハ、出来増有之、百姓飯米ニ行迫リ不申筈ニ候事、一 当時ハ御分国中大形人居モ相応ニ有之、殿役作之田地モ無之候、併那答院・麥刈・眞幸其外ニモ無人ノ在所御座候間、左様成所ヘハ移百姓被仰付候ハ、作地モアマエ御精ノ意不申、漸々ニハ百姓モ祐分可仕候事、一 只今ハ諸外城諸役人モ百姓共ニ心入悪敷罷成候間、改不仰付候次第、郡座仕置相乱レ可申ト存候条、手ヲ替被仰付度儀、左ニ相記申候、

一 他国之儀、御領ハ御代官、私領ハ郡代ト毎年毛上作毛ノ通語ノ上中下ヲ相糺取納有之候得共、百姓計ニテ作職仕候

ニ付、上方京撰ノ通唱ノ儀ヲ別テ重奉存、訴ケ間敷儀不申出候由、是ハ頭取ノ重キ故、何事モ心次第罷成、締方モ宜ト相見得申候、

一 御国ノ儀、諸外城ヘ衆中人内外城土着ノ通唱、寺門前・杜家・浜町人共ヨリ入作仕候ニ付、田地方ニ付上見檢地取納究、又ハ御新田方開ニ付、移其外少ニテモ自分不勝手ニ相成儀御座候得ハ、田地方差引座並檢者杯申付様ニ方々ヘ内証ヲ以テ漸々申達候ニ付、御無案ノ方ハ尤ニ聞召候故、田地方仕置悪敷様ニ、世間風聞有之候ニ付、七八ケ年ノ間ニテ座相改候欵ト覚申候、左様有之候テハ田地方差引御為宜様ニト、何様ノ人被承候テモ急ニ御国中仕置相直リ可難成ト存申候間、田地方差引ノ善悪申人於有之ハ、屹ト被成御糺候テ、田地ノ仕置悪敷イタシ候人ハ科ヲモ被仰付、且又無私仕候者ハ御褒美ヲモ被仰付候ハ、漸々田地方ノ仕置相直リ、無限御為宜儀出来可申ト存候、

一 田地方ノ儀ハ、成程重キ御方御一人ニテ御請取切被遊、其下ニ御用人位ノ仁兩人、郡奉行四五人程被仰付、従前ニ宜儀ハ御詮議ノ上其筋ニ被仰付、田地方一篇ノ御差引ニテ御座候ハ、先々之儀ハ御領國中過分出来重采カ

米モ有之、年貢未進不仕、又古未進古來納米ノ通稱迄ヲ相納、漸々ニハ山野迄相開可申ト存候、右如申上候脇々ヨリ、何角ト批判仕候ヲ被成御取持、無御詮議御仕置相替候様ニ被仰付候得ハ、何様ニ御為宜可仕ト存候テモ不叶事ニ候事、

一 萬治二年御引並以來御新田高四五万石余出来仕候ニ付江戸春身賦足懸以下一身ノ食料給与者ノ通稱、其給額ハ一月ニ白米壹斗五升、金式分トス、其外下屋敷御高帖佐組御役分高役料高トモ唱フヲ被下、御勝手宜儀御座候処、御新田出来仕、百姓身上行迫候様内々申触候故、御不案内の方ハ其通ニモ可有之哉ト可被思召候得共、左様ニテハ無御座候、其子細ハ萬治御引並以來御新田高過分相増候得共、百姓痛ニ成候所無御座候、都テ先年早損ニテ、古田ノ内モ大分代下リ有之候、其節モ水廻ヲ以テ熟田罷成候、尤無功成竿頭ヨリ新田ニ俵盛ヲ古田同前ニ仕、惣百姓痛ニ成候処モ有之候、左候所ハ俵盛ヲ少々心易仕候へハ百姓祐分仕候、然共身上能キ候段申出土民ハ絶テ無之候、惣テ諸百姓行迫候儀ハ前方ニ相替、妻子ノ衣類ヲ鹿兒島同前ニ仕、其上徒ノ事ニ銀錢ヲ遣候ニ付、年貢致不足候間、他ノ様無役ニ被仰付、万端欠略仕、専耕作方ニ精ヲ出候筋ニ、百姓ハ

勿論ノ儀作職仕候面々迄稠敷御下知被為候ハ、次第ニハ御分國中上下共ニ豊ニ成可申ト奉存候事、

一 海辺ニハ柵木御仕立被成候ハ、無程太分ノ御徳分可有之候、櫻島杯ハ纒成ル地方ニテ候得共、御徳銀凡四五百貫目程モ有之由承候、柵仕立様之事モ此中ノ通ニテハ百姓不奉得其意候間、柵方一編ニ其檢者被仰付、其外下ニ所役人之内柵見廻ニ被召成、少々御扶持被下無油断差引仕候様被仰付、向之島一名、柵島同前ニ畑石ヲ柵ノ実ヲ以テ上納仕候様被仰渡候ハ、往々ハ無際限植付可申候条、是程之御為ハ余ニハ有少可有之考申候事、一 海辺遠キ田地障無之所へハ、不依誰人漆仕立ノ儀ヲ御免許被成、生長仕候節、三ヶ一・四ヶ一ノ間、公儀藩守ヲ云、近代ハ幕府ヲへ被召上、其外ハ植付候人へ被下候ハ、太分仕立可申存候、従前ニ木竹仕立候得ハ三ヶ一可被下由被仰渡候得共、植付ノ人差テ無之、兎角自分ノ植付ノ様ニ被仰付候ハ、自ラ仕立可申ト存候、漆致盛長候節被召上候歩一ノ十分外ハ、公儀上ヨリ相応ノ直成ニ御買入被成候ハ、仕立候人モ勝手ニ罷成筈ニテ候、当分ハ漆他国ヨリ御買入罷成由候、尤御国ハ漆仕立相応ノ地方ニ御座候得共、作得

御竿仕候テモ、右員數ハ增高出来可申ト見及申候、

右宮内原御新田場鹿尾島神ノ通唱程增高多出来申所ハ御國中ニハ無御座、前方ヨリ承候御銀サへ御入レ被遊候得ハ、御普請成就仕、往々

開場ノ由兼々承候ニ付、氣ヲ付普請ノ方便諸所御新田井手溝等見合、數年目論見申候御銀右ノ員數入申候ハ、大抵御普請二ヶ年程ニハ成就可仕、御新田ニ可罷成哉ト見及申候、右仕明場私見分仕、目論見申候溝口ハ日当山ヨリ安樂へ参り候道筋、嘉例川坂ノ下ヨリ水仕懸申賦ニテ御座候、右通ニ候得ハ宮内八幡一ノ階溝筋ニ罷成、下墨御座候付宮内原濱之市道筋高見ノ畠陸田ヲ水田ニ変スルヲ迄水相掛管御座候、

一 右石場ノ儀ハ大抵コロヒ石雜石ノ通唱ニテ御座候間、下リメ石カクラサン万力機械ノ通唱ナトニテ挽下シ、大石ニテ難挽下石ハ刻除キ、又ハ堅木ノ大丸木ヲ以焼崩シ、其上ニテモ焼兼候石ハ吹籬ノ通唱等ヲ仕懸ケ焼候ハ、如何様成堅石ニテモ焼崩申管ニテ御座候、左候テ溝底ヲ平等ニ仕、溝浚双方土手ニ仕調申候ハ、用水無滞相通シ可申ト相考申候、先試ニ石場ノ内ヨリ普請仕見申度存候、右

石場ノ所サへ御普請相濟申候ハ、其余ハ大形畝堀ニテ相調候御普請ニテ御座候、

一 八幡階ノ前ニ溝相通シ、御供田神供田ノ略唱迄モ掘リ通シ申管ニテ候、然ハケ様成大普請ハ年月ヲ経候中、或ハ普請夫怪我モ有之、或ハ破損仕候所モ有之義ニ付、左様之節ハ神慮ニ違候杯ト申触候者有之、普請夫進ミ不申、又ハ人ノ疑ニモ罷成、往々障ニ罷成候儀共到来仕儀モ可有御座候、就夫御普請被仰付候儀ニ御座候ハ、階ノ迄溝双方石垣ニ被成、石ノ反リ橋杯成就入念見分能被仰付候ハ、景氣モ能ク罷成、其上御祭田トシテ出来高ノ内ヨリ二三百石程モ八幡へ被召附候ハ、社人迄モ帰服仕、先々申分モ有御座間敷ト相考申候、

一 宮内全社人屋敷ノ儀モ過半溝下ニ罷成管ニテ御座候得共、古来ヨリ被成下候屋敷ニテ御座候ニ付、先御新田開方ハ相除申候、

一 安樂川水ヲ惣様溝ニ仕掛申管ニテ御座候ニ付、水勢強ク用水ノ不足ハ有御座間敷ト存候、國分之儀ハ作人過分御座候得共、右畠開被仰付候テモ作人ノ支ハ有御座間敷ト存申候現在水天淵ト唱フル是ナリ

一 畠田成御新田有之在所ハ、諸百姓勞入ノ由申人モ有之

由候得共、菱刈・眞幸表ノ儀ハ百姓居屋敷ノ外島高差
テ無御座、其上遠方津下海岸ニ運搬ノ通鳴ニ往来運送ニ隙ヲ取、旁
不勝手ノミニ有之候得共、別テ身上行迫リ候筈ニ御座、

候得ハ、古来ヨリノ御檢地其見合ヲ以テ致高賦候ニ付、
相替リ為勞者無御座候、然ハ御新田故百姓身上行迫リ
ナトトハ難申候、諸外城へ前々ヨリ御新田有之、致祐

分候所多々御座候得共、御新田故百姓身上不相統由申
出所ハ無御座候、惣テ御新田御竿ノ節、古田倭盛等其

外見合竿頭ヨリ致高賦候得ハ、百姓行迫ヘク様無御座
候、万一無功ノ竿頭其考不致、古田並ノ倭盛相懸申候

ハ、百姓不勝手罷成、勞入所モ可有之候、其段ハ古田
計ノ所モ同前ニ可有御座候得共、御檢地ノ致様ニ依ル

儀ニ候、御新田故トハ難申候、
一國分ノ内小田村・野久美田村・見次村・濱ノ市村干損

地ニテ御座候故、早ノ時分百姓迷惑仕候間、右溝相立
候ハ熟田罷成、百姓勝手能可罷成ト存申候、

一 銀百貫目程

出水

但井手溝諸入目銀

一 出来高三千五百石余

右ハ出水大川内ヨリ大川ヲ開キ、麓町土族住居ノ村名ノ衆中屋

數半分辺へ溝堀通、平川へ堀入レ、夫ヨリ武元村衆中
屋敷半分、上知識村・下知識村百姓屋敷並大野原半分

海ノ方田齊彬公開拓命セラレシ条ニ参照スベシニ相開筈ニテ候、左候テ衆中
百姓ノ儀、大山野へ召移候者ハ水勢次第ニ相溜リ、御

高ハ大分ニ出来申筈ニテ候、先当分ノ用水ニテハ、右
員數增高可有之ト相考申候、

一衆中百姓大野原へ召移候得ハ、吞水遠ク罷成リ、不勝
手ニ有之候ニ付、先年八木主水ヨリ溝筋自分相立候処、

徒ニ捨置候古溝修甫仕候テ、溝堀次キ申候ハ大野原高
見口用水相廻可申条、吞水支無之、別テ勝手ニ罷成筈

ニ候、然ハ屋敷モ相応ノ御竿入丈量ノ名旁可然ト存申候、
御新田ニ被仰付可然ト存申候、去年安永八己亥三原六兵衛其

外定溝見廻同道ニテ見合為申所ニテ候、
天和二年戊秋ヨリ寶永二年酉秋迄二十四ヶ年御新田方

一増高三万四千三百九十二石六斗五升五合余
納米二十七万七千六百二十七石壹斗

但豊凶年並占三斗代

代銀壹万二千三百八十壹貫三百五十五匁

但壹石ニ付五十目直代

此一冊大迫彌右衛門祖父大迫彌兵衛所持被置候由、彌

兵衛認置候哉、又ハ別人ノ筆記ニテ候哉、此節勸農方
御シラベニ付、以後御見合ニモ可相成哉ト写置事、

安永九年子十一月

右大迫彌兵衛殿事、郡奉行御役ヨリ物奉行へ御役替
被仰付、右御役ノ内依願首尾能退役、其後享保年中
御領國中御引並大御支配有之、其節寄郡奉行被仰付
相勤候者ニテ候事、

此書ハ道島正亮カ藏書中ニアリ、曰ク、嘉永五年ノ夏御手
許御書写本所ニ於テ私ニ写シ取云々、近年大御支配被仰出
筈ニ付、古今ノ書冊余多御集メノ其中ニアリ云々ト記セリ、